

寺町まっせん



寺町まっすぐ

細くて曲がりくねった道の多い金沢で、長くまっすぐな道が続く寺町通り。その寺町のまっすぐな道を、人の性格に喩え、「性格がまっすぐで正直な人」を指す。

はじめに

小学校、中学校、高校の入学式・卒業式に先生が話されたことは何一つ覚えていない。大学の入学式・卒業式には出席できなかった。教養課程から専門課程への進学式、当時の倉知医学部長の挨拶の中で「勉強に忙しくて、お昼の弁当の時間がないほど勉強忙しいよ」と言われたことは鮮明に覚えている。実際、家に帰った時、カバンが重いなど感じカバンを開けたら、お弁当がそのまま残っていたことがあった。

平成二十年の学長就任後のある会合で高校の同級生が「中村さん、『計画は無理なものを立てる』（二水新聞、第51号、一九六二）ということをよく覚えてるよ」と話され、書くことは意義があることを知った。

それから遡ること二十数年前、弓道部の追い出しコンパで卒業生の一人が、「私は入学オリエンテーションの時に中村先生が話されたことを実行しました。『英語を勉強する、恋をして失恋

する』と挨拶された。挨拶の重要性を身をもって感じた。

このようなことから、学長職にあった六年間に発した言葉を自分自身の検証を含めて、一冊の本にまとめることとした。

平成二十六年三月

中村 信一

心のふるさと金沢

星薬科大学学長 田中 隆治

「美しき川流れたり、その川のほとりに我は住みぬ」と室生犀星がその四季と若き日の青春の地をたたえた金沢の街に私も四年間住まいし、四季の移り変わる犀川をながめながら青春を謳歌した忘れがたい街です。多くの友人に出会い、将来を託する研究生生活の第一歩もこの街から始まったように思います。生涯、忘れることのできない友人、山本 庸夫君に出会ったのもこの街でした。理学部の同級生で、きれいなボーイソプラノの持ち主、彼に誘われて金沢大学の混声合唱団に入部、私はついに卒業時まで籍を置く羽目に、一方彼は夢を求めて教養課程を修了すると、日本航空のパイロット養成大学に進級していきました。その後も度々親交を温め、互いに将来を夢見、共に生涯の希望を語り合えるはずでしたが、昭和四十七年六月十四日、インドのニューデリー空港の郊外にて着陸に失敗し、彼は副操縦士として、その短い生涯を終えたのです。私の結婚式の司会をし、フライトの日程を変更してしまつた偶然がこのような別れに繋がつてしまつたことが、私には最もつらい、忘れえぬ思い出です。その後、私は企業の研究所で年月を重ね、時には妻の実家の金沢へ出向く事はあつても金沢に強く思いを寄せたことはありませんでした。金沢大

学卒業後、約四十年、平成十九年十二月、中村信一学長から突然お話をいただき、あまり考慮もせず、平成二十年度より金沢大学の非常勤理事として中村学長の補佐をする役割を拝命することになりました。今にして思うに、中村学長との出会いが金沢の街を私の心の故郷に変えていったような気がいたします。大学の理事と企業の研究責任者という二足のわらじは様々な効果を引き出しました。産官学連携が強調される社会の中で多くの官庁の委員会に出席する機会ができたり、金沢大学のグローバル化政策の一環として、中国の大学連携の手伝い、競争的公的資金獲得の手伝い等しながら大学の活性化の在り方を学ぶ機会を得、時を過ごし、結果的には思いもかけなかつた大学の学長に自分の人生の最後の一周を捧げることになってしまいました。今では中村先生は誰よりも親しい先輩であり、最も信頼のおける先生でもあります。私が青春を謳歌した同じ時期に、同じ街の、同じ空の下で過ごしながら、一度たりとも交わることがなかつたにもかかわらず、少しの触れ合いがこのような思いに変わる人の出会いの不思議さを思うのです。同様の出会いは長い間に何度も繰り返されてきたにもかかわらず、中村学長との出会いは特別のように感じるのです。親しい友人との偶然的の別れ、配偶者との出会い、そして中村学長ご夫妻との出会い。これらの出来事が「心のふるさと金沢」を私の中に醸成してきたのかもしれない。このようなご縁を作っていたいただいた中村信一金沢大学学長に心より感謝申し上げ一文を捧げます。

平成二十六年三月

目 次

はじめに

中村 信一

心のふるさと金沢

田中 隆治

1 金沢大学入学宣誓式、学位記・修了証書授与式告示

平成20年度

直観と教養 — 14

守破離 — 18

「寺町まつすぐ」の精神で進む — 20

研究の倫理的側面 — 25

平成21年度

自己の存在理由 — 27

「希望に満ちた」世界の構築 — 33

日本文化、今の太陽とともに生きる世紀 — 35

平成22年度

人生の師との出会い、強い金沢大学生 — 41

どちらの道をとるか ― 47

鷗外の慧眼 ― 51

平成23年度

漱石の嘆き ― 57

学問の府としての矜持 ― 65

人間と科学技術の折り合い ― 70

平成24年度

創基百五十年 ― 76

自己の立ち位置、格差の無い豊かな社会へ ― 82

平成25年度

生涯のこよなき宝もの、それは友 ― 87

個性を磨く ― 94

2 金沢大学学域学類発足記念式式辞

文明の大転換期 ― 102

3 創基百五十年記念事業

アジア五大学学長フォーラム in 金沢

開会挨拶 連携と発展 —— 106

基調講演 「社会のための大学」〈アジア諸国と通底する文化を見据えて〉 —— 108

式典式辞

〈先魁〉〈共存〉〈創造〉 —— 128

祝賀会挨拶

留学生支援キャンペーン寄附募集宣言 —— 132

創基百五十年史

明日の金沢大学 —— 134

記念植樹挨拶

学問の 実りあれかし 楷新樹 —— 136

4 年頭所感

己丑の歳 —— 140

かくて明けゆく空のけしき…… —— 143

新しき 年の始めの 初春の…… — 146

木の葉なき むなしき枝に…… — 151

何となく、今年が良いことあるごとし…… — 155

新しき 年のはじめに かくしこそ…… — 159

5 入学生の皆さんへ（学生便覧）

人生は短く…… — 166

幸運の女神は…… — 168

6 医学部創立百五十周年記念式典祝辞

伝統と創造の二重らせん — 172

7 附属病院完成記念式典挨拶

北陸圏医療ゾーンの中核 — 178

8 がん進展制御研究所 共同利用・共同研究拠点認定記念式典挨拶

「東アジアにおける知の拠点」形成の中核——184

9 附属学校園卒業式祝辞

高等学校——188

中学校——190

小学校——192

特別支援学校——197

幼稚園——199

10 「能登里山マイスター」養成プログラム

「能登里山里海マイスター」育成プログラム入講式・修了式式辞

地域再生を担う——202

二十一世紀型里山——205

人類生存の根幹は農業——208

能登の未来——211

11 金沢美術工芸大学卒業式・金沢美術工芸大学大学院修了式祝辞

最も人間らしい価値—— 214

芸術の力—— 217

自らの感性—— 219

夢を追いかける—— 223

無限の可能性—— 226

本阿弥光悦—— 229

12 石川工業高等専門学校卒業証書・修了証書授与式祝辞

新しい認識・思考・世界観—— 234

13 北國文化賞・北國芸能賞祝辞

地域に根ざした文化活動—— 238

文化の多様性—— 239

地域と文化の発展段階 — 241

自然環境に適応した文化 — 243

世界を魅了するソフトパワー — 245

クールジャパン — 247

14 高峰賞授与式祝辞

今日胸に抱く憶 — 250

所信表明・退任挨拶 — 253

任期中のおもな国内外の出来事 — 259

1 金沢大学入学宣誓式、学位記・修了証書授与式告示

直観と教養

(入学宣誓式 平成20年4月7日)

本日ここに千九百六十一名の新入生を迎え、平成二十年度金沢大学入学宣誓式が挙行されますことは、本学の大きな慶びであります。新入生の諸君には、金沢大学を代表して、歓迎の意を表する次第であります。また、今日の日を共に祝うために、ここに参集されたご家族の皆さまに對しましても、心よりお祝い申し上げます。

さて、諸君が入学された金沢大学は、一八六二年に始まる加賀藩種痘所を源流としています。一九四九年に当時の第四高等学校、師範学校、工業専門学校、医科大学の歴史を引き継ぎ、新生の総合大学として設立されました。以来、五十九年の歩みの中で、八学部・二十五学科・課程を有する大学へと発展してきました。この間、私たちは、社会のための大学とは何か、という問いを、常に自らに投げかけてきました。その集大成として、大学の理念と目標を「金沢大学憲章」として定め、自らを、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」と位置づけました。目標実現の第一歩として、この度、これまでの八学部・二十五学科・課程を再編成し、「三学域・十六学類」の教育組織を構築しました。金沢大学の新たな歴史を築かんとし、本日諸君と共に新たな一歩

を踏み出したところであります。

大学は学問の府であると同時に、社会のための大学を、その存在理由としています。大学の歴史においては、学問の伝統を守りながらも、時代時代の社会が必要としたことにも応えてきました。言わば、持続と適応を軸として、改革がなされ発展してきたと言えます。諸君が生き抜く二十一世紀の今、私たちは、資源、エネルギー、食糧、人口、気候、環境などの、これまで人類が経験したことのない、地球規模での問題に直面しています。同時に、グローバル化の進む国際社会にあつては、民族の対立、国家間の政治経済の衝突など、様々な問題が生み出されています。国内社会にあつては、急速に進む少子高齢化、地方文化の衰退、世代間の断裂など、解決すべき問題が山積しています。このように、私たちを取り巻く情勢は、大きく変化しつつあります。この中で、社会のための大学の役割はいよいよ大きく、複雑な問題の解決には、これまでの学問領域の枠組みを超えた、幅広い知識と、それを活用する能力を養うことが求められています。

これに応えるべく、金沢大学では「三学域・十六学類」という新たな教育組織を整えました。従来の学部の壁を取り払うことにより、これまで培ってきたことを基礎としながら、そこに新しさを取り込んだ教育の体制を整え、社会の要請や、学生諸君のニーズに応えようとするものがあります。人間社会学域や理工学域に入学した諸君は、一定期間の共通教育と専門基礎教育を受け

た後、各自の進みたい分野・コースを選んでいくこととなります。医薬保健学域に入学した諸君は、進路は既に決められています。チーム医療という視点に基づいてつくられたカリキュラムで学ぶことで、質の高い医療人として育っていくことが期待されています。

諸君には、この新しい学域学類制を実感し、自らの明日を目指して情熱を持って学んで頂きたい。そして、問題や不満があれば、私や副学長をはじめとした教員に、躊躇することなく話して頂き、学域・学類という新体制を素晴らしいものにしていくための営みに、積極的に参加して頂くことを願っています。

「金沢大学憲章」では、教育の到達点を次のように定めています。すなわち「自学自習を基本として、専門知識と課題探求能力、さらには国際感覚と倫理観を有する人間性豊かな人材を育成する」と定め、学生の主体的な学びを強調しています。諸君は今まで、一定の制約の中で間違いない事実として多くのことを学んできました。これからの学びにおいては、無限に広がる学問への挑戦、知を無限に広げる力の獲得が大切です。大学の教育は、教養と専門の教育からなります。教養教育は、あらゆる専門教育の基礎であると同時に、諸君の世界観の形成と人間性の涵養に大きな役割をはたし、人生をいかに生きるべきかに指針を与えることでしよう。

二十一世紀初頭のいま、大量生産、大量消費をパラダイムとする、これまでの工業文明は終焉を迎えようとしており、ポスト工業文明への流れが一段と本格化しつつあります。文明の転換期には、それまでの専門知識ではなく、深い教養に基づく「洞察力」が、時代の流れをつかみ将来を設計する上で、大きな力となります。文明の大転換期とも言われる今日、諸君には、時代を洞察し、改革する力の源泉である「教養の涵養」が、強く望まれています。

学問の歴史をみると、断続的におきる飛躍の時代の積み重ねであったことが分かります。飛躍は直感によりもたらされてきました。直感は、専門知識に深く裏打ちされた教養から生み出されるものと、確信しています。学問は分析から統合の時代へと動きつつあります。どうか、諸君は、主体性をもって、幅広く深い教養を身につけ、高度な専門を学び、自己の中でこれらを統合し、課題解決のための「総合力」を高める努力を惜しまないようにして下さい。そうすることにより、時代の洞察、知の創造に重要なセンスとも言えるべき「直感力」が育まれることでしょう。

フランスの偉大な細菌学者パスツールは「幸運の女神は、準備された人の心にのみ訪れる」と言いました。このことを肝に銘じ、新たな学びの世界を歩んで行かれることを念じております。

金沢大学が位置する金沢市は、加賀前田藩の城下町として栄え、天下の学問の府として長い歴史

史のある街です。浅野川と犀川、医王山などの自然に恵まれ、美しい四季折々の風景の中に息づいている街です。また、独特の芸術文化を育んできた、知的存在感のある、学生に優しい街と一言うこともできます。そこでの生活、人との交わり、文化芸術との出会いは、諸君の勉学をいっそう実りあるものとするでしょう。

角間の里山や小立野の大地には、草木が萌えだし、諸君の入学を歓迎しています。ここ、金沢大学において、「三学域・十六学類」の第一期生として学ぶことを誇りとし、充実した大学生活を謳歌されることを念じてやみません。このことを祈念し、告辞と致します。

守破離

(大学院入学宣誓式 平成20年4月7日)

本日ここに金沢大学大学院に入学された八百十八名の皆さんに、金沢大学を代表して心から歓迎の意を表します。皆さんは今までの研鑽を踏まえ更なる学問的飛躍を期して大学院において研究する道を選択されました。この挑戦が実りあるものとなるよう期待いたします。

金沢大学は自らを「教育重視の研究大学」、即ち基本的には研究大学と位置付け、研究方針について「真理の探究に関わる基礎研究から技術に直結する実践研究までの卓越した知の創造にとめる」と定め幅広い研究を目指しています。研究の根幹は、これまで各々が培ってきた学問的研鑽に加えるに更なる専門的研鑽から生まれる個々の知的好奇心・探究心であり、皆さんは、自由な発想で、興味・関心の赴くままに研究を行って下さい。そこでは今まで以上に主体的に学ぶことが必要となり、全身全霊、自分を信じ全てのエネルギーを注ぎ込んで下さい。幸運の女神は必ずや訪れることでしょう。発見における感動は自己をして更なる発展の原動力となるでしょう。歴史は、若いエネルギーが人生最高の素晴らしい成果を生むことを教えています。

皆さんは、ご存知かと思いますが「守破離」という言葉があります。守は守るの守、破は破るの破、離は離れの離で、本来は茶道の修行段階を教えた言葉であります。「守」は先人の知識を正確にマスターし、これを完全にできるように守り抜きなさい、いわば「学び」の段階であり、「破」は次の段階で、自分で物を考え、これはおかしい、先生・師匠はそう言ったがおかしい、つまり自分の仮説を立てる、個性を創造する段階、「離」はさらに前進させ自分流のものを打ち立てる、ことでもあります。「守破離」を踏まえ、先生に教えられて先生を越えて下さい。

最後に一言付言させて頂きます。最近のES細胞（やiPS細胞）に関する新聞報道などでご承知のこととは思いますが、（社会科学にしろ、自然科学にしろ、あるいは医学分野にしろ）研究そのものの倫理性、研究の発表をも含めたプロセスにおける倫理性について常にお考え頂きたいと思えます。

大学院修了後には研究者として、あるいは高度専門職業人として、日本のみならず世界を舞台に活躍する、そんな目を迎えるためにも、大学院を選択した挑戦の心を忘れることなく、有意義な研究生を送られることを願ってやみません。

本日はまことにおめでとうございます。

「寺町まつすぐ」の精神で進む

（学位記・修了証書授与式〈学部・別科〉平成21年3月23日）

本日ここに、平成二十年度金沢大学学位記・修了証書授与式が挙行されますこと、誠に慶賀に存じます。ただ今学部卒業生千八百二十名、別科修了生三十四名の方々に学位記および修了証書をお渡し致しました。皆さんおめでとうございます。心からのお祝いを申し上げます。ご家族・

保護者の方々には、これまでのご苦勞と本学へのご協力に感謝し、併せてお慶びを申し上げます。

さて、平成十六年、金沢大学はそれまでの国立大学から脱皮し、国立大学法人として新たな一歩を踏み出しました。そして法人としての出発にあたり金沢大学憲章を制定致しました。その前文には、おおよそ次のようにあります。「人類は長い歴史の中で、創造と破壊を繰り返しながらも自然及び社会に対する理解を深め、文化を育んできた。研究と教育を預かる大学は、知の創造と人材の育成をもって世代を繋ぎ、社会の形成と発展に貢献してきた。そして今や世界は国家の枠を越え多くの人々が地球規模で共働する時代を迎えている」。本日を諸君の人生の大きな区切りとし、今一度我が大学の大学憲章前文を思い起こし、自らの学生生活を振り返り、これからの人生への新たな決意を固めて頂きたく思います。幾多の教えを受けた師や、ともに学び競った友、挫折や絶望の淵で支えてくれた人々、磨かれた学問、自らの誇り、希望、夢、そういった事柄の豊かな蓄積が己を動かす原動力であることを認識して下さい。特に「あなた方一人一人の心に刻み込まれた一言」、それは人生の宝物として大切にして下さい。

皆さんは四月から社会人として、あるいは大学院生として人生の新たな一歩を踏み出します。今年には二〇〇九年、二十一世紀に入って九年目です。人類は資源・エネルギー、食糧、人口、気候変動、地球温暖化など、地球規模の問題に直面しています。これらの問題は、グローバル化の

進行とともに、一層深刻化しています。皆さんの新しい門出にあたり、特に、深刻化する地球温暖化に関係して、私の思うところを述べたいと思います。地球温暖化に「人為起源の温室効果ガスが影響している」ことは確かなことと思われれます。その深刻度は増し、対策がグローバルに検討され提案されています。一九九七年十二月、京都で開催された第三回気候変動枠組み条約締約国会議、いわゆる京都会議で京都議定書が採択されました。そこでは、二〇〇八年から二〇一二年において一九九〇年に比べて、先進国全体で少なくとも5・2%の温室効果ガスを削減するという数値目標が設定されました。また、昨年八月に開催された洞爺湖サミットでは、「二〇五〇年までに二酸化炭素などの温室効果ガスの排出量を現状から半減させる」という長期目標を立て、世界全体の目標として採用を求めたことと合意しました。我が国は、より強力に対策を実施し、二〇五〇年までに60〜80%を削減するとの決意表明をしました。以来、二〇五〇年の目標達成を目指し、住宅、交通、ものづくり、エネルギー供給源等、様々な視点から議論されております。

ここで考えねばならないことは、描かれている四十年後の世界は、典型的には車社会など、現在の先進国が享受している生活を維持することを前提とし、今の文明を基準とするものです。言い換えれば、各国の温室効果ガス排出量削減のための政策や施策に如何ほどの違いがあるわけではなく、その行き着く先は、グローバルイゼーションによる単一な社会の現出です。今こそ、しばし立ち止まって、文化の多様性に価値を見いだす時代であるということに思いを致すことです。

現代は産業革命以来、人類が疑うことなく共有してきた価値観の大転換を迫られている時代であります。十九世紀後半の重工業の発展とともに開かれた工業文明は、「利便性」や「豊かさ」を実現し人類の発展に大きな貢献をなしました。一方で負の遺産とも言うべき、資源の枯渇、環境の汚染・破壊等をもたらしました。文明は生まれ、発展し、衰退する。そしてまた新しい文明が生まれる。今はまさしく二十世紀型工業文明からのパラダイムシフトの真ただ中にあります。このような時代にあつては、科学技術が育んできた価値観もまた変化を余儀なくされています。新しい視点、特に「地球の資源と環境の有限性」を見据えた新たな科学技術の創造が期待されています。知的所産の応用に責任をもつことが社会的責務であることを自覚しつつ、文明を見据え、既存の価値観にとらわれることなく、新しい価値観・世界観を生み出す営みに参加して下さい。

今後の社会に重要な概念として、「持続可能性（サステイナビリティ）」と「生存可能性（サバイバビリティ）」が言われていますが、共に存在し共に生きる、すなわち「共存（コンパティビリティ）」こそが新しい価値観、世界観を生む基礎であると、私は信じています。

諸君が足を踏み出す現下の社会は、アメリカでのサブプライムローン問題に端を発した百年に一度ともいわれる未曾有の金融危機にままわれています。世界経済は歴史的な難局を迎え、パンドラの箱が開いたような混沌に満ちています。この混沌は、価値観の転換に拍車をかけるでありましょう。ただし、古い価値観が崩れる混沌の時代は、また、大きな革新を生む胎動の時代であり

ることを歴史は示しています。

一九二九年の世界恐慌の後には、多くのものが生まれました。一九三七年にはコピー機などが登場し「発明ラッシュの一年」とも呼ばれました。また、日本やアジアが金融危機に見舞われた一九九八年にはその後の情報社会を先導するグーグル社が設立されました。諸君には、百年に一度の金融危機・混沌を、百年に一度のチャンスと捉え、希望（エルピス）を持って進んで頂きたい。金沢を象徴する（私の好きな）言葉、「寺町まっすぐ」、「寺町まっすぐ」の精神で進んで頂きたい。

角間キャンパスでは草木が芽吹き、宝町・鶴間キャンパスから望む犀川源流の山々はわずかに碧く、浅野川の流れは春の穏やかな陽射しを受けていつそう輝きを増しています。諸君においては、北陸の知の拠点・金沢大学で学んだことを誇りとし、それぞれの道で活躍するよう願っています。金沢大学は卒業生を重要な構成員と考えています。仕事上でのアドバイスが必要とされているとき、再び学ぼうとする時、また、何事が無くても、同窓生として母校を訪ねることがあれば母校は諸君を温かく迎えることを約束します。今後の諸君の健闘とさらなる発展を願い、告辞と致します。

研究の倫理的側面

(学位記・修了証書授与式〈大学院〉 平成21年3月23日)

今日ここに修士の学位、あるいは博士の学位を取得され、学位記授与式に臨まれた諸君、誠におめでとうございます。また、外国から本学に留学し、学位を取得された方々には、異文化の直^{ちか}中における懸命な努力と研鑽に対し、心からの祝意と敬意を表する次第です。御家族の方々には、これまでの本学への御協力に感謝し、併せてお慶びを申し上げます。

修士となった諸君は、高度専門社会人としてあるいは博士課程大学院生として人生の新たな一歩を踏み出します。博士号を得られた諸君は、アカデミアの世界あるいは高度専門職業人の世界において、新たな各々の頂きを目指して登り始めることとなります。金沢大学で培った知の力、人としての力に自信を持ち、矜持を持って前途を切り拓かれんことを切望いたします。二十一世紀は知識基盤社会であり、諸君の活躍が大いに期待されるところであります。

私はこの新たな旅立ちに際し、諸君に共通の課題を提起したいと思えます。科学の進歩は、その技術応用を通じて生活の質を大いに改善し、科学と社会の在り方の距離が非常に近くなりまし。科学の新たな発見が実用化されるに要する時間はこの二百年間に驚くほど短くなっています。十七世紀までは百年以上かかり、十八世紀においては約百年でしたが、二十世紀初めには約三十

年となり、一九七五年にはわずか三、四年になりました。近年特に短縮され、例えば新たな発見の携帯電話への応用など、一年以内に実用化された場合もあります。過去においては、発見から実用までの期間が十分に長い故に、新しい科学技術のもつ社会的倫理性、人類を含む全ての生物あるいは地球環境に対する影響については、時間の中で好むと好まざるとに関わりなく検証されてきました。しかしながら今日のように、短時間での実用化があり得る時代においては、このような時間が許されていません。それ故に、研究者自らが、自らの研究の倫理的側面を考えると、自らの研究成果の行方を注意深く見守ることが求められています。是非とも、このことに思いをいたし、責任を持って行動して頂きたいと思えます。

十九世紀後半の重工業の発展とともに開かれた工業文明は、「利便性」や「豊かさ」を実現し人類の発展に大きな貢献をなしてきました。しかし現代は産業革命以来、人類が疑うことなく共有してきた価値観の大転換を迫られている時代であります。このような時代にあつては、科学そのものが育んできた価値観もまた変化を余儀なくされています。「地球の資源と環境の有限性」を見据えた新たな科学技術の発展なくして未来はないと言つたら言い過ぎでしょうか。文明を見通し、既存の価値観にとられることなく、新しい価値観・世界観を生み出す営みに参加して下さい。その際、重要な概念として、私は共に存在し共に生きること、すなわち「共存」こそが新しい価値観・世界観の基礎であると信じています。

諸君が足を踏み出す現下の社会は、百年に一度ともいわれる未曾有の金融危機に襲われ、パン
ドラの箱が開いたような混沌に満ちています。諸君には、百年に一度のあるかないかの混沌を、
百年に一度のチャンスと捉え、希望（エルピス）を持って進んでいただきたい。

諸君におかれましては、北陸の知の拠点・金沢大学で学んだことを誇りとし、知の所産を人生
の財としてそれぞれの道で活躍されますようお願いしております。金沢大学は卒業生・同窓会を重要
な構成員と考えています。研究に、仕事に求めることのある時、再び学ぼうとする時、そして何
よりも母校を懐かしく想うとき、是非母校を訪ねて下さい。母校は温かく迎えることを約束しま
す。今後の諸君の健闘とさらなる発展を願い告辞と致します。

自己の存在理由

（入学宣誓式 平成21年4月7日）

本日ここに好天の下、桜も咲きほころぶ中、千九百五十二名の新入生を迎え、平成二十一年度
金沢大学入学宣誓式が挙行されますことは、本学の大きな慶びであります。新入生の諸君、金沢

大学は諸君を大いに歓迎します。また、今日の日を共に祝うために、ここに参集されたご家族の皆さまに対しまして、心よりお祝い申し上げます。

さて、諸君が入学された金沢大学は、一八六二年に始まる加賀藩種痘所を源流としています。日本で三番目に古い歴史を持つ大学といえます。一九四九年に当時の第四高等学校、師範学校、工業専門学校、医科大学の歴史を引き継ぎ、新生の総合大学として設立されました。以来、「社会のための大学」、「学生のための大学」として、八学部・二十五学科・課程を有する大学へと発展してきました。平成十六年の法人化に伴い、大学の理念と目標を「金沢大学憲章」として定め、自らを、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」と位置づけました。そして目標実現の第一歩として、昨年四月、これまでの八学部・二十五学科・課程を再編成し、「三学域・十六学類」の教育組織を構築しました。諸君はこの学域学類制の第二期生ということになります。

学域学類制は、複雑かつ高度化する社会の要請、更に時代を敏感に先取りする学生のニーズに応えようとするものです。人間社会学域や理工学域に入学した諸君は、一定期間の共通教育と専門基礎教育を受けた後、各自の進みたい分野・コースを選んでいくこととなります。医薬保健学域に入学した諸君は、進路は既に決められています。チーム医療という視点に基づいてつくられたカリキュラムで学ぶことで、それぞれが質の高い医療人として育っていくことが期待されて

います。更には、学生諸君自らが自らの将来を考え、主体的に履修計画を立てることができるようにと、「主専攻・副専攻制」を設けました。諸君には、この新しい学域・学類制を実感し、自らの明日を目指し、情熱を持って学んで頂きたい。問題や不満があれば、私や副学長をはじめとした教職員に、躊躇することなく話して下さい。金沢大学の学域学類制は我が国の大学における学士課程教育の活性化を目指す、新たな試みです。この新しいモデルを実りあるものとしていくための営みに、諸君の積極的な参加を願っています。

諸君は今、未来への期待で満ち満ちていることと思います。大学生活が高校の延長ではないことを感じ、何があるかと輝きの目で見ていることと思います。私が大切と思っていることを一つ述べます。これまでの生活や目的は受け身 (passive) の傾向が強かったのに対し、今日からはより能動的 (active) であれ、ということ です。これは諸君が想像している以上に大きな変化です。今までは1+1が2の世界で、確かな目的、「大学へ入るといふ目的」の中で学び生きてきたことと思います。しかし、今こうして入学した時点からは、1+1がかならずしも2とはならない世界での学びであり、改めて「人生とは何ぞや」、人生における自己の存在理由 Raison d'être は何かという大きな命題にぶつかります。

諸君のこのような学びのために、金沢大学は高校教育から大学教育へのスムーズな移行を図る

ための「導入教育科目」や「キャリア形成プログラム」など、様々な教育プログラムを準備しています。さらに、「金沢市中心部での街中講義」や「能登半島に教育研究の拠点」を設け、新たな環境教育を精力的に推進しつつあります。また、八十あまりの学生クラブやサークルがあります。文化やスポーツ等の課外活動を通じ、生涯のこよなき宝物となる「友」を作って頂きたい。

二十一世紀初頭のいま、大量生産、大量消費をパラダイムとする、これまでの二十世紀型工業文明は、資源の枯渇、環境の悪化などの地球規模での問題を生み、転換を迫られています。文明の転換期には、歴史という時間軸と社会という空間軸において、自身の位置付けができる力、自己の存在理由 *Raison d'être* を問う力が問われています。私はこれを教養と言います。深い教養が、時代の流れをつかみ将来を設計する上で、大きな力となります。私たちは人類誕生からの歴史や自分が生まれてからの歴史の中で生きています。そういった歴史の中の自分が、また家族・社会・国・世界における自分が、個としてどのように生きるべきかを考える力を身につけて頂きたい。広く多様な分野での学び、様々な人との交流、クラブ活動、異文化との出会いなど、様々な思考との交わりが教養を涵養するでありましょう。

学問や研究の本質は個人の関心と興味であります。関心と興味は自然に存在するものではなく、教養の力により指し示されます。そして、深い教養に基づく専門の学びが創造を生む原動力とな

ることを私は確信しています。私は、医学細菌学を専門としております。赤痢の原因菌を発見した志賀潔先生は、「自ら信ずるところ篤ければ成果自ら到る」と述べられました。諸君も、自ら信じるところに従い、新たな学びの世界を歩んで行かれることを念じております。

今年、自然科学ばかりでなく、思想的にも大きな影響を及ぼしたチャールズ・ダーウインの生誕二百年にあたります。ダーウインは『種の起源』で、「過去から判断すれば、我々は、現存の種の一つとして不変の外観を遠い将来にまで伝えるものはないであろう、と推論して差しかえない」と書いています。この言葉は、今は永遠ではないということであり、我々の生き方に大きな示唆を与えているように思います。智慧を最大限に發揮し、自らを進化させる学生生活を過ごして下さい。

現下の社会は、アメリカでのサブプライムローン問題に端を発した百年に一度とも言われる未曾有の経済危機に見舞われ、混沌に満ちています。それまでの価値観が崩壊する混沌の社会が大きな革新を生むことは歴史が示しています。一九二九年の世界大恐慌後の十年を見ますと、その間に、その後の世界を大きな躍進に導いた科学技術・社会システムが開花しています。細菌感染症治療に革命をもたらした一九二九年のペニシリンの発見、次いで、素材革命をもたらしたナイロンの発明、電子顕微鏡やレーダーの発明と続き、一九三八年には蛍光灯の制作に成功してあります。我が国では一九三三年、小型ガソリンエンジンの研究が開始され、自動車産業の今日の隆盛

に至っています。このように、百年に一度の未曾有の経済危機は百年に一度のビッグ・チャンス
の時代でもあります。諸君の新しい価値観に基づく、創造への時代であります。諸君の学生時代
となる今後の数年間、世界では「新しい価値観」に基づく大きな発明・発見・技術革新が引き起
こされることでしょう。

「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」、これは
村上龍の小説『希望の国のエクソダス』の少年ボンちゃんの言葉です。生きるには希望という羅
針盤が必要です。諸君は世界を刮目し、新しい価値観に基づく「希望に満ちた」世界の構築に参
画すべく準備を整え、構築に参加して頂きたい。

金沢大学が位置する金沢市は、加賀前田藩の城下町として栄え、天下の学問の府としての長い
歴史があります。この一月には「歴史都市」として認定された街です。浅野川と犀川、医王山な
どの自然に恵まれ、美しい四季折々の風景の中に息づいている街です。また、独特の芸術文化を
育んできた、知的存在感のある、学生に優しい街と言うこともできます。そこでの生活、人との
交わり、文化芸術との出会いは、諸君の勉学をいっそう実りあるものとするでしょう。

ここ、金沢大学において学ぶことを誇りとし、充実した大学生活を謳歌されることを念じてや

みません。このことを祈念し、告辞と致します

「希望に満ちた」世界の構築

(大学院入学宣誓式 平成21年4月7日)

本日ここに好天の下、桜も咲きほころぶ中、金沢大学大学院に入学された七百九十八名の皆さんに、金沢大学を代表して心から歓迎の意を表します。皆さんは今までの研鑽を踏まえ、更なる学問的飛躍を期して大学院において研究する道を選択されました。この挑戦が実りあるものとなるよう期待致します。

大学は教育研究および社会貢献を使命としております。しかし、大学が最も大学らしい点は、知の創造にあります。皆さんが今まで培ってきた学問的基礎と、これから獲得する知を基礎とし、磨かれた世界観により湧き出る興味・関心を大いなる探求心でとことん追求して下さい。探求心とは生半可なものではありません。昨年ノーベル物理学賞を受賞された南部陽一郎博士は、「どうすれば問題が解決できるか、四六時中、常に考え続けること、それしかありません」と言っています。また、化学賞を受賞された下村脩博士は、「もし興味ある課題を見つけることができた

ら、困難に直面してもあきらめず、ただその目標に向かって突き進み、最後までやり遂げて欲しい」と述べています。若いエネルギーには素晴らしい力があります。

フランスの偉大な細菌学者パスツールの言葉に、「幸運の女神は、準備された人の心にのみ訪れる」とあります。培った学問的直感とセンスがアクセルとなり、共鳴する思考と行動が作り出すエネルギーは、人生最高の素晴らしい成果を生むはずです。このことを肝に銘じ、新たな学びの世界を歩んで行かれることを念じています。

大量生産・大量消費をパラダイムとする、これまでの二十世紀型工業文明は、資源の枯渇、環境の悪化などの地球規模での問題を生みました。その帰結として、二十一世紀初期のいま、我々は文明の転換期を迎えています。我々の世界観のもととなる認識、思考、そして価値観もまた転換を迫られています。二十一世紀を生き抜くための基礎的概念として持続可能性(サステイナビリティ)あるいは生存可能性(サバイビリティ)（生き残る力、サバイビリティ）が言われています。しかし、私はそれらを横断する概念として共に存在し共に生きる、即ち共存(コンパティビリティ)こそが、新しい価値観・世界観の基礎となるであろうと確信しています。

現下の世界は、アメリカでのサブプライムローン問題に端を発した、百年に一度とも言われる、未曾有の経済危機に見舞われ、混沌に満ちています。価値観が崩壊する混沌の時代は、時として大きな革新を生むことを歴史は示しています。一九二九年の世界恐慌の後にはナイロン、電子顕

微鏡、レーダー、蛍光灯などの発明・発見が相次いでなされ、世界は新たな発展の道を歩み始めました。諸君は世界を刮目し、新しい価値観に基づく「希望に満ちた」世界の構築に参加して頂きたい。

大学院修了後には研究者として、あるいは高度専門職業人として、日本のみならず世界を舞台に活躍することを期待しています。その日を迎えるためにも、今日この時の、身の引き締まるような思いを大切にして、大学院における有意義な生活を送られることを祈念し、告辞といたします。

本日は誠におめでとございます。

日本文化、今の太陽とともに生きる世紀

(学位記・修了証書授与式 平成22年3月23日)

本日ここに、平成二十一年度金沢大学学位記・修了証書授与式が挙行されますこと、誠に慶賀に存じます。ただ今学部卒業生千七百九十一名、大学院修了生七百十八名、別科修了生三十六名

の方々へ学位記および修了証書をお渡し致しました。皆さんおめでとうございます。心からのお祝いを申し上げます。ご家族・保護者の方々には、これまでのご苦労と本学へのご支援に感謝し、併せてお慶びを申し上げます。特に、本学に留学され、学位を取得された方々にはその懸命な努力と研鑽に対し、心からの祝意と敬意を表する次第です。

人生の大きな区切りとするこの日、皆さんには、ぜひとも我が大学の大学憲章を思い起こして頂きたく思います。憲章の前文で「金沢大学は、本学の活動が二十一世紀の時代を切り拓き、世界の平和と人類の持続的な発展に資するとの認識に立つ」ことを明記し、また、教育について「学生の個性と学ぶ権利を尊重し、自学自習を基本とする」と謳っています。このような金沢大学で学んだ皆さんは今、知的訓練に耐えるたくましい体質を獲得し、二十一世紀の時代を切り拓いていこうとする強い決意を抱いているものと信じています。教養や、専門の授業、教員の温かい言葉・厳しい言葉、友との出会い・別れ、サークル活動での興奮・落胆、日々の生活の喜び・悲しみ、走馬燈のように脳裏に浮かぶ事柄を思い起こし、それらが己を動かす原動力である事を認識して下さい。特に多感な青春時代に育まれた「友情」、それは人生のこよなき宝物として、生涯大切にして下さい。

皆さんは四月から社会人として、あるいは大学院生として人生の新たな一步を踏み出します。

今年は二〇一〇年、二十一世紀に入って十年目。人類は資源・エネルギーの枯渇、地球温暖化、経済危機など、これまでになく切実な地球規模の問題に直面しております。さらに、感染症の問題もまたグローバル化の進行とともに一層深刻化しており、昨年春以来の新型インフルエンザの流行は終息の方向にありますが、今もなお世界的大流行が続いております。これらの地球規模の大問題に対し、大学という知の最前線で活躍する我々も、大学を巣立ってゆく皆さんも、決意のありようで大きく貢献できるはずです。

新しい門出にあたり、新型インフルエンザの世界的大流行に関連して私の思うところを述べたいと思います。新型インフルエンザについては従来アジアを起源とする強病原性トリ型インフルエンザを想定し様々な対策が考えられて来ましたが、しかしながら、その想定は見事に外れ、メキシコで豚型の新型インフルエンザが昨年四月に発生し、五月には我が国でも感染者が発生、六月十二日には世界保健機構（WHO）は世界的大流行、パンデミックを宣言しました。現在に至るまで、我が国では数千万人（二千万人以上）、世界で数億人が感染したと推定されています。拡大防止、感染予防には各国が様々な方策を講じました。我が国では、新型インフルエンザ感染防止のためにマスク着用が日常的に広く行われたことは、皆さんもよくご存じの通りです。ニューヨーク・タイムス電子版は「マスクに手洗い、日本は偏執狂」と書いたそうです。しかし、「呼吸器感染症流行時にマスク」、それは日本の文化でありましょう。さらに、空港では厳重な検疫

が、感染者発生にあたっては綿密な追跡調査などが行われ、現代の高度な科学技術を背景に流行の拡がりの過程について貴重なデータが収集されました。（これらのデータは国民の同意のもとに収集されたわけですが）これもまた「日本らしい文化の形」でありましょう。これらの蓄積されたデータは今後の新型感染症対策に極めて有益である筈です。つまり、私が申し上げたいのは、新型コロナウイルスエンザ問題は我々に、文化の多様性がグローバルな問題の解決の糸口となることを教えているのではないかということです。このことは、また、グローバル化した世界における文化の多様性が如何に重要かということを意味しております。

今日、グローバル化により個々の国や民族が継承してきた固有の文化は徐々に失われていきます。ある人類学者は「十九世紀後半までの地球には数千の文化があったが、現在は二百しかない」とも言っています。独特な（日本固有の）地理的環境と長い歴史の中で培われてきた日本文化は過去においても西欧社会に大きな影響を与えて来ました。芸術文化の領域では、十九世紀、ルネサンス以降のアカデミズムの行き詰まりに悩む印象派の画家たちが、デッサンにこだわらない自由なデフォルメと陰影のない明快な色彩に裏打ちされた浮世絵版画により刺激を受け、新たな画法のインスピレーションを、そこに見いだしたことは良く知られていることです。能楽や茶道、華道においてもしかり。日本の美の世界をじかに経験したフランスの著名な哲学者コジエーブは、「階級がなく、互いに争うことが無く、生きる上で過酷な労働の必要もない世界では、人は人間

であることをやめて動物性に戻るだろう」というかつての自分の見解を、「たとえそうした世界でもそこに能楽・茶道・華道があれば、人が人間のままで留まっていられる」と訂正するに至りました。また、かの有名な聖徳太子の十七条憲法（六〇四年成立、第一条「和をもつて尊しとなす」）以来、我々の心に連綿として宿っている和の精神は、チームワークとして世界的に高く評価されているところですよ。近年、チームワークや武士道は日本人が見過ごしている強みとも言われています。自然との関わりにおいては西洋とは異なり、ヒトと自然は対立するものではなく、ヒトと自然は互いの調和の上に生きているという独自の自然観を育んでいます。さらには、大正期から昭和にかけて活躍した文明評論家、長谷川如是閑が、ギリシャの「頭脳の文明」に対比して「手の文明」と呼んだように、我々はものづくりで優れた能力を持ち合わせております。また、ものづくりに秀でた人を尊敬する文化を持っています。皆さんにおいては日本文化に一層の想いを致し、グローバルに活躍していただきたく思います。

現下の世界は一昨年九月十五日のリーマン・ブラザーズの破綻を契機として一気に進行した世界同時経済不況、地球温暖化、そして資源、特に化石燃料の枯渇等、地球規模での解決をせまられる問題が次々と起きています。十八世紀の産業革命を起点とする、大量生産・大量消費で特徴づけられる二十世紀型工業文明とそれを支えた社会システムは終焉を迎え、大きく転換しつつあります。二十一世紀においては、化石燃料、言わば「過去の太陽」に決別し、「今の太陽」とと

もに生きるというパラダイムシフトが進むでしょう。皆さんはこのようにダイナミックに変わりつつある世界を歩むことになります。頭を上げ、今まで金沢大学で培ってきた全てを投入しパラダイムシフトに参加して下さい。明るい未来のために、明るい未来を自ら構想されんことを期待致します。

皆さんはすでにご存知かと思いますが、一八六二年に始まる加賀藩種痘所を源流とする母校金沢大学は、二年後の二〇一二年に創基百五十年を迎えます。我々はささやかに、しかし厳粛に、創基百五十年を祝う予定です。この様な伝統ある金沢大学で学んだことを誇りとし、皆さんが世界の平和と人類の持続的な発展に尽くされんことを期待します。二十一世紀は知識基盤社会であり、生涯にわたり継続的に学習せねばなりません。金沢大学は皆さんの、知と創造の原点という意味で、いつまでも変わる事なき母なる港、母港であります。同窓生として、仕事の関係で、また再び学ぶために母校を訪ねられることがあれば、母校は温かく迎えることを約束します。「新風文化の扉は開かれ あたらしの人 世代にあふれ」。これは本学の校歌の一節です。「あたらしの人」として皆さんが活躍し、さらに発展することを願ひ、告辞とします。

人生の師との出会い、^{つよ}強い金沢大学生

(入学宣誓式 平成22年4月7日)

本日ここに千九百二十五名の新入生を迎え、平成二十二年度金沢大学入学宣誓式が挙行されますことは、本学の大きな慶びであります。新入生の諸君には、金沢大学を代表して、歓迎の意を表する次第であります。また、今日の日を共に祝うために、ここに参集されましたご家族の皆さまに対しても、心よりお祝いを申し上げます。

さて、諸君が入学された金沢大学は、一八六二年(文久二年、明治維新の六年前)に設立された医学部の起源(前身)である加賀藩種痘所を源流としています。一八六七年(慶応三年)には(小規模ながらも医師養成を行う)卯辰山養生所ができ、同時に製薬所舎密局が付設されています。舎密はchemistry(化学)の訳語で、これが薬学部の前身となっています。一八七四(明治七)年には教育学部の前身である集成学校・石川県師範学校ができ、一八九四(明治二十七)年に第四高等学校が設立されました。第四高等学校には文科と理科があり、それぞれ、その後の法学、文学、経済学部、および理学部の母体となっています。工学系は一番新しく、一九二〇(大正九)年に設立された金沢高等工業学校が、工学部へと発展しました。

金沢大学はこの様な様々な歴史と伝統をもった学校が国立学校設置法のもとで統合され、一九四九（昭和二十四）年に設置されました。以来、五十九年の歩みの中で、八学部・二十五学科・課程を有する大学へと発展してきました。この間、私たちは、社会のための大学とは何か、という問いを、常に自らに投げかけ、その集大成として、大学の理念と目標を「金沢大学憲章」として二〇〇四年に決めました。憲章の中で、自らを、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」と位置づけ、目標実現の第一歩として、一昨年四月、これまでの八学部・二十五学科・課程を再編成し、「三学域・十六学類」の教育組織を構築しました。諸君はこの学域学類制の第三期生ということになります。

金沢大学の学域学類制は我が国の大学における学士課程教育の活性化を目指す、新たな試みです。この新しいモデルを実りあるものとしていくための営みに、諸君の積極的な参加を願っています。人間社会学域や理工学域に入学した諸君は、幅広い枠組みの中で共通教育、キャリア教育、専門基礎教育等、学びの基礎を固めつつ、各自の進みたい分野・コースを選んでいくこととなります。医薬保健学域に入学した諸君は、チーム医療という視点に基づいてつくられたカリキュラムで学ぶことで、患者本位の全人的医療に貢献できる医療人として育っていくことが期待されています。諸君には、この新しい学域学類制を実感し、自らの明日を目指して情熱を持って学んで

頂きたい。

かつては大学に入学し、卒業することは将来の安定を保證するものだと思われていました。特に、一九五〇年代後半から一九六〇年代前半の第一次高度経済成長長期（三種の神器、白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫）、さらに一九六〇年代半ばから一九七〇年代前半の第二次高度経済成長期（三種の神器、カラーテレビ、乗用車、クーラー）の頃、大学に入るとは豊かさへの切符（手形）であり、社会が自己の存在理由 *Raison d'être* を与えてくれました。しかしながら、大学進学率が50%を超え、高等教育がユニバーサル段階に突入した今、*Raison d'être* は自ら問い求めねばなりません。我々は二つの軸を支点としてめぐり行く世界に身を置いています。すなわち、地球上に生命が誕生してから三十億年、ホモサピエンス誕生から二十万年、我々が生まれてからの年数（生をうけてからの年月）といった時間軸、そして、個人、家族、社会、国家、世界といった空間軸。そのような時間軸と空間軸の間において、己の存在理由 *Raison d'être* とは何かと問う力、言い換えれば今という社会空間における自身の位置付けができる力が求められています。私はこれを教養といます。

諸君は教養を涵養し *Raison d'être* を問い求め、そして自分が何をやりたいかを見つけねばなりません。諸君のこの様な学びのために、（金沢大学は）人間科学、社会科学、自然科学からなる

一般科目、総合科目、言語科目、情報処理科目等、様々な教育プログラムを準備しています。さらに、「金沢市中心部での街中講義」や能登半島に教育研究の拠点、「能登オペレーティング・ユニット」を設け、新たに環境教育を精力的に開発しつつあります。また、教養を涵養する上で諸君に是非読んで頂きたい本を、この壇上に並んでおられる各学類長から推薦していただきました。是非、全部を読破して下さい。欲を言えば、トルストイの『戦争と平和』などの重厚な書物をも恐れずに読むことを勧めます。日々の生活も教養の涵養には大切なことです。金沢大学には八十余りのサークルがあります。文化やスポーツ等の課外活動を通じ、友情を育んで下さい。外国人との交わりも重要です。金沢大学は「東アジアにおける知の拠点」として現在アジアを中心にリエゾン・オフィス（海外事務所）を設け留学生の増加を図っています。是非、外国に出かけ、また、留学生と日常的に交流して下さい。広く多様な学び、深い学び、様々な人との出会い・別れ、喜びや悲しみ、様々な言語や異文化との出会いなど、多様な思考との交わりが教養を涵養するでしょう。

二十一世紀に入って十年目のいま、大量生産、大量消費をパラダイムとする、これまでの二十世紀型工業文明は終焉を迎えようとしています。文明の転換期には、それまでの経験はあまり役に立たず、深い教養が問題解決の糧となり、自己の生きる道を指し示すでありましょう。諸君は、培われた教養に裏付けられた Raison d'être に基づき時代を洞察し、自分のやりたいことを見い

だして下さい。

学問や研究の基本は自らの関心と興味にあります。自らの関心と興味は各自の生まれてからの歴史や環境を基礎として生まれます。諸君はこれまでの各々の関心や興味に基づき、金沢大学を選び、本日の姿があるのであります。明日から始まる大学生活での学びは、今までの関心や興味を一層強くすることが期待されます。一方、迷いが生ずるかも知れません。いずれにしましても、深い教養が専門の学びを先導し、また、創造力の原動力となるであります。もう一つ大切なことは人生の師との出会いです。私自身の過去を振り返る時、迷いが生じた時にこそ、一生の師とする人に遭遇するように思われます。赤痢の原因菌を発見した志賀潔先生は、「先人の跡を師とせず、先人の心を師とすべし」と述べられました。金沢大学には千人余の優れた教員がいます。諸君が新たな学びの世界を歩んで行く中で人生の師と出会うことを念じています。

諸君が生きる二十一世紀の今、資源・エネルギー、食糧、人口、地球温暖化、環境など、これまで人類が経験したことのない、地球規模での問題に私たちは直面しています。これらの問題は持続可能性（サステイナビリティ）あるいは生存可能性（サバイバビリティ）の観点から国内的にも国際的にも種々議論されていることは承知の通りであります。この様な状況の中、本年は国際連合が定める「国際生物多様性年」であり、十月には、生物多様性条約第十回締約国会議（C O

P10) が我が国で開催され、その関連行事が本学との共働のもとに石川県で開催されます。これに関連して、生物多様性について私の思うところを述べたいと思います。アメリカのレイチェル・カーソンは一九六二年に『サイレント・スプリング（沈黙の春）』という有名な本を著しました。そこでカーソンは、「春になっても鳥は鳴かず、生きものが静かにいなくなってしまった」と記し、農業や殺虫剤による環境汚染に警鐘を鳴らした原点となりました。その後、日本ではトキが絶滅しました（一九八一年）。近年、生物多様性が急速に失われつつあると推定され、年間四万種の生物が絶滅しているともいわれています。今、まさにレイチェル・カーソンの「私たちはどちらの道をとるか（行き着く先は禍か、あるいは地球を守る唯一のチャンスか…）」との問いを真剣に考え行動せねばなりません。金沢大学では角間への移転とともに角間の里山ゾーンを使って、一九九五年から生物多様性の長期モニタリングを中心とした研究を行っています。諸君には、生物多様性への関心を持っていただきたい。これは、ひいては我々を取りまく社会と環境への洞察力を養う糧となるからです。

本学は一八六二年にその礎石を置いて以来、二〇一二年に百五十年を迎えます。諸君、二〇一二年を創基百五十年として共に祝おうではありませんか。

金沢大学が位置する金沢市は、加賀前田藩の城下町として栄え、加賀宝生など独自の芸術文化

を育んできた「歴史都市」であり、また一方、伝統の中で創造が芽吹いている「創造都市」でもあります。斬新な金沢21世紀美術館を兼六園という日本屈指の庭園と隣り合わせに建て、そこに環境と調和した空間を作り上げた金沢は、時代を切り拓く鋭い感覚を備えたルネサンス都市と言えます。また、この四月に「学生のまち推進条例」を施行した学生に優しい街でもあります。ここでの生活、人との交わり、文化芸術との出会いは、諸君の勉学をいっそう実りあるものとするものでしょう。ここ、金沢大学において学ぶことを誇りとし、充実した大学生活を謳歌され、「彊い金沢大学生」として育っていかれることを祈念し、告辞と致します。

どちらの道をとるか

(大学院入学宣誓式 平成22年4月7日)

本日ここに金沢大学大学院に入学された八百七十六名の皆さんに、金沢大学を代表して心からの歓迎の意を表します。皆さんは今までの研鑽を踏まえ、更なる学問的飛躍を期して大学院において学び研究する道を選びました。この挑戦が実りあるものとなるよう期待いたします。

二十一世紀は「政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として、新しい知識・情報・技術が飛躍的に重要性を増す社会」、すなわち「知識基盤社会」の時代であると言われています。知の大競争・技術革新が絶え間なく起こり、一方でグローバル化が一層すすむ社会でありましょう。また、性別や年齢を問わず誰もが参画することが促進される社会であり、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる社会でありましょう。そのような社会で、皆さんは主役としての存在が期待されています。

新しい門出にあたり、私が大切に思うことを二、三述べたいと思います。

第一には歴史という時間軸と社会という空間軸において、自身の位置付けが出来る力、私はこれを教養と言いますが、そのような力を今まで以上に養って頂きたいと思います。学問や研究の本質は個人の関心と興味にあります。個人の関心と興味は各自の生まれてからの歴史や環境が基礎となっています。諸君はこれまでに培った関心と興味に基づき、本日の姿があるのであります。今から始まる大学院生活において、今までの関心や興味が一層強く深くなるよう期待します。一方、迷いが生ずるかも知れませんが、いずれにしましても、深い教養が自身を先導し、創造への原動力となるであります。

第二には人生の師との出会いです。赤痢の原因菌を発見した志賀潔先生は、「先人の跡を師とせず、先人の心を師とすべし」と述べられました。大学院ではこれまでに以上に教員との関わりが

深くなります。諸君が新たな学びの世界を歩んで行く中で人生の師と出会うことを念じています。第三には科学と社会の関わりです。皆さんを含めて、科学者は、一般の人々に対し、自分の研究の中身やその持つ社会的意味を伝える重要な役割がある、ということなのです。

諸君が生きる二十一世紀の今、私たちは、資源・エネルギー、食糧、人口、地球温暖化、環境などの、これまで人類が経験したことのない、地球規模での問題に直面しています。これらの問題は持続可能性（サステイナビリティ）あるいは生存可能性（サバイビリティ）の観点から国内的にも国際的にも種々議論されていることは諸君の承知の通りであります。この様な状況の中、本年は国際連合が定める「国際生物多様性年」であり、十月には、生物多様性条約第十回締約国会議（COP10）が我が国で開催され、その関連行事が本学との共働のもとに石川県で開催されます。生物多様性の維持は全ての学問領域横断的に関わる事であり、生物多様性について私の思うところを述べたいと思います。アメリカのレイチェル・カーソンが一九六二年に著した『サイレント・スプリング（沈黙の春）』という有名な著書で、「春になっても鳥は鳴かず、生きものが静かにいなくなってしまう」と記されています。農業や殺虫剤による環境汚染に警鐘を鳴らした原点ともなりました。近年、生物多様性が急速に失われつつあると推定されています。本年二月には、国際自然保護連合（IUCN）は、（現状を）調査した霊長類六百三十四種のうち、ほぼ

半分に当たる三百三種が絶滅の恐れがあると報告しました。今、まさにレイチェル・カーソンの「私たちはどちらの道をとるか〈行き着く先は禍か、あるいは地球を守る唯一のチャンスか…〉」の問いを真剣に考え行動せねばなりません。各々の学問領域でお考え頂きたく思います。

本学は一八六二年にその礎、加賀藩種痘所を置いて以来、二〇一二年に百五十年を迎えます。ささやかに、しかし誇り高く、二〇一二年を創基百五十年として祝う予定です。

大学院修了後には研究者として、あるいは高度専門職業人として、日本のみならず世界を舞台に活躍することを期待しています。その日を迎えるためにも、挑戦の心を忘れることなく、大学院における充実した生活を送られることを願っています。

本日はまことにおめでとうございます。

鷗外の慧眼

(学位記・修了証書授与式告示 平成23年3月22日)

本日ここに、平成二十二年度金沢大学学位記授与式・修了証書授与式が挙行されますこと、誠に慶賀に存じます。ただ今学部卒業生千七百七十一名、学域卒業生二名、大学院修了生七百二十四名、別科修了生三十八名の方々に学位記および修了証書をお渡し致しました。皆さんおめでとうございます。心からのお祝いを申し上げます。ご家族・保護者の方々には、これまでのご苦労と本学へのご協力に感謝し、併せてお慶びを申し上げます。

皆さんは学位を取得されました。学位の取得は、生涯にわたる学の区切りであり、今後は、これまでに得たものを如何に磨き、活かすかが問われます。金沢大学で勉強したことに加え、師や友人、先輩や後輩さらには地域の方々との交わりなど、在学中に得たことを将来の糧にされることを願っています。

十一日前、今月十一日に、東北地方太平洋沖地震がおきました。それは、明治以来、日本が経験したことのない強烈なものでした。津波は5メートル、10メートルという防潮堤を軽々と越え、

家々を人もろともに飲み込んでいきました。亡くなられた方々に、改めて心からお悔み申し上げます。また、地震とともに、原子力発電所にレベル5（後にレベル7に引き上げ）の事故が発生し、未だ終息せず、地域住民に多大な影響が出ております。現在、地震の被害があまりにも広く、大きく、事態は未だ混沌としていますが、被災された方々が一刻も早く日常の生活にもどられるよう願っております。石川県では四年前、能登半島地震が発生し、多くの学生や教職員が復旧に参画し、被災された方々の心身両面にわたる不安感を共有し、必要に基づいたきめ細かい支援の大切さを実感しました。このような経験も踏まえ、本学としても、今回の地震からの復興に、最大限の助力をする覚悟でおります。

さて、皆さんが過ごした学生時代はいかなる時代であったかを思い起こして下さい。昭和が平成となり、東西冷戦の終結に導いたベルリンの壁が崩壊した二十二年前、一九八九年を想起させる、極めて劇的な変化の時代といえることができるではありません。二〇〇八年にはリーマン・ブラザーズの破綻を契機として世界同時不況が進行し、二年半過ぎた現在においても、世界経済はふらついています。また、世界各地で異常気象が発生し「地球温暖化」が現実的危機として認識され、温室効果ガスの削減が持続可能性の視点を踏まえ、地球規模で真剣に議論され、種々の施策が実行され始めています。今回の地震も含め、歴史が教えるところを知り、歴史の重みに目を向けることこそ、未来を創る原動力となります。自らの過去を見ることにより、これからの生き

方が見え、社会を見ることにより、人生の方向が見えてきます。学生時代がいかなる時代であったかに耳を澄まし、現在を深く知り、認識することにより自らの立つ位置を見いだし、未来を作る共同作業に参画して下さい。

二十一世紀の大きな特徴の一つはグローバリゼーションであります。モノやヒトの交流を主体とするグローバリゼーションの起源は、十六世紀の大航海時代、あるいは十八世紀のイギリスにおける工業化が起源とされています。しかし、交流の拡大という観点からみれば、人類の歴史とともにグローバリゼーションは進行しているといえるであります。グローバリゼーションは有史以来絶え間なく続きその過程で人類に光と影をもたらしてきました。

近年のグローバリゼーションは、ベルリンの壁崩壊後とほぼ重なっており、ジャンボ機などの大量輸送手段、インターネットや携帯電話などの情報通信手段によって支えられています。進行しているグローバリゼーションは、世界経済の拡大と繁栄をもたらしましたが、同時に世界金融危機、地球温暖化、テロ、感染症の世界的大流行などの地球的規模の問題を引き起こしています。

では、どのようにグローバリゼーションに立ち向かえばよいのでしょうか。

一九一一年（明治四十四）年、森鷗外は随筆「鼎軒先生」の中で「私は日本の近世の学者を一本

足の学者と二本足の学者とに分ける。新しい日本は東洋の文化と西洋の文化とが落ち合つて渦を巻いている国である。：時代は二本足の学者を要求する、東西両洋の文化を、一本ずつの足で踏まえて立つている学者を要求する」と述べています。日本は東洋の足と西洋の足の二本の足で歩かねばならないということでありましょう。それから丁度百年、我が国は、日本の文化を残しながら、西洋の足に重きを置きつつ、見事に西洋の文化を取り込んで発展してきました。そして今、西洋文明の一つの極限である二十世紀型工業文明が転換期を迎え新たな文明の土台（文化）が模索されています。和魂漢才、和魂洋才として表現されるように、我が国固有の文化を残しながらも、中国文化、西洋文化を取り入れた我が国は、グローバリゼーションの世界において新しい文明の創造に最も近い立場にあると確信しています。それは、人類を一つと認識する文明、世界文明でありますか？ 今こそ東洋の足と西洋の足の二本足でしっかりと立ち、歩まねばなりません。

日本の歴史を顧みると、中国の文化と西洋の技術文明を受け入れ、消化しながら日本は発展してきました。ただし、文化と技術は大いに受け入れてきたものの、人とそこに流れる思想をそのまま受け入れることは、ほとんどありませんでした。今直面しているグローバル化は人と情報の移動なしでは語れません。文明の転換期と認識される今ほど、人の交流が求められる時代はありません。新しい文明は、人と経済と思想の沸騰するようなルツボから生まれます。だからこそ、一人一人が個人としてグローバリゼーションに向かって進まねばなりません。

江戸時代、大方の日本人は生まれたところで学び・生活し、そしてそこで一生を終えたことではありません。明治の時代から、人は生活の範囲を拡げ、生まれた場所から離れ、日本国内、沖縄から北海道まであらゆる場所で、さらには国境を越え、学び・生活できるようになりました。そして明治維新から百五十年たった今、我々は一步前進し国境を越え、世界中あらゆる所を日常の場として、学び・生活することが可能となり、また、要請される時代となりました。アジア地域は、気候・文化に共通点を有し、距離的にも近く数時間で往来が可能であります。小松から上海までわずか二時間です。国境はありますが、一つの地域であります。このように条件は整っています。後は、一步海外に向けて踏み出そうという、皆さんの心意気に日本の将来はかかっています。発展するアジアと共に自らの可能性に挑戦する事を期待します。

大学憲章で「東アジアにおける知の拠点として、グローバル化の進む世界に情報を発信する」と謳っている我が大学は、一昨年（二〇〇九年）来アジアを中心に海外事務所の設置、留学生の増加に努めて来ました。現在、アジアを中心に十九カ所の海外事務所を展開し、留学生は一昨年に比べ約百五十名の増加を達成し五百名を超えるに至っております。是非、とにかく一度は外の世界を見聞し、外から自らをそして日本を見つめなおして下さい。

十八世紀の産業革命を起点とする、大量生産・大量消費で特徴づけられる二十世紀型工業文明は終焉を迎え、大きく転換しつつあります。今まさに、経済、政治、科学、社会のあらゆる面において認識・思考・価値観の転換、即ちパラダイムシフト（世界観のもとになっている認識、思考、価値観⇨パラダイム、が根本的に変わること）が起きつつあります。二十一世紀の文明を一言でいえば「情報とコミュニケーション」であるとも言われています。去る一月二十四日のモスクワ空港での自爆テロの現地映像は、メディアより早く、ネットを介して世界中に伝わりました。また、チュニアでの大統領追放劇に端を発した、昨今の中東・北アフリカにおける民衆の原動力は、ネットを介した情報の発信と共有でした。このように、皆さんは情報共有の世界同時性という、これまで人類が経験したことがない世界を歩むこととなります。今まで金沢大学で培ってきた全てを礎にパラダイムシフトに参加して下さい。明るい未来を自ら構想されんことを期待します。

皆さんはすでに御存知かと思いますが、一八六二年に始まる加賀藩種痘所を源流とする母校金沢大学は、来年、二〇一二年に創基百五十年を迎えます。我々はささやかに、しかし厳粛に、創基百五十年を祝う予定です。この様な伝統ある金沢大学で学んだことを誇りとし、勇気をもって志高く一步前に踏み出し、グローバルに活躍されますよう願っております。

二十一世紀は知識基盤社会であり、生涯に渡り継続的に学ばなければなりません。金沢大学は

皆さんの、知の創造の原点という意味で、母なる港、母港であります。同窓生として、仕事の関係で、またふたたび学ぶために母校を訪ねられることがあれば、母校は温かく迎えることを約束します。私は昨年（二〇一〇年）の入学宣誓式告辞で「つよ強い金沢大学生」として育つよう激励しました。皆さんが新しい知の創造を担う「つよ強い金沢大学卒業生、つよ強い社会人」として健闘・発展されることを願い、告辞と致します。

漱石の嘆き

（入学宣誓式 平成23年4月7日）

本日ここに入学宣誓式を迎えた千九百三十九名の新入生の皆さんに、金沢大学を代表して、歓迎の意を表します。また、今日の日を共に祝うために、ここに参集されたご家族・保護者の皆さんに対しても、心よりのお祝いを申し上げます。

去る三月十一日に、東北地方太平洋沖地震がおきました。それは、これまで日本が経験したことのないすさまじいものでした。亡くなられた方々に、改めて心からお悔み申し上げます。また、

地震とともに、福島第一原子力発電所にレベル5（後にレベル7に引き上げ）の事故が発生し、未だに収束していません。現在、地震の被害があまりにも広く、大きく、原発事故と相まって、事態は未だ混沌としています。被災地の方々の復興に向けたつち音は、時とともに大きく聞こえてきます。本学としても、医師・看護師派遣、救援物資の送付、放射能汚染土壌の分析など、今回の地震からの復興に、本学の持てる力を精一杯尽くしています。今後も、力の限りの助力をする覚悟でおります。また、本日ここに集う新入生の皆さんにも、ご家族・親族が直接・間接に被災された方がおられると思います。大学は、今回の地震の影響を受けられた学生の皆さんには最大限の支援をいたします。

さて、金沢大学は、昨年、平成二十二年（二〇一〇）年十一月六日、金沢城公園に「金沢大学誕生の地」の碑を建立しました。その碑文には、「金沢大学は、昭和二十四（一九四九）年五月三十一日旧制の金沢医科大学、同附属薬学専門部、金沢高等師範学校、第四高等学校、金沢工業専門学校、石川師範学校及び石川青年師範学校を前身に、ここに金沢城跡をメインキャンパスとして設置された。爾来四十六年、平成七（一九九五）年二月十六日、最後の部局が角間キャンパスに移転するまでの間、この城内には法文学部（のちの文学部、法学部及び経済学部）、教育学部、理学部、薬学部生薬学教室、教養部、附属図書館及び大学本部（事務局 学生部）が置かれ、幾多の有為な人材を輩出した。この地に金沢大学が誕生し、我が国有数の国立総合大学として発展したことを記し、碑を建立す

る」とあります。是非、金沢城公園を訪れ金沢大学誕生の地を実感して下さい。このような歴史を有する金沢大学は一八六二年（文久二年、明治維新の六年前）に設立された加賀藩種痘所を源流としており、我が国で三番目に古い歴史を有しています。来年、平成二十四年は、その礎が築かれてから百五十年を迎えることとなります。来年を創基百五十年として皆さんとともに祝おうではありませんか。

大学とは、学問の府であるとともに、社会のための大学であり、社会により活かされている組織です。大学の歴史においては、学問の伝統を守り、学問を発展させながらも、時代時代の社会の要請に応えて来ました。私たちは、社会のための大学とは何か？という問いを、常に自らに投げかけ、二〇〇四年四月、大学の理念と目標を「金沢大学憲章」として決めました。憲章の中で、自らを、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」と位置づけ、目標実現の第一歩として、二〇〇八年四月、それまでの八学部・二十五学科・課程を再編成し、「三学域・十六学類」の教育組織を構築しました。皆さんはこの学域学類制の第四期生ということになります。諸君には、この新しい学域学類制を実感し、自らの明日を目指して情熱を持って学んで頂きたい。

昨今の大学卒業生の就職難に直面し、高等教育を預かる行政府も大学も、少々アタフタしているようです。本年四月からは、大学が職業教育、キャリア教育に取り組むようにという、文部科

学省令が施行されました。しかし、このような職業教育の必要性は、今に始まったわけではありません。今から丁度百年前、明治四十四年、一九一一年、夏目漱石は随筆「道楽と職業」の中で、大学における職業教育の必要性を次のように説いています。「私はかつて大学に職業学という講座を設けてはどうかということを考えた事がある。建議しやませぬが、ただ考えたことがあるのです。なぜだというと、多くの学生が大学を出る。最高等の教育の府を出る。もちろん天下の秀才が出るものと仮定しまして、そうしてその秀才が出てから何をしているかという、何か糊口の口がないか何か生活の手蔓はないかと朝から晩まで捜して歩いている。天下の秀才を何かないか何かないかと血眼にさせて遊ばせておくのは不経済の話で、一日遊ばせておけば一日の損である」。漱石の言うことは確かに現代にも一脈を通じるものがあります。金沢大学では「社会のための大学」、「教育重視の研究大学」として既に一昨年（平成二十一年度）から全国の大学に先駆けて「就業基礎力十二の力^{ちから}」等のキャリア支援教育を行っています。皆さんにおいては、漱石の嘆きに身を置かないようにするためにも、キャリア形成に積極的に参加していただきたい。

皆さん、中濱万次郎、ジョン万次郎という名前を御存知でしょうか？ 一八四三年、日本人として初めてアメリカ本土の土を踏んだ日本人です。万次郎の長男、中濱東一郎は明治十七（一八八四）年十二月から（翌年明治十八（一八八五）年十月の間の約二年の間）、医学類の前身の石川県甲種医学校の校長を務めました。このように金沢大学には海外進出の学風があるのです。大学

憲章で「東アジアの知の拠点として、グローバル化の進む世界に情報を発信する」と謳っている金沢大学は、海外展開に努めてきました。特に、一昨年、平成二十一（二〇〇九）年来、アジアを中心とした海外展開を図り、現在、アジアを中心に十六カ所の海外事務所を設置し、留学生は概ね五百名に至っています。また、海外の三十一カ国一地域、百四十六の大学や研究所と交流協定を結んでいます。昨年（平成二十二年、二〇一〇年）には、カンボジアのアンコール遺跡整備公団の協力を得て、全国的にも未だ珍しい大学の組織的海外インターンシップを実施しました。このように、留学生受け入れだけではなく、皆さんが海外でバーチャルではない世界を体験できる機会の提供に努力しています。皆さんの積極的な参加を期待しています。

大量生産、大量消費を特徴とする、これまでの二十世紀型工業文明は終焉を迎えようとしています。皆さんが生き抜く二十一世紀はいかなる世紀なのでしょう。私は、「切羽詰まっている世紀。そして新しい世界観での希望の世紀」だと思っています。私が小学生・中学生の時代、石油の埋蔵量等について教わりました。埋蔵量は有限であることを知り、将来はどうなるのであるうと思いなながらも、これは遠い遠い将来のことと何も気にしませんでした。それから五十年、石油の枯渇が現実の問題となってきました。石油を始めとする化石燃料や水資源の枯渇、そしてそれらが関係する気候・環境の激変が、地球さらには人類の存在をも脅かす切実な切羽詰まった問題となり、今、持続可能性があらゆる面で叫ばれ、論じられています。それらの問題を解決する

のは、一つは科学技術であり、一つは認識・思考・価値観の大転換、パラダイムシフトでありましょう。今世紀中には、科学技術の発展とパラダイムシフトの延長線上に、新しい世界観に基づく社会（・世界）、人類を一つと認識できる世界文明が拓かれていくものと確信しています。

このような時代、皆さんには専門性と専門性の融合が求められるでありましょう。そして、それらを皆さんに指し示すのは教養であります。地球上に生命が誕生してから三十億年、ホモサピエンス誕生から二十万年、皆さんが生まれてからの年数といった時間軸、また、個人、家族、社会、国家、世界といった空間軸、この時間軸と空間軸の交差を深く考え、自身の位置付けができる力、私はこれを教養といいます。

皆さんは教養を身につけ、自分が何をやりたいかを見つけねばなりません。皆さんのこの様な学びのために、大学は様々な教育プログラムを準備しています。さらに、「金沢市中心部での街中講義」や能登半島に教育研究の拠点、「能登オペレーティング・ユニット」を設け、新たな環境教育の支援組織をつくりました。金沢大学のメインキャンパスがある角間地区は、（東京ドーム四十三個分という）広大な里山に囲まれた自然豊かなキャンパスです。この里山での生物モニタリングや二十一世紀型里山作りなど、環境をキーワードとした教育研究活動に積極的に参加して下さい。日々の生活も教養の涵養には大切なことです。また、文化やスポーツ等の課外活動を通じ、

友情を育んで下さい。先程申したように、外国に出かけ、また、留学生と日常的に交流して下さい。広く多様な学び、深い学び、様々な人との出会い・別れ、喜びや悲しみ、様々な言語や異文化との出会いなど、リアリティーある多様な思考との出会いが、(精神力を磨き、)教養を涵養するでしょう。

学問や研究を支える力は、自らの関心と興味にあります。フランスの偉大な細菌学者パスツールは、「人生を科学にささげる人にとって、発見の数がふえること以上に幸福なことはありません。さらに研究結果が、ただちに実地に応用されるのを知ったときには、幸福は最高潮に達するでしょう」(To him who devotes his life to science, nothing can give more happiness than increasing the number of discoveries, but his cup of joy is full when the results of his studies immediately find practical applications.) (出典 ルイ・パスツール、ルネ・デュボス著、竹田美文訳)と言っています。明日から始まる大学生活での学びの中で、自らの関心や興味を一層鋭くすることが期待されます。同時に、恐らくは劇的に変化する社会にキチンと目を向け、実社会に参加する準備をして下さい。学生時代、そこには自らが律する時間が沢山あります。今回の大震災からの復興には、多くの事が求められています。復興とは、震災前の状態に単に戻すことではなく、新たな形で、地域を、社会を、ひいては、より強い新しい日本を創造することだと思えます。是非、これからの四年間あるいは六年間、このような激動の世界に身を置き、学問はもとより、社会を直視し、復興に参画し、公

共心を養い、高い志を持った人として成長されていくことを願っています。

来年迎える創基百五十年の記念事業の一環として本年秋にアジア五大学学長フォーラム（in金沢）及びアジア学生フォーラム（in金沢）を開催します。プラトンの学園アカデメイアは、古代ギリシャ世界における最も整った高等教育機関、いわば世界最初の大学であって、教育・研究の中心をなしていました。それは、アテナイ市の北西、ディピュロン門から1・5キロメートルの距離に位置し、美しい自然と静寂に囲まれ、果樹の栽培がなされていました。金沢大学が位置する角間は、喧噪の街並みから2キロメートル、美しい自然と静寂、果樹園に代わる里山があります。「現代のアカデメイア」として、我ここにありと世界に発信しようではありませんか。

歴史都市金沢、創造都市金沢、そこに位置する金沢大学において学ぶことを誇りとし、充実した大学生活を謳歌され、より強い新しい日本を創造する「つよ強い金沢大学生」として育っていかれることを祈念し、告辞と致します。

学問の府としての矜持

(大学院入学宣誓式 平成23年4月7日)

本日ここに金沢大学大学院に入学された八百四十三名の皆さんに、金沢大学を代表して心からの歓迎の意を表します。皆さんは今までの学びの一層の発展を期して、大学院においてさらに研鑽する道を選ばれました。この挑戦が実りあるものとなるよう期待いたします。

去る三月十一日、マグニチュード9.0という未曾有の巨大地震が起きました。

多くの方が亡くなられ、あるいは行方不明のままです。深い哀悼の意をささげます。とともに、地震で被災された方々、福島第一原子力発電所事故により避難を余儀なくされている方々に、心よりお見舞いを申し上げます。被災地では復興に向けて人々が不眠不休の努力をされています。本学でも、医師・看護師派遣、放射能汚染土壌の分析など、地震からの復興に、本学の持つ力を精一杯尽くしています。今後も一層の努力をする覚悟でおります。

さて、本学は、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を基本理念とした金沢大学憲章を定め、北陸地域を拠点として日本、さらには東アジアにおけるアカデミアの拠点として、多様

な人材を育成するとともに、真理の探究に関わる基礎研究から技術に直結する実践研究までの卓越した知の創造に努めています。

個人における学問や研究の源泉は、自らの関心と興味にあります。皆さんには、何にも増して「自らの関心・興味」、そして深い教養に裏打ちされた鋭い専門性を磨いてください。概念として基礎研究、応用研究、実践研究という言葉がありますが、皆さんが大学で行う研究は新しい知、原理・原則を生み出すものであり、そう言った意味では基礎研究（広義）と言うことが出来ます。

大学は学問の府であるとともに、社会のための大学を、その存在理由としています。フランスの偉大な細菌学者パスツールの言葉に、「人生を科学にささげる人にとって、発見の数がふえること以上に幸福なことはありません。さらに研究結果が、ただちに実地に応用されるのを知ったときには、幸福は最高潮に達するでしょう」(To him who devotes his life to science, nothing can give more happiness than increasing the number of discoveries, but his cup of joy is full when the results of his studies immediately find practical applications.)とあります。現下の社会は、研究成果の実用化、いわゆる社会への還元がこれまでも増して求められています。社会の一員としての大学は、学問の府として矜持を保ち、時代の潮流に過剰に合わせることなく、同時に、社会の要請に応える大学でなければなりません。

この理念のもと、本学は平成十七年度から、博士前期課程学生を対象として、企業において長期インターンシップを実施する派遣型高度人材育成共同プランを実施いたしました。さらに、昨年度から、博士後期課程にキャリア形成教育を導入し、広い視野と専門性を備えた高度専門職業人（開発型研究博士人材）の輩出を積極的に進める「産学連携による博士人材のキャリア形成教育プログラム」を開始いたしました。このような学びを通して、生き甲斐を感じて社会に立ち向かえるような人として育ち、知的基盤社会の形成に参画されることを切に望んでいます。

「東アジアのアカデミアの拠点」を目指す本学は、English Doctrate Program を設けると共に、アジアを中心に海外事務所の設置や留学生の受け入れに努めて来ました。現在、アジアを中心に十六カ所の海外事務所を展開し、大学院生を中心として留学生は概ね五百名に至っています。近年、グローバル化の進む世界に逆行する形で、日本人の留学生は減少し、若者の内向き志向が騒がれています。平成二十（二〇〇八）年に海外留学した日本人は、ピーク時（平成十六年、二〇〇四年、八万二千九百人）に比べ約一万六千人も少ない約六万六千八百人にすぎなかったと報告されています。

私は昭和四十六（一九七二）年（海外留学生、ほぼ五千人）、大学院三年の時に一年間米国へ留学

いたしました。当時、日本ではまだ使われていなかった研究手法を求めて留学したわけです。実際、研究成果を留学で得る事ができました。更に大きな成果は、研究、思考、生活、あらゆる点において文化の違いを体験したこと、人とのつながりができたことでした。僅か一年でしたが、その後の研究生生活、人生において大きな指針を与えてくれたことは間違いありません。確かに、今は、外国でなければ出来ない研究はほとんどないでありましょう。しかしながら、異文化を五感で知ること、友を作ること、それは何物にも増して価値あることです。異文化の体験と、人との出会いは、新しい知の創造、融合知の創造に極めて大きな威力を発揮するはずです。

英国における産業革命を起点とする二十世紀型工業文明は終焉を迎えようとしています。皆さんが生き抜く二十一世紀はいかなる世紀となるのでしょうか。私は「切羽詰まっている世紀。そして新しい世界観での希望の世紀」だと思っています。石油を始めとする化石燃料や水産資源の枯渇、そしてそれらが関係する気候・環境問題、さらには食糧問題等は、数十年前から薄々誰もが感じていたことです。これが今や、人類さらには地球環境をも脅かす切実な切羽詰まった現実問題となり、昨今、持続可能性があらゆる面で、叫ばれ、論じられてきました。現在、まさに切羽詰まった現実問題として突きつけられています。三月十一日の東北地方太平洋沖地震により発生した、福島第一原子力発電所の事故を契機として、価値観の転換が迫られるでしょう。学間に携わる者は、持てる専門性を活かし、社会の再生に参画することが期待されています。また、我々

の生きるこの日本の、社会システムの将来を見据えなければなりません。それらの問題を解決するのは、一つは科学技術であり、一つは認識・思考・価値観の大転換、パラダイムシフトでありましょう。科学技術の発展、パラダイムシフト、それらを先導する学術の発展の延長線上には新しい世界観に基づく社会、人類を一つと認識する文明が拓かれていくものと確信しています。そのような社会において、皆さんの主役としての存在が強く期待されています。

本学は一八六二年に築かれた加賀藩種痘所を礎とし、来年、二〇一二年には百五十年を迎えます。我々は二〇一二年を創基百五十年として位置付け、昨年から記念事業を行っております。本年秋にはアジア五大学学長フォーラム（in金沢）およびアジア学生フォーラム（in金沢）を開催します。プラトンの学園アカデメイアはアテナイ市の北西、ディピュロン門の外1.5キロメートルに位置し、美しい自然と静寂に囲まれ、そこには果樹が栽培されてきました。金沢大学が位置する角間は、喧噪の街並みから2キロメートル、美しい自然と静寂、果樹園に代わる里山があります。角間の地は「現代のアカデメイア」としてふさわしく、この地から我々の知的所産を世界に発信しようではありませんか。

金沢大学が位置する金沢市は、歴史都市であり創造都市でもあります。また、昨年四月に「学生のまち推進条例」を施行した学生に優しい街でもあります。そこでの生活、人との交わり、文

化芸術との出会いは皆さんの創造性を一層高めることでしょう。

ここ、金沢大学で学ぶ事を誇りとし、挑戦の心を忘れることなく、充実した大学院生活を送られ、日本のみならず世界を舞台に活躍し、より強い新しい日本を創造する「つよ強い金沢大学生」として成長されることを祈念し、告辞といたします。

人間と科学技術の折り合い

(学位記・修了証書授与式 平成24年3月22日)

ここに、平成二十三年度金沢大学学位記・修了証書授与式が挙行されますこと、誠に慶賀に存じます。ただ今学域卒業生千四百八十二名、学部卒業生二百九十二名、大学院修了生七百四十九名、別科修了生三十七名の方々に学位記および修了証書をお渡し致しました。皆さんおめでとうございます。心からの御祝いを申し上げます。ご家族・保護者の方々には、これまでのご苦勞と本学へのご協力に感謝し、併せてお慶びを申し上げます。

人生の大きな区切りとなる今日、皆さんはそれぞれに学生生活を振り返り、これからの人生への新たな決意を固めていることと思います。金沢という土地との出会い、人との出会い、心を動かす書物との出会い：いくつもの出会いに導かれ、皆さんの「今」があります。どうか、今日という日は皆さんにとりどのような日であるのか、一人ひとりが真剣にむきあつて頂きたく思います。

皆さんの最終学年の年、二〇一一年という年を私達は生涯忘れないでしょう。一年前、三月十一日。地震・津波・原子力発電所事故・電力喪失・風評被害。我が国を襲った東日本大震災は私達に衝撃を与え、日常風景を変えました。震災以降、今まで眠っていたわが国固有の価値観が表に現れ、それとともに新たな認識や思考が模索され、パラダイムシフトが迫られています。大量生産・大量消費で象徴される二十世紀型工業文明の転換が、少なくともわが国では必然でありましょう。皆さんはこの様な世界に歩みを進めることとなります。

東日本大震災に際し、金沢大学では地震直後から様々な支援活動を行って来ました。附属病院の医療支援や心のケア、放射性物質を扱う専門家による汚染調査や汚染除去、地震の専門家としての情報発信や防災立案、そして、学生の活力・奉仕精神が発揮された被災地でのボランティア活動などがあります。皆さんの中にはこれらの活動に参加された方がおられることと思います。今後とも皆さんとともに復旧・復興に積極的に参加いたしたく存じます。

皆さんの母校、金沢大学は一八六二年に設立された加賀藩彦三種痘所を源流としています。それから数えて百五十年の本年、二〇二二年を大学の創基百五十年と位置付け、〈先魁 共存 創造〉の三つのキーコンセプトの下、本学のアイデンティティを具体的な姿として確立するべく事業を展開しています。その歴史における百四十六年目の二〇〇八年、今から四年前に、キーコンセプトの一つである〈先魁〉として、明治以来続いてきた学部学科制を廃止し、学士教育組織を学域学類制へと改編しました。従って本日は、学域学類制の第一期生を送り出す、記念すべき日であります。

今少し、医学部および薬学部卒業生、大学院修了生、別科修了生の皆さんも、金沢大学が刻む歴史の一環としてお聞き願いたい。四年前の学士課程入学宣誓式において、私は学域学類制の概要を説明し、それに続いて、「諸君には、この新しい学域学類制を実感し、自らの明日を目指して情熱を持って、学んで頂きたい。そして、問題や不満があれば、私や副学長を始めとした教員に、躊躇することなく話して頂き、学域・学類という新体制を素晴らしいものにしていくための営みに、積極的に参加してくれることを願っています」と語りかけました。

それから四年。皆さんが今後社会でどのように活躍し、結果として学域学類制がどのような評

価を受けるかは、皆さんの社会における活躍にかかっています。学域学類制をさらに進化させるべく、この四月から大学院を改編する予定です。皆さんには学域学類制での学びについて、また社会でこの新教育体制が如何に機能しているかに関して、是非御意見を大学に寄せて頂きたい。それが皆さんの母校をより発展させる最善の方法と思っております。

さて、皆さんは四月から社会人として、あるいは大学院生として人生の新たな一步を踏み出します。今、人類は資源・エネルギー、食糧、人口、気候変動、地球温暖化など、地球規模の問題に直面しています。これらの問題の解決、さらには東日本大震災からの復旧・復興には科学技術が大きな役割を果たすことは間違いありません。科学技術の発展は、衣・食・住（すべて）において）快適性をもたらし、人間生活を豊かにし、便利にしました。皆さんが生きる二十一世紀においても、科学技術はさらに発展し続けることは確実でありましょう。

しかし、皆さん、本日はしばし立ち止まり、我々人間と科学技術について少し考えて頂きたい。科学技術を生み出すのは人間であり、自らを取り巻く環境を変えてきたことは事実であります。一方、人間には変わらない本質があります（最も顕著な点は感覚にあります）。人は一万年以上前の旧石器時代に描かれたスペインのアルタミラ洞窟壁画、フランスのラスコー洞窟壁画に高い芸術性を見いだします。時代を超えて人々が愛し保存してきたもの、彫像、絵画、音楽等々に、今に

生きる我々も感動します。感動を生み出す根源は感覚であり、そこには、時代と文明を超えて受け継がれてきた人間の変わらない本質が見出せます。また、文化、「その地域で形成された人間の生き方・生活様式を中心にし、宗教・芸術、あるいは政治・法律等がひとつの形をもって存在する」と言われる文化、それは人々の日々の生活の支えであり、容易には変わりません。

変わらない本質としての感覚を有し、容易には変わらない文化を受け継ぐ人間、そして科学技術を発展させ続ける人間。この二面性の折り合いに、私たちは一層の意を尽くすべきではないでしょうか。

最後に今一度母校金沢大学に思いを致して下さい。金沢大学は昨年十一月五日、彦三郵便局の前に「金沢大学発祥の地」の石碑を建立しました。碑文にはおおよそ、「加賀藩は一八六二（文久二年）三月に彦三種痘所を開設し、これが国立金沢大学へと続く系譜の淵源となった」とあり、石碑は、金沢大学濫觴の証を後世に向けて記し続けます。

また、昨年十一月十二日にはアジア五大学学長フォーラムを石川県立能楽堂で開催し、その挨拶の最後で、私は、「種痘所が開設された当時、誰が、百五十年後の今日、アジアの国々を代表する諸大学が歴史の荒波を乗り越えてここに集うことを想像できたでしょうか。そして誰が、今から百五十年先の大学の未来を確実に語るができるでしょうか。しかし、私たちは、学問の

力によって未来のアジア世界と大学の姿を、協調と連帯の願いを込めて描かなければなりません」と申しました。

金沢大学は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を基本理念とし「東アジアの知の拠点」を目指して一層の努力をいたします。皆さんには、生涯を通じて本学の営みに積極的に参加して下さいを願っています。

「伝統なき創造は盲目的、創造なき伝統は空虚である」。金沢出身の神経内科学者 冲中重雄先生（一九七〇年文化勲章受章、一九〇二～一九九二）の言葉です。皆さんが進まれる分野はいかなるものであれ、継承された知識を基礎として、新たな知を創造されんことを期待します。

金沢大学は皆さんの、知の創造の原点という意味で、母なる港、母港であります。同窓生として、仕事の関係で、また再び学ぶために母校を訪ねられることがあれば、母校は温かく迎えることを約束します。皆さんが、金沢大学創基百五十年の記念の年に卒業したことを胸に刻み、新しい知の創造を担う「強い金沢大学卒業生、強い社会人」として勇気をもって志高く、グローバルに活躍されることを願い、告辞と致します。

創基百五十年

(入学宣誓式 平成24年4月7日)

本日ここに、平成二十四年度金沢大学入学宣誓式が挙行されますこと、誠に慶賀に存じます。ただ今、学域入学生千八百七十四名、大学院入学生八百十五名、別科入学生四十一名の入学許可を宣言致しました。二千七百三十名の皆さん、皆さんは今日から金沢大学の学生です。おめでとうございます。金沢大学を代表して、皆さんを心から歓迎いたします。また、今日の日を共に祝うために、ここに参集されましたご家族の皆さまに対しましても、心よりのお祝いを申し上げます。

一年と二十七日前、昨年(去年)の三月十一日、東北地方太平洋沖地震が起きました。この(未曾有の)大災害に際し、金沢大学は地震直後から様々な支援活動を行って来ました。附属病院の医療支援や心のケア、放射性物質を扱う専門家による汚染調査や汚染除去、地震の専門家としての情報発信や防災立案、学生の活力や奉仕精神が強く発揮された被災地でのボランティア活動などであります。今後とも皆さんとともに手を携えて復旧・復興に力を尽くしたく存じます。

さて、皆さんが入学された金沢大学は一八六二(文久二)年に設立された加賀藩彦三種痘所を

源流としています。彦三種痘所は医学部の淵源であり、一八六七（慶応三）年には卯辰山養生所ができ、薬学部の前身である製薬所舎密局（せいみきょく）が付設されました。一八七四（明治七）年には教育部の前身である集成学校・石川県師範学校ができ、一八八六（明治十九）年には第四高等中学校が設立され、一八九四（明治二十七）年に第四高等学校へと引き継がれました。第四高等学校には文科と理科があり、それぞれ、後の法学、文学、経済学部、および理学部の母体となっています。工学系は一番新しく、一九二〇（大正九）年に設立された金沢高等工業学校が、工学部へと発展しました。

金沢大学はこの様な様々な歴史と伝統を持った高等教育機関が一九四九（昭和二十四）年に国立学校設置法のもとで統合・設置され、八学部・二十五学科・課程を有する総合大学へと発展してきました。この間、一九九三（平成五）年における社会環境科学大学院（博士課程）の設置をもって、全ての学問領域で大学院博士課程が整い、研究大学としての体制が整備されました。二〇〇四（平成十六）年には、大学の理念と目標を「金沢大学憲章」として定め、その前文で自らを「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」と位置付けました。そして憲章に謳われた理念・目標を実現すべく、その第一歩として、二〇〇八（平成二十）年に、これまでの学部学科制を学域学類制に再編成し、この三月に第一期生が卒業を迎えました。

本年、二〇一二年は、金沢大学の源流、加賀藩彦三種痘所の設立から数えて百五十年の節目の年です。私達は本年を創基百五十年と位置付け、次の百五十年を見据えて、様々な記念事業を行っています。一昨年十一月六日、金沢城公園に「金沢大学誕生の地」の石碑を据えました。また、昨年十一月五日には、加賀藩彦三種痘所の跡地である金沢市彦三郵便局前に「金沢大学発祥の地」の石碑を建立しました。是非、彦三郵便局、金沢城公園を訪れ、金沢大学発祥の地、誕生の地を実感して下さい。皆さんは、金沢大学の記念すべき年に入学されました。皆さんの母校となる金沢大学の創基百五十年事業へ積極的に参加して下さいよう、期待しています。

ところで、皆さんはパスツール（一八二二―一八九五）という名前をどこかで聞いたことがあるかと思えます。パスツールは、近代細菌学の祖として、また、牛乳などの低温殺菌法（パスツール&ベルナールは一八六二年に低温殺菌法の最初の実験を行った）の開発者として今に名を残す十九世紀のフランスが生んだ著名な細菌学者です。金沢大学の基が置かれた年の七年前、一八五五年、パスツールは、若くして、リール理科大学教授兼学部長に任命されました。任命に際し、時の文部大臣がリール大学長に書いた手紙には次のようにあります。「パスツール氏は科学に対する愛情によって我を忘れるようなことがあつてはなりません。彼は、大学での教育が、科学理論の発展を保ちながらも、影響が広範囲に及ぶ結果を生むよう、リール地方の実際的要求に応える独自の応用研究に邁進しなければならない、ということを忘れてはならないのです」。

リール大学長への手紙にみられるように、百五十年前においても、大学には「より直接的な社会貢献」、いわば、「手段的価値としての教育・研究」が求められていたのは明らかであります。今日に至るまで、大学はこの「手段的価値としての教育・研究」と「知の継承・知の創造」で表わされる「内在的価値としての教育・研究」においてバランスをとりつつ、時代とともに異なる要請に応えながら、「社会のため」に存在し発展してきた、といえます。

二十一世紀の今、我が国においては、教育基本法(二〇〇六年改正 第七条)「大学は学術の中心として、高い教養と専門的能力を養うとともに深く真理を探求して新たな知見を創造し、これらの成果を広く提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」に見られるように、「手段的価値としての教育・研究」が大いに期待されています。このような、時代の要請に応え、金沢大学では産学官連携活動を強化するとともに、インターシップ教育プログラムを中心として、キャリア教育に取り組んでいるところです。皆さんはこのようなプログラムを大いに活用し、「社会のため」の公欲の人として成長していただきたい。

個人を取り巻く文化には、国家、地方、共同体といろいろなレベルがあります。人間の肌を沁み、その中で育っていく文化は共同体レベルでありましょう。そこにある文化とは、その文化に

身を任せてしまえば、平穩に一生を送ることができるとも思いません。しかし、二十一世紀に生きる皆さんは、グローバル化がすすむ世界へ踏み出す準備をしなければなりません。多様な異文化に対応する柔軟性を養い、英語という共通言語を中心としながらも複数言語をツールとして操る、いうなれば新人類へと脱皮しなければなりません。生まれ育った文化を忘れることなく、自らの国の文化を誇りとし、併せて、国際感覚を備えた新鋭として成長していただきたい。その足場となり、それに手を添えることが大学の使命の一つであります。

そのためには異文化交流が欠かせません。異文化との出会いは、ショックを与え、異質なるものへの理解と寛容、そして創造への力を育み、新たな知の創造へとつながります。大学憲章で「東アジアの知の拠点として、グローバル化の進む世界に情報を発信する」と謳っている金沢大学は、アジアを中心に海外事務所の設置や留学生の増加に努めて来ました。二年前からは、組織的海外インターンシップをカンボジアのアンコール遺跡整備公団の協力を得て実施しています。さらに、様々な短期、長期の留学プログラムも準備しています。皆さんにはこの様なプログラムを活用し異文化交流に努め、自由に世界を行き来する人として成長されんことを願っております。

今、人類は資源・エネルギー、食糧、人口、気候変動、地球温暖化などの地球規模の問題に直面しています。また、我が国においては東日本大震災からの復旧・復興が重い課題であります。

これらの事象を鳥瞰するならば、大量生産・大量消費をパラダイムとするこれまでの二十世紀型工業文明は、少なくとも今日の日本においては、世界に先駆けて終焉を迎えているといえるでありましょう。パラダイムシフトが求められる文明の転換期には、深い教養こそが問題解決の糧となり、自己の生きる道を指し示します。

地球上に生命が誕生してからの三十億年、ホモサピエンス誕生から二十万年、我々が生まれてからの年月といった時間軸、そして、個人、家族、社会、国家、世界といった空間軸。このような時間軸と空間軸からなる世界において己のポジショニングができる力、それが教養です。広く多様な学び、人との出会い・別れ、喜びや悲しみ、様々な言語や異文化との出会いなど、多くの思考との交わりが、皆さんの教養を涵養するでありましょう。

「伝統なき創造は盲目的、創造なき伝統は空虚である」。これは金沢出身の神経内科学者冲中重雄先生（一九七〇年文化勲章受章、一九〇二～一九九二）の言葉です。皆さんが学ばれる分野はいかなるものであれ、伝統の基礎の上に、即ち継承された知識を基礎として新たな知を創造されんことを期待します。

金沢大学が位置する金沢市は、加賀藩の城下町として栄え、天下の書府として長い歴史のあ

る「歴史都市」であります。一方、伝統の中から創造が芽吹いている「創造都市」でもありません。斬新な金沢21世紀美術館、鈴木大拙館を兼六園という日本屈指の庭園と隣り合わせに建て、そこに環境と調和した空間を作り上げた金沢は、時代を切り拓く鋭い感覚を備えたルネサンス都市と言えます。また、一昨年四月には、「学生のまち推進条例（金沢市における学生のまちの推進に関する条例）」を施行した学生に優しい街でもあります。そこでの生活、人との交わり、文化芸術の出会い、皆さんの勉学を一層実りあるものとするでしょう。金沢大学において、創基百五十年入学生として学ぶことを誇りとし、充実した大学生活を謳歌し「つよ強い金沢大学生」として育っていかれることを祈念し、告辞と致します。

自己の立ち位置、格差の無い豊かな社会へ

（学位記・修了証書授与式 平成25年3月22日）

ここに、平成二十四年度金沢大学学位記・修了証書授与式が挙行されますこと、誠に慶賀に存じます。ただ今学域卒業生千六百十二名、学部卒業生百六十四名、大学院修了生七百三十六名、別科修了生四十二名の方々に学位記・修了証書をお渡し致しました。皆さんおめでとございま

す。心からの御祝いを申し上げます。ご家族・保護者の方々には、これまでのご苦勞と本学へのご協力に感謝し、併せてお慶びを申し上げます。

世界には過去があり、現在があり、そして未来があります。過去・現在・未来は途切れているものではありません。過去・現在・未来は連続しているものであり、過去が現在を創り、現在が未来を創ります。人生の大きな区切りとなる今日、皆さんにはそれぞれに学生生活を振り返り、ここ金沢で過ごした日々が、いかなる時代にあつたのかを胸に刻んで下さい。

振り返ってみますと、五年前の二〇〇八（平成二十）年にはリーマンショックに端を発した世界金融危機が勃発しました。二〇〇九（平成二十一）年には米国ではオバマ政権が発足し、我が国では政権が交代（民主党政権が発足）しました。二〇一〇（平成二十二）年、上海万博が開催され二〇〇八年の北京オリンピック開催とが相まって中国が世界に大きく発信されました。二〇一一年三月十一日、東北地方太平洋沖地震・津波・福島原発事故が発生し、ヨーロッパではユーロ危機が起きました。昨年、二〇一二年にはロンドンオリンピックで元気づけられるとともに、我が国を含め多くの国々で、政権が交代しました。

「情報とコミュニケーション」を基盤とする、国境がない激動の時代であり、新しい世界観を模索する時代であつたかと認識しています。皆さんには、それぞれに過去そして現在をしつかりと認識し、自身の現時点における立ち位置を定めて下さい。

二年前、二〇一一年三月十一日、我が国を襲った東日本大震災は私達に衝撃を与え、日常風景を変えました。同時に、我々の心の持ち方にも大きく影響しました。二〇一一年を表す漢字として、「絆」が選ばれました。絆の在り方は、内なる心の在り様を外に表します。

東日本大震災に際し、金沢大学では地震直後から様々な支援活動を行って来ました。附属病院の医療支援や心のケア、放射性物質を扱う専門家による汚染調査や汚染除去、地震の専門家としての情報発信や防災立案、学生の活力・奉仕精神が発揮された被災地でのボランティア活動、そして、救援への募金活動などであります。皆さんの中にはこれらの活動に参加された方がおられることと思います。今後とも、被災された方々の思いを大切に、皆さんとともに復旧・復興に積極的に参加いたしたく存じます。そのような活動を通じて、日本という社会に、皆さんの心に、新しい世界観が芽生えて来るものと信じています。

かつては大学に入学し、卒業することは豊かさを保証するものであり、また、豊かさは比較的に明確な形で私たちの前にありました。特に、白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫を三種の神器とした一九五〇年代後半から一九六〇年代前半の第一次高度経済成長期、三種の神器がカラーテレビ、乗用車、クーラーとなった一九六〇年代半ばから一九七〇年代前半の第二次高度経済成長期の頃。その時代、大学を卒業することは豊かさへの手形であり、社会が、国民一人一人に「自

己の立ち位置、存在理由」を与えてくれました。皆さんが生きる二十一世紀、食糧を始めとする資源の逼迫、環境問題、情報とコミュニケーション、少子高齢社会等、地球規模の不安定要因が先導する形で、世界は不均衡の度合いが深まりつつあるように見られます。しかし、一方、情報と教育の一層のグローバル化、労働力の流動など、世界は平準化に向かって進んでおります。希望を持って将来を展望すれば、先進国、発展途上国が一体化することでしょう。その時、世界は格差の無い平等な破滅を迎えるのでしょうか、あるいは格差の無い豊かな社会となるのでしょうか。

世界は、人の尊厳を至上のものとした格差の無い豊かな社会へと向かわねばなりません。いかなる社会が豊かな社会かは茫漠としますが、皆さんには、ここ金沢大学で今までに培った全てを投入し、歴史という時間軸と今生きる空間軸を座標とし、「自己の立ち位置」を定め、豊かな社会の構築に参画して下さい。

皆さんの母校、金沢大学は一八六二年に設立された加賀藩彦三種痘所を源流としています。それから数えて百五十年の昨年、二〇一二年を大学の創基百五十年と位置付け、〈先魁 共存 創造〉の三つのキーコンセプトの下、本学のアイデンティティを具体的な姿として確立するべく事業を展開してきました。三年前、二〇一〇年には金沢城公園に「金沢大学誕生の地」の石碑を据え、一昨年、二〇一一年には彦三種痘所の故地に「金沢大学発祥の地」の石碑を建立しました。石碑

は、金沢大学濫觴の証しを後世に向けて伝え続けます。また、昨年五月三十日には金沢大学創基百五十年式典を挙行了いたしました。

その挨拶の最後で、私は、「過酷な労働の必要もなく衣食住が満たされる時代にあっても、人は、決して愛や遊びのような形而下の営みで満足することではなく、知的活動・知の創造にこそ満足を見いだすことになることでしょう。こうした世界においては、大学は、多くの人が集い活動し、『知の継承・知の創造』に満足を見いだす場となるでしょう。そこでは、知の拠り所（トポス）であること自体が、すでに『社会のため』の大学となることであり、私は、そのような時代においても金沢大学が光り輝くことを確信しています」と申しました。本年、創基百五十年記念事業の締めくくりとして、キャンパスに、「学問の木」「大器晩成の木」と称される楷の木を植樹します。光り輝く金沢大学を見守る大樹に育ち、皆さんを迎えることでしょう。

現下の金沢大学は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を基本理念として、「東アジアの知の拠点」を目指し、世界の平和と人類の持続的な発展に資するよう、一層の努力を致します。皆さんには、生涯を通じて、自らを高めるとともに、本学の営みに積極的に参加して下さい。

「自ら信じるころ篤ければ、成果自ずから到る」。赤痢の病原体の赤痢菌を発見した細菌学者志賀潔（一八七二—一九五七）の言葉です。大量生産・大量消費を特徴とする二十世紀型工業文

明の基盤を構成する認識・思考・価値観の転換、パラダイムシフトが進行している今、皆さんが進まれる分野はいかなるものであれ、自らを信じ突き進み、新たな知を創造することを期待します。

金沢大学は皆さんの、知の創造の原点という意味で、母なる港、母港であります。同窓生として、仕事の関係で、また再び学ぶために母校を訪ねられることがあれば、母校は温かく迎えることを約束します。皆さんが、金沢大学の新しい歴史を刻む第一歩の年、創基百五十一年に卒業することを胸に刻み、新しい知の創造を担う「つよ強い金沢大学卒業生、強い社会人」として勇気をもって志高く、グローバルに活躍されることを願い、告辞と致します。

生涯のこよなき宝もの、それは友

(入学宣誓式 平成25年4月7日)

本日ここに、桜満開の中、平成二十五年度金沢大学入学宣誓式が挙行されますこと、誠に慶賀に存じます。ただ今、学域入学生千八百五十七名、大学院入学生七百八十四名、別科入学生

三十七名の入学許可を宣言致しました。二千六百七十八名の皆さん、皆さんは今日から金沢大学の学生です。おめでとうございます。金沢大学を代表して、皆さんを心から歓迎いたします。また、今日の日を共に祝うために、ここに参集されましたご家族の皆さまに対しましても、心からのお祝いを申し上げます。

二年前、二〇一一年三月十一日、東北地方太平洋沖地震が起きました。この大災害に際し、金沢大学は地震直後から様々な支援活動を行って来ました。附属病院の医療支援や心のケア、放射性物質を扱う専門家による汚染調査や汚染除去、地震の専門家としての情報発信や防災立案、学生の活力や奉仕精神が強く発揮された被災地でのボランティア活動などがあります。今後とも皆さんとともに手を携えて復旧・復興に力を尽くしたく存じます。

さて、皆さんが入学された金沢大学は、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を基本理念とし、「東アジアの知の拠点」を目指しています。その歴史をたどりますと、一八六二（文久二年）に設立された加賀藩彦三種痘所を淵源とし、一八七四（明治七）年、一八八七（明治二十）年、一九二〇（大正九）年にそれぞれ設置された石川師範学校、第四高等中学校、金沢高等工業学校を礎として、今日の三学域・十六学類、五研究科の総合大学へと発展してきました。その間、本学の濫觴の一滴であった種痘所の人々の熱い思いと高い倫理性は、教育・研究の多くの領域から

の水脈を集めて金沢大学を北陸に冠たる大河となし、その総合性、多様性、革新性の精神的支柱でありつづけました。

昨年、二〇一二年は淵源から数えて百五十年の節目の年に当たり、創基百五十年と位置づけ、その数年前から〈先魁 共存 創造〉のコンセプトの下、種々の記念事業を行って来ました。三年前、二〇一〇年十一月六日、金沢城公園に「金沢大学誕生の地」の石碑を据えました。また、一昨年十一月五日には、加賀藩彦三種痘所の跡地である金沢市彦三郵便局前に「金沢大学発祥の地」の石碑を建立しました。是非、彦三郵便局、金沢城公園を訪れ、金沢大学発祥の地、誕生の地を実感して下さい。皆さんは、金沢大学が新たな百五十年への第一歩を踏み出す記念すべき年、二〇一三（平成二十五）年に入学されました。新たな歴史を刻むことを大いに期待しています。

学びには、そして人の成長には、空間が重要な意味を有しています。皆さんが学ぶ金沢大学は金沢市に位置しています。都市としての金沢は加賀の一向宗徒による一五四六年の尾山御坊の建立に始まります。その後一五八三年、今から丁度四百三十年前に、加賀藩祖前田利家公が金沢城に入城して以来、城下町として栄え、天下の書府として長い歴史のある町です。戦禍を免れ、また、自然災害も極めて少なく、歴史ある街並み、伝統工芸、伝統芸能が息づいている「歴史都市」です。その歴史の中で、金沢は近代の日本の学術をリードする偉人を輩出してきました。幾人か示しましょう。『善の研究』の西田幾多郎、「雪は天から送られた手紙」と述べた中谷宇吉郎、ア

ドレナリンの結晶化に成功した高峰讓吉、日本の近代化学の祖と称せられる桜井錠二等。金沢ふるさと偉人館を訪れて下さい。そこには、金沢が誇る偉人たちが紹介されています。また、加賀三文豪と称される徳田秋声、泉鏡花、室生犀星を育み、全国に先駆けて、自治体主催文学賞、泉鏡花文学賞を設けた町でもあります。まさに、伝統の中から創造が芽吹いている「創造都市」として面目躍如たるものがあります。地勢的には金沢に近接する小松空港から上海までわずか二時間、さらに二年後には北陸新幹線金沢開業により、東京までの時間が大阪・京都と同様に約二時間半に短縮され、国際的にも国内的にも「交流拠点都市」として発展を期待されている都市と言いうことが出来ます。どうか日本文化の香りが色濃く残る歴史都市・創造都市金沢から、大学のキャンパスからと同様多くを学んで下さい。

私は、一九六二（昭和三十七）年に本学の医学部に入学しました。三年に進級した頃、このまま医学の道を歩むことに疑問を感じ、当時の学生生活委員長の方に相談にあげました。先生は「中村君、医学の道は、臨床だけではないよ。基礎研究もあるし、行政もある、色々あるよ。だから卒業してから考えても良いのではないか」と諭され、医学の道を続けることにしました。このことが転機となり今日に至ったしだいです。「人が歩いて来た路にふと立ち止まって、此の路でよかったかと振り返って見ると同じように、今まで怪しむことなく従ってきた命令に対して、『何故か』（Why, warum）という問いを発する。之こそ人生に於ける最も重要な転機であって、

此の問いこそ世にも貴重な問いである」。これは、ごく最近目にした、社会思想家・経済学者河合榮治郎の著書『学生に与う』の中の一文であります。皆さん、学生時代には是非、ふと立ち止まり、振り返り、そして問いを發してください。

今、人類は資源・エネルギー、食糧、人口、気候変動、地球温暖化などの地球規模の問題に直面しています。また、我が国においては、本年に入り状況は幾分変わりつつあるように見受けられますが、一九九一年頃から現在に至るまで、二十年以上に渡って経済が低迷しており、失われた二十年とも言われている状態にあります。東日本大震災からの復旧・復興も重い課題であります。これらの事象を鳥瞰するならば、大量生産・大量消費を特徴とするこれまでの二十世紀型工業文明は、少なくとも今日の日本においては、世界に先駆けて終焉を迎えているといえるであります。新しい文明の創出には、認識・思考・世界観の大転換、パラダイムシフトが求められ、深い教養こそが、大転換期における自己の「立ち位置」を指し示します。教養は、また、学問の飛躍に於ける直感の源泉でもあります。

地球上に生命が誕生してからの三十億年、ホモサピエンス誕生から二万年、我々・皆さんが生まれてからの年月といった時間軸、そして、個人、家族、社会、国家、世界といった空間軸。このような時間軸と空間軸からなる世界において己の「立ち位置」を定めることができる力、それが教養です。広く多様な学び、人との出会い・別れ、喜びや悲しみ、様々な言語や異文化との

出会いなど、多くの思考との交わりが、皆さんの教養を涵養するでありましょう。

人との出会い、特に「友」は生涯の宝物となります。

Maria Elena Najera が詠った「The Best Thing in Life is a Friend (生涯のこよなき宝もの、それは友)」という詩があります(左ページ参照)。

私の師匠が愛した詩です。私の実感でもあります。

「幸運の女神は、準備された人の心にのみ訪れる」。これは、フランスの偉大な細菌学者パスツールの言葉です。このことを肝に銘じ、友との出会いを大切に、志高く学びの世界を歩み、新たな知を創造されんことを期待します。

本年、創基百五十年記念事業の締めくくりとして、キャンパスに「学問の木」、「大器晩成の木」と称される「楷の木」を植樹します。百五十年の歴史・伝統を有する金沢大学で学ぶこと、また、歴史都市・創造都市金沢で学ぶことを誇りとし、ふと立ち止まり、振り返り、教養豊かな「準備された人」、「強い金沢大学生、global students」として育っていかれることを祈念し、告辞と致します。

The Best Thing in Life is a Friend

Maria Elena Najera

One of the best things about life is friends.
You find them wherever you go.
Friends are essential
because they help bring out the best in you.
When they see your worst, they still care.
They just accept.

Friends are the stars in your happy memories.
In your sad memories,
they are the shoulders you leaned on
and the hearts that listened.
They just care.

Friends help you in your times of need.
When things are going smoothly,
they are content to be your friend.
They just know.

Friends help create all your fun times,
always there to spread laughter and joy.
When you need tears,
friends provide these, too.
They just understand.

You, my friend, are all of these.
And most of all, when you need it,
remember friends just love, as I do you.

個性を磨く

(学位記・修了証書授与式 平成26年3月22日)

ここに、平成二十五年度金沢大学学位記・修了証書授与式が挙行されますこと、誠に慶賀に存じます。ただ今、学域卒業生、学部卒業生、大学院修了生、別科修了生の方々に学位記・修了証書をお渡し致しました。皆さん、誠におめでとございます。また、外国から本学に留学し、学位を取得された方々には、異文化の直中ただなかにおける懸命な努力と研鑽に対し、心からの祝意と敬意を表する次第です。ご家族・保護者の方々には、これまでのご苦勞と本学へのご協力に感謝し、併せてお慶びを申し上げます。

私は、東日本大震災において津波の被害が岩手県で最大だった陸前高田市を大震災以後毎年訪れてきました。昨年暮れに訪れた時、沈下した地盤のかさ上げの大規模な工事を目の当たりにし、たたくむ私には、これは従来従来の復旧・復興ではなく、そこに新たな文明の胎動を感じました。今後とも、皆さんとともに復旧・復興に積極的に参加いたしたく存じます。

皆さんが学んだ金沢大学は、大学憲章において、基本理念を「地域と世界に開かれた教育重視

の研究大学」と定め、「東アジアの知の拠点」として世界に貢献する、と謳っています。本日を皆さんの人生の大きな区切りとして、今一度、我が大学の大学憲章を思い起こし、自らが学んだ大学をしっかり認識し、学生生活を振り返り、これからの人生への新たな決意を固めて頂きたく思います。幾多の教えを受けた師、ともに学び競った友、挫折や絶望の縁で支えてくれた人々、共に喜び・悩んだ友、磨かれた学問、異文化社会におけるインターンシップ、社会での活動、クラブ活動、友と語った夢・希望、そういった事柄の豊かな蓄積が己を動かす原動力であることを認識して下さい。特に「あなた方一人一人の心に刻み込まれた一言」、それは、失恋の慰め、絶望の淵での励まし、成功の祝い、議論における痛烈な批判かも知れません。人生の宝物として大切にして下さい。人生のその時々、皆さんを励まし、勇気を与えてくれるに違いありません。

皆さんは四月から社会人として、あるいは大学院生として人生の新たな一步を踏み出します。過去は未来への道標であります。私は、一九六八年、四十六年前に金沢大学を卒業しました。以来、今日までの四十六年の間、社会は大きく変化しました。白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫を三種の神器とした一九五〇年代後半から一九六〇年代前半の第一次高度経済成長期、三種の神器がカラーテレビ、乗用車、クーラーとなった一九六〇年代半ばから一九七〇年代前半の第二次高度経済成長期を通じて、生活の利便性は著しく向上し、いわゆるアメリカ型のライフスタイルを指標とする豊かさも、また、著しく増しました。しかし、最も重要な変化は社会の様々な領

域における、あるいは、人の行動様式における価値観の転換です。180度の転換であります。

大学で過ごして来た者として、身近な大学に関係することを例示として話しましょう。私が大学に入学した頃、一九六〇年代、当時の風潮は、大学と企業が共同研究することは「望ましくない(けしからん)」というものでしたが、現在は産学共同研究をすることが「奨励される」(しなければ「けしからん」という風に全く逆になりました。皆さんが生き抜くこれからの時代、認識・思考・価値観の大転換、パラダイムシフトが、様々な分野で起こることは必定でありましょう。皆さんには傍観者ではなくパラダイムシフトに主体として参画することが望まれています。

この様な時代、教養こそが自分の生きる道を指し示します。私は、多くの皆さんには、入学宣誓式において「教養」について語りましたが、今一度、語りたく思います。地球上に生命が誕生してからの三十億年、ホモサピエンス誕生からの二万年、皆さんが生まれてからの年月といった時間軸、そして、個人、家族、社会、国家、世界といった空間軸。このような時間軸と空間軸からなる世界において己の「立ち位置」を定めることが出来る力、それが私の言う教養です。皆さんは、今、現時点において各々の「立ち位置」を定めていることと思います。今日からの年月、皆さんは更に成長していくでありましょう。また、皆さんを巡る社会も刻々と変化しています。その様な中で、皆さんの「立ち位置」は当然のことですが変化せねばなりません。「立ち位置」は個において変わらねばならないものであります。広く多様な分野での学び、多くの人々との交

流、様々な思考との交わりが教養を涵養します。変化が激しい今の時代、皆さんには生涯学び続け、「立ち位置」を定められる事を切に願っています。

現下の世界を見ますと、十八世紀の産業革命を起点とする、大量生産・大量消費で特徴づけられる二十世紀型工業文明と、そしてそれを支えた社会システムは終焉を迎え、大きく転換しつつあり、人類は資源・エネルギー、食糧、人口、気候変動、地球温暖化など、地球規模の問題に直面しています。国内にあつては、急速に進む少子高齢化・人口減少、地方文化の衰退、世代間の断裂、さらには東日本大震災からの復旧・復興など、解決すべき問題が山積しています。我々は英知を結集し、知の創造に取り組み、これら諸問題の解決に立ち向かわねばなりません。

皆さんは、本学の学びの中で、教養を涵養する中で、各々自分らしい認識・思考の土台を築かれたことと思います。これこそ、皆さんが最も大切にしなければならぬ「個性」であります。「個性」は、個としての皆さんの中で、本質として変わってはいけない部分であります。「個性」は皆さんの個としての多様性の根源であり、磨かれた多様な個性の衝突こそが知の創造の源泉であります。

皆さんが進む道は、様々な事情で選んだにしろ、一旦決めたならば、「個性」を原動力とし、忍耐強く目標に向かって突き進み、最後までやり遂げることを強く期待します。

皆さんの母校、金沢大学は一八六二年に設立された加賀藩種痘所を源流としています。それから数えて百五十年、二年前の二〇一二年を大学の創基百五十年と位置付け、〈先魁 共存 創造〉の三つのキーコンセプトの下、本学のアイデンティティを具体的な姿として確立するべく事業を展開してきました。皆さんも記憶に新しいところだと思います。その歴史における百四十六年目の二〇〇八年、今から六年前に、キーコンセプトの一つである〈先魁〉として、明治以来続けてきた学部学科制を廃止し、学士教育組織を学域学類制へと改編しました。従って本日は、六年課程の医学類及び薬学類の第一期生を送り出す、記念すべき日であり、本日をもって学域学類制は一旦の完成をみるようになります。

今少し、皆さんには、金沢大学が刻む歴史の一環としてお聞き願いたい。六年前、学域学類制が発足した年の学士課程入学宣誓式において、私は学域学類制の概要を説明し、「諸君には、この新しい学域学類制を実感し、自らの明日を目指して情熱を持って学んで頂きたい。そして、問題や不満があれば、私や副学長を始めとした教員に、躊躇することなく話して頂き、学域・学類という新体制を素晴らしいものにしていくための営みに、積極的に参加してくれることを願っています」と語りかけました。

それから六年。学域学類制は、教育研究組織の、ユニークかつ先進的な改革モデル事例として多くの大学から注目されています。その評価は、皆さんの社会における活躍にかかっています。学域学類制をさらに進化させるべく、昨秋から検討を行っているところですが、皆さんには学域

学類制での学びについて、また、社会でこの新教育体制が如何に機能しているかに関して、是非ご意見を大学に寄せて頂きたい。それが皆さんの母校をより発展させる最善の方法と想って下さい。

昨年十一月二日、創基百五十年記念事業の締めくくりとして、キャンパスに「学問の木」あるいは「大器晩成の木」と称されている楷の木を植えました。いつの日か大樹に育ち、皆さんの母校、金沢大学のシンボルとして、皆さんを迎えることとなるでしょう。遠い将来において到来するかもしれない、過酷な労働の必要もなく衣食住が満たされる時代においても、金沢大学は、多くの人が集い、「知の継承・知の創造」に満足を見いだす場、「内在的価値としての教育研究」が光り輝く大学となるよう、一層の努力を致します。

「幸運の女神は、準備された人の心のみ訪れる」。これは、フランスの偉大な細菌学者パスターの言葉です。私は、「チャンスは全ての人に平等に訪れるが、準備された人のみが捕らえられる」と解釈しています。皆さんには是非、「準備された人」として成長されんことを期待しています。本日卒業される皆さんに、グローバル大学として発展しつつある金沢大学を代表してエールを送ります。

For all you Kanazawa graduates,one important thing.
Whenever,wherever you are, never fail to keep a strong identity of yourself in whatever you
do.

I hope you all go and make an impact on the world !

(And also I wish your dreams come true.)

2

金沢大学学域学類発足記念式式辞

文明の大転換期

(平成20年6月16日)

本日ここに、森喜朗先生をはじめとする国会議員の先生方、文部科学省、石川県、金沢市及び県内自治体ならびに経済団体、さらには関係大学並びに諸機関から多くの方々のご臨席を賜り、金沢大学学域学類発足の記念式典が挙行できますこと、本学にとつて大変めでたく、心から慶びとするところです。今日に至るまで学内はもちろんのこと、学外の関係各位には大変なご協力を頂いてまいりました。心からの感謝と御礼を申し上げます。

大学は学問の府であると同時に、社会のための大学を、その存在理由としております。大学の歴史においては、学問の伝統を守りながらも、時代時代の社会が必要としたことにも応えてきました。持続と適応を軸として、改革がなされ発展してきたと言えます。二十一世紀の今、資源、エネルギー、食糧、人口、気候、環境など、これまで人類が経験したことのない、地球規模での諸問題に私達は直面しています。同時に、グローバル化の進む国際社会にあつては、民族の対立、国家間の政治経済の衝突等、様々な問題が生み出されています。国内社会でも、急速に進む少子高齢化、地方文化の衰退、世代間の断裂など、解決すべき問題が山積しています。我々を取り巻

く情勢が大きく変化し、文明の大転換期ともとらえられる今日、社会のための大学の役割は益々大きいといえます。複雑な問題の解決には、これまでの学問領域の枠組みを超えた、幅広い知識と、それを活用する問題解決能力を養うことが求められています。

この度の「学域学類制」はこれら社会の要請、更には時代を敏感に先取りする学生のニーズに応えようとするものであります。これまで培ってきたことを基礎としながら、従来の学部の壁を取り払うことにより、新しさを取り込んだ教育の体制を整えました。林勇二郎前学長のリーダーシップの下、平成十三年の夏に構想を始め、六年半にわたる検討の末、この四月に実現の運びとなりました。「学域学類制」は、金沢大学憲章に示すところの金沢大学の基本理念であります「教育重視の研究大学」の実現へ向けての第一歩であります。学域学類制という新たな教育システムの下で、世界が必要とする人材、課題が山積する社会を自ら改革し時代を切り拓く優れた人材を輩出できることと確信しております。結果は、本年四月に入学した第一期生が卒業します四年、または六年後から出ることとなります。この改革が、本学にとどまらず、今後の我が国の大学における学士課程教育を活性化するための新しいモデルを提示するなど、意味あるものとするためにも、この四年間、が最も大切な時期であり、皆様の引き続きのご協力を仰ぐ次第であります。尚、林前学長の記念講演では学域学類制を含め大学の将来像について講演頂く予定でございます。

ところで、この記念式典の会場は自然科学講義棟の一翼として本年三月に竣工しました三つの

大講義室の一つであり、四百席の収容が可能です。本日の式典では、これら大講義室のお披露目もさせて頂きたく存じます。どうぞ御覧頂ければ幸いです。金沢大学角間総合移転整備事業は昭和五十九年から始まり、本年度には総合研究棟Ⅶ「がん研究所」の着工が予定されており、今後、学際科学実験センター及び学生宿舎などの設置を推進し、総合移転事業の完了を指しております。また、宝町・鶴間キャンパスでは、本年末に病院外来棟の完成が予定されており、新臨床研究棟の着工が喫緊の課題であります。

最後になりますが、この四月から新執行部が発足いたしました。「学域学類制」を核にし「新生・金沢大学」をいかに発展させていくか、「国立大学の責務」をいかに維持していくかを二本の柱として、我が国ベスト10大学を目指し、金沢大学の発展に全力を尽くす所存です。後ほどの記念祝賀会で新執行部を紹介させて頂きますので、宜しくお願い致します。

本学に対する皆様のこれまでのご協力とご支援に感謝と御礼を申し上げます、また一層のお願いを申し上げます、式辞と致します。ありがとうございました。

3

創基百五十年記念事業

連携と発展

(アジア五大学学長フォーラム in 金沢 開会挨拶 平成23年11月12日)

金沢大学長の中村信一です。金沢大学を代表し、本日ここにご参集いただきました皆様方を、心より歓迎申し上げます。また、アジア諸国の指導的立場にある大学からのご参加をご快諾いただきましたことに、改めてお礼を申し上げます。中華人民共和国からは北京大学前学長 XU Zhijong (シュー・ツーホン) 先生、大韓民国からは釜山国立大学校副総長・総長職務代行 Kim Duck Jool (キム・ドクジュル) 先生、タイ王国からはチェンマイ大学学長 Pongsak Angkasith (ポンサック・アンカシット) 先生、ベトナム社会主義共和国からはベトナム国家大学ハノイ学長 Mai Trong Nhuan (マイ・チョン・ニュアン) 先生にご参加いただいております。その職責の重大さにご多忙の中にも関わらずご出席を賜りましたことに、改めて感謝申し上げますとともに、ここ金沢の地にみなさまをお招きできましたことに、私は大きな喜びと誇りを感じております。

去る三月十一日、日本の関東・東北地方は未曾有の大震災に見舞われました。この大災害により亡くなられた方々並びにご家族の方に、深い哀悼の意を捧げる次第です。また、津波は原子力発電所を襲い、レベル7の重大事故となりました。親族・知人をなくされた方々、地震により生活

基盤を失われた方々、原子力発電所事故により避難を余儀なくされている方々に一日も早く平穏な日が訪れますよう祈っております。また、大震災に際しまして、ここにお集まりいただきしている国々はもとより、多くの国から多大なご支援・ご援助をいただきました。この場をお借りし、日本の国立大学を預かる一学長として、僭越とは存じますが、お礼と感謝を申し上げます。

金沢大学は、今から去ること百四十九年前（約百五十年前）の一八六二年、日本の近代化の扉を開いた明治維新の六年前に、この金沢の地に種痘所が開設されたことから始まりました。本フォーラムは、本学が当時の最新の医学の成果を基に人命救助の志から始まったことを祝う創基百五十年記念事業の一つとして開催されるものです。本学がその礎を築いてから百五十年の間、アジアの国々は実に多くのことを経験しました。大学も、歴史の激動と無縁ではありません。良くも悪しくも、大学は歴史の重要な役割をそれぞれの国において果たしてきました。種痘所が開設された当時、誰が、百五十年後の今日、アジアの国々を代表する諸大学が歴史の荒波を乗り越えてここに集うことを想像できたでしょうか。そして誰が、今から百五十年先の大学の未来を確実に語る事ができるでしょうか。しかし、私たちは、学問の力によって未来のアジア世界と大学の姿を、協調と連帯の願いを込めて描かなければなりません。私は、本フォーラムを単なる記念事業の祝い事に終わらせるのではなく、参加大学、ひいてはアジアの大学すべての持続的な連携と発展の機縁となすことを、ここに宣言いたしたいと思えます。

「社会のための大学」
—アジア諸国と通底する文化を見据えて—

“University for the Sake of Society”

- With a Focus on the Underlying Common Culture among Asian Nations -

英文／邦文

※番号はスライド番号と一致

(アジア五大学学長フォーラム in 金沢 基調講演 平成23年11月12日)

2011年11月12日(土)
Nov.12(Sat.), 2011
アジア5大学学長フォーラム
Five Asian University Presidents' Forum

「社会のための大学」
—アジア諸国と通底する文化を見据えて—
“University for the Sake of Society”
- With a Focus on the Underlying Common
Culture among Asian Nations -

金沢大学学長 中村 信一
President of KU, Shin-ichi Nakamura

1

① Ladies and Gentlemen, now you have heard the keynote speeches from the top administrators of leading Asian universities. Their speeches reflect rich background of each speaker's respective culture, and observations and suggestions from international point of view.

Thank you, Dr. Xu of Peking University, Dr. Kim of Pusan National University, Dr. Nhuan of Vietnam National University Hanoi, and Dr. Angkasith of Chiang Mai University. As the host university, we are extremely honored to have heard your first-class speeches, and I would like to extend my greatest appreciation. Now you may be feeling a little exhausted, but please listen to me for a while.

Well, during the various events in celebration of our 150th anniversary, I have been constantly thinking of "What is the university?" and "For whom does the university exist?" Today, I would like to share my answers with you to these questions.

① アジアの先導的大学でリーダーシップを発揮され、大学を牽引されている先生方にそれぞれの文化を背景としつつ世界を視野に入れた洞察と示唆に富むご講演をいただきました。北京大学の(許智宏 XU Zhihong) シュー先生、釜山国立大学の(金徳苗 KIM Duck Jool) キム先生、ベトナム国家大学ハノイの(Mai Trong Nhuan) ニュアン先生、チェンマイ大学の(Pongsak Angkasith) アンカシット先生、本当にありがとうございました。先生方による第一級のお話をいただけることは、ホスト大学としても大変名誉なことであり、感謝申し上げます。そろそろ疲れが出てくる時間となりましたが、今しばらくお聞きください。

さて、創基百五十年を祝う事業を展開する中で、大学とは何か、誰のための大学かを考え続けてきました。本日は、私なりの答えをご披露させていただきます。ただこうと思います。

② In this world, we cannot live without interacting with others. Any achievement of human beings is based on inter-human relationships, and universities are no exceptions. That is to say, if someone asks “What is the Raison d'être of universities?”, the reply from almost all universities around the world would be, “We exist ‘for the sake of society.’”


③ But what justifies this reply? It is the “succession and creation of knowledge.” We can say that the “succession and creation of knowledge” is “for the sake of society,” and itself is the “intrinsic value” of universities.

④ The foundation of this “intrinsic value” is the succession of knowledge through education and the creation of knowledge through research. Although the “intrinsic value” exists a priori inside universities, vigorous education and deep research are required for its shining out brilliantly.

②人は人との関わりの中においてのみ生きていきます。人との関わりにより生かされています。人によるあらゆる営みは人との関係の上で成り立つものであり、大学もその例にもれるはずありません。すなわち、大学の存在理由 (Raison d'être) は何かと問われれば、世界中の大学は例外なく「社会のために存在する」と答えるでしょう。

③ではその本質は何か。それは「知の継承と知の創造」であります。「知の継承と知の創造」そのものが「社会のため」であり、「大学の内在的価値」と言うことが出来るかと思えます。

④「内在的価値」の根底をなすものは、教育による知の継承と研究による知の創造であります。「内在的価値」はア・プリオリに大学に備わるものであるとは言え、それが外に向かって輝きだすには



大学の存在理由 Raison d'être of Universities

- 「社会のための大学」
for the Sake of Society

2




存在理由の本質は？ What justifies Raison d'être of Universities?

- 知の継承と知の創造
Succession and Creation of Knowledge

||

大学の「内在的価値」
“Intrinsic Value” in Universities

3



「内在的価値」の輝き出し Shining out of “Intrinsic Value”

- 知の継承: 教育
Succession of knowledge : Education
- 知の創造: 研究
Creation of knowledge : Research

継承と創造の連鎖 Chain of succession and creation

- 継承が創造を育み Succession cultivates creation.
- 創造が継承を可能とする Creation makes succession possible.
- 創造なき継承は絶える Succession without Creation will die out.

4

⑤ Well, I myself entered university in 1962. Since then, almost half a century has passed, and during this period, social expectations toward Japanese universities have greatly changed. I offer you an example. Back then, it was considered “ridiculous” for Japanese universities to do joint research with commercial industries. But today oppositely, it is “ridiculous” if Japanese universities are not engaged in this kind of research.

⑥ In Japan, the Basic Act on Education (Article 7) defines universities as educational institutions that are “the core of scholarly activities.” And it also says “universities shall cultivate advanced knowledge and specialized skills, inquire deeply into the truth and create new knowledge, while contributing to the development of society by broadly disseminating the results of their activities.”

積極的な教育と深い研究が必要です。

⑤ところで、私は一九六二年に大学に入学しました。以来ほぼ半世紀、この間に、日本の大学に対する社会的要請は大きく変化してきました。一例を挙げます。当時の風潮は、大学と企業が共同研究をすることは「けしからん」というものでした。現在は、産学共同研究をしない方が「けしからん」という風に全く逆になりました。

⑥日本では教育基本法（第七条）により、大学は、「学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」教育研究組織と位置付けられています。

KONANZAMPA
150
1947-2022

大学に対する社会の要請は時代ごとに 変化している

Social expectations toward universities have
changed over time

- 私が大学に入学した1962年から現在に至る半世紀の間に、日本の大学に対する社会的要請は大きく変化してきた。

In half a century since I entered university in 1962,
social expectations toward Japanese universities have
greatly changed.

5

KONANZAMPA
150
1947-2022

日本の大学の使命 Mission of Japanese Universities

- 教育基本法（2006年改正）
Basic Act on Education (Amended in 2006)

第7条 大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

Section 7 University is the core of scholarly activities, which shall cultivate advanced knowledge and specialized skills, inquire deeply into the truth and create new knowledge, while contributing to the development of society by broadly disseminating the results of their activities.

6

⑦ In accordance with this spirit, today, it is “for the sake of society” that universities should conduct research which is directly connected to innovation and useful to society. Therefore universities are also expected to provide development of human resources for that purpose. These may be considered the “instrumental value” of universities.

⑧ In order to actualize this “instrumental value,” Kanazawa University is presently incorporating career education and ethics for business workers in our educational curriculum, mainly through internship programs.

⑨ Currently, there are 778 four-year universities in Japan, and 86 of them are national universities. They are actually national university corporations, to be precise, but I will call them national universities for convenience.

⑦この精神のもと、現在、より直接的に社会に役立つ研究、イノベーションにつながる研究を行うことが「社会のため」であり、そのための人材養成が求められています。これらは「大学の手段的価値」と言えるかと思えます。

⑧手段的価値の醸成にむけて、金沢大学では、インターンシップ教育プログラムを中心として、キャリア教育と職業人としての意識を持たせる教育を教育カリキュラムの中に組み込んでいます。

⑨さて、日本には国公立の合計で七百七十八校の四年制大学があり、そのうち、八十六大学が国立です。正確に言えば国立大学法人ですが、簡単に国立大学といえます。

KANAZAWA
150
UNIVERSITY
OF JAPAN

現在求められる「社会のため」は？ What is required now “for the Sake of Society”

- より直接的に社会役立つ研究
Research that is more directly useful to society
- イノベーションにつながる研究
Research that leads to Innovation
- 卒業後、直ぐに役立つ人材養成
Development of human resources who are useful just after graduation

||

大学の「手段的価値」
“Instrumental Value” in universities

7

KANAZAWA
150
UNIVERSITY
OF JAPAN

インターンシップ教育プログラム Internship Education Program

- 博士前期課程を対象とするインターンシップ教育プログラム(2005-2010)
Internship program in Master's course (2005-2010)

派遣型高度人材育成協同プラン
Internship program by Industry-university cooperation for development of human resources
- 博士後期課程を対象とするインターンシップ教育プログラム(2010-2014)
Internship program for students in doctoral course and post-doctoral fellows (2010-2014)

産学連携による博士人材のキャリア形成教育プログラム
Internship program by Industry-university cooperation for career development of human resources with doctoral degree

8

KANAZAWA
150
UNIVERSITY
OF JAPAN

日本の4年制大学数と大学生数(2010) Number of 4-Year Universities and University Students in Japan (2010)

- 人口 1億2700万人 Total population 127,000,000
- 総大学数 778校 Total number of universities 778
- 国立大学 86校(1校/150万人)
National universities 86 (1 school/1,500,000 people)
- 国立大学大学生数 62万5千人(1人/204人)
The number of the national university students 625,000 (1/204 people)
全大学生数(288万7千人)の23%
23% of total number of students (2,887,000)
- 国立大学大学院学生数 15万7千人
The number of the national university graduate students 157,000
全大学院学生数(27万1千人)の58%
58% of total number of graduate students (271,000)

9

⑩ In Japan, national universities have historically played specific roles. For 40 years, since the foundation of Kanazawa University in 1862, national universities were expected to be a distribution board of western educational system and scientific technology. Today, what is expected of national universities has greatly changed. National University Corporation Act (Article 1) in Japan says, among the responsibilities of national universities are equal opportunity in higher education, promotion of highly advanced research, systematic bringing up of school teachers and medical doctors, and the succession of basic academic disciplines which attract few students but must be maintained according to national standards. Through these operations, universities can fulfill their responsibilities “for the sake of society.”

⑩日本では歴史的に、国立大学には特定の役割が課せられていました。本学の礎石が置かれた一八六二年からほぼ四十年の間、国立大学は西洋の学術と科学技術を受け入れる配電盤としての機能が求められていました。そこでの教員は、西洋の知識や技術を学び、それを教授し、そこで教えを受けた学生は全国の高等教育機関の教員として、また、国家公務員として広く国民の教育や技術指導に当たってきました。しかし、今や、国立大学への期待は大きく変わりました。国立大学の役割は、「大学の教育研究に対する国民の要請にこたえとともに、我が国の高等教育及び学術研究の水準の向上と均衡ある発展を図る」（国立大学法人法第一条）ことであります。曰く、高等教育の機会均等、高度先進研究の推進、計画的な教員や医師の養成、学生数は少ないものの国として維持しなければならぬ基礎学問領域の継承など。国立大学は、これらの営為を通して、社会のための大学としての責務を果たすことができるといえます。

KANAZAWA
150
1831-2021

国立大学の責務 Responsibilities of National Universities

- 公共性 Publicness

高等教育の機会均等
Equal opportunity in higher education

学問分野の総合性の維持
Maintenance of synthesis of academic fields

高度先進研究の推進
Promotion of highly advanced research
- 計画性 Planning

教員養成、医師養成
Bringing up of school teachers and medical doctors
- 標準性 Standardization

高等教育の質の保証
Guaranteed quality of higher education

学士課程教育の「入り口」「出口」
"Admission" and "Graduation" of bachelor's education


10

KANAZAWA
150
1831-2021

Louis Pasteur (1822-1895)

リール理科大学学部長就任時に、文部大臣から学長に送られた手紙に

In a letter written to the President of Lille University by the Minister of Education at the time of Pasteur's appointment as the Dean of Lille University of Science and Technology ...



「パスツール氏は科学に対する愛情によって我を忘れるようなことがあってはなりません。彼は、大学での教育が、科学理論の発展を保ちながらも、影響が広範囲に及ぶ有益な結果を生むよう、リール地方の実験的要求に応える独自の応用研究に邁進しなければならない、ということを忘れてはならないのです。」

"Pasteur must guard against being carried away by his love for science, and he must not forget that the teaching of the faculties, whilst keeping up with scientific theory, should, in order to produce useful and far-reaching results, appropriate to itself the special applications suitable to the real wants of the surrounding country."

Introduction to Biocatalysis Using Enzymes and Micro-organisms, Cambridge University Press, 1995

11

KANAZAWA
150
1831-2021

東アジア圏 East Asian Region

- 中国・日本・韓国・タイ・ベトナム・ASEAN諸国
China・Japan・Korea・Thailand・Vietnam・ASEAN Nations
- 近い距離 Close distance
飛行機で3-6時間、時差が2時間
3 to 6 hours' flight time, 2 hours' time difference
- 共通する文化背景 Common cultural aspects
モンスーン、稲作、照葉樹林帯(水と森の文化)、仏教
Monsoons, rice culture, laurel forests (culture of water and forests), Buddhism, ...
- 異なる文化 Different cultures
生活習慣、思考の仕方
Lifestyle, way of thinking, ...

12

⑪ Now then, universities cannot exist independently and apart from their community. This was already discussed 150 years ago. In 1855, seven years before the foundation of Kanazawa University, Louis Pasteur, who is well known as the Father of Microbiology and the developer of pasteurization and vaccination, was appointed, at a young age, the Dean and professor of Lille University of Science and Technology in France. Regarding this appointment, the Minister of Education wrote to the President of Lille University. In this letter he said, "Pasteur must guard against being carried away by his love for science, and he must not forget that the teaching of the faculties, whilst keeping up with scientific theory, should, in order to produce useful and far-reaching results, appropriate to itself the special applications suitable to the real wants of the surrounding country."

Daily activities of universities have evolved remarkably in the last 150 years. However, their fundamental Raison d'être

⑪ところで、大学は大学が位置する地域から離れて一人存在することはできません。これらのことは百五十年前にすでに語られていました。金沢大学の基が置かれた年の七年前、一八五五年、近代細菌学の祖として、また、牛乳などの低温殺菌法やワクチンの開発者として今に名を残すルイ・パスツールは、若くして、フランスのリール理科大学教授兼学部長に任命されました。任命に際し、時の文部大臣がリール大学長に書いた手紙には次のようにあります。「パスツール氏は科学に対する愛情によつて我を忘れるようなことがあつてはなりません。彼は、大学での教育が、科学理論の発展を保ちながらも、影響が広範囲に及ぶ有益な結果を生むよう、リール地方の実際的要求に応える独自の応用研究に邁進しなければならぬ、ということをお忘れはならないのです」。

大学の日々の営為は百五十年前から格段に進化

as the existence “for the sake of society” has succeeded to this day without any change, because universities have made efforts to maintain a balance in their “intrinsic” and “instrumental” values in accordance with swinging social expectations. This should not be changed in the future, too. In this sense, although we may exist in different environments and cultures, I feel that we share the same responsibilities as universities.

⑫ All the nations of the members participating here in today's forum are within two hours of time difference and our capital cities are within 3 to 6 hours' flight of each other. Moreover, as you know, we have many common cultural aspects such as monsoons, rice culture, laurel forests area, and Buddhism. Yet, the lifestyle and way of thinking of the people in these nations are obviously different from each other.

しています。しかし、その根底にある「社会のた
めに」という大学の存在理由は、時代時代の要請
に基づき「内在的価値」と「手段的価値」とのパ
ランスをとりつつ、変わることなく今日に受け継
がれてきました。それは将来にわたり変わること
があつてはなりません。我々は異なる風土と異な
る文化の中で存立しておりますが、大学の責務は
共通していると感じるところです。

⑫本日のフォーラムにご参加いただいた国々は、お
互いの時差は二時間以内、お国の首都間を飛行機で
移動すれば、三〜六時間という近い距離にあります。
また、モンスーン、稲作文化、照葉樹林帯、仏教と、
すべてとは言えませんが、共通の文化背景を持つて
おります。しかし、そこに住む人々の生活習慣や思
考の仕方など、それぞれの文化は明らかに異なつて
います。

⑬ Culture influences individuals at various levels, e.g. nation, region and community. It is the community level culture that permeates into one's individual self and grows up within his life as well. This culture, if one decides not to resist, provides a peaceful and harmless life. But universities stimulate students who live in such culture and make them prepare for an ever-globalizing world. In particular, we must bring up individuals with the flexibility to deal with a diversity of different cultures and the ability to communicate in English, a common language in a practical sense, and also use some other languages as tools. In a word, we must bring up so-called new humans.

⑭ One mission of today's universities is to cultivate a new and powerful generation, who never forget their original culture, and take pride in their nation's culture while simultaneously being highly international-minded. To put this into practice, intercultural exchange is essential.

⑬個人を取り巻く文化とは、国家、地方、共同体といろいろなレベルがあります。人の肌に沁み、その中で育つていく文化は共同体レベルでしよう。そこにある文化とは、その文化に身を任せてしまえば、平安に一生を送ることができてしまいます。大学は、この様な生活空間にいる学生に刺激を与え、グローバル化がすすむ世界へ踏み出す準備をさせます。具体的には、多様な異文化に対応する柔軟性をもち、英語という共通言語を中心としながらも複数言語をツールとする、いうなれば新人類を育てなければなりません。

⑭生まれ育った文化を忘れることなく、自らの国の文化を誇りとし、併せて、国際感覚を備えた新鋭を育てることが、これからの大学の使命の一つであります。そのためには、異文化交流


KANAZAWA
150
1949

大学の今日的使命 (1)

Responsibilities of Today's Universities (1)

英語を共通言語としながらも、複数言語をツールとする
「グローバルな世界に生きる」新人類の育成

Training of a new generation that "lives in the Global World",
communicates in English as a common language, and also
uses some other languages as tools



13

KANAZAWA
150
1949

大学の今日的使命 (2)

Responsibilities of Today's Universities (2)

- ▶ 国際感覚の涵養
Cultivation of international sense
- ▶ 自らの国の文化への誇り
Pride in one's own nation's culture
- ▶ 多様な異文化に対する柔軟性の涵養
Cultivation of flexibility toward various foreign cultures



14

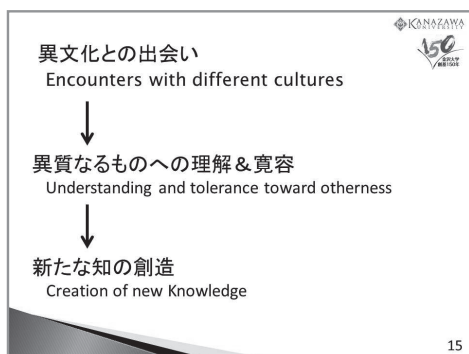
⑮ Encounters with different cultures are sometimes shocking, but they also provide us with understanding and tolerance of otherness and lead to the further creation of knowledge, as well as supply much energy to make something new. From the 19th century to the mid-20th century, the United States had such an environment even though it was merely one nation, and a new civilization of technology flourished like fresh bamboos shooting up after rain. During this time, the US led the world in transportation and information through the production of automobiles, airplanes, telephone and telegraph, and computers.

⑯ Presently, in the world of rapid transportation and instant communication, a similar intercultural environment can be made through joint efforts of universities from more than one nation.

が欠かせません。

⑮ 異文化との出会いは、ショックを与え、異質なるものへの理解と寛容、そして創造への力を育み、新たな知の創造へとつながります。十九世紀から二十世紀中葉のアメリカ合衆国は、一国にしてこのような環境が備わっており、雨後の竹の子のごとくに、新たな技術文明が開花しました。自動車、飛行機、電信電話、コンピューターなど移動と情報で世界をリードしました。

⑯ 現在、このような異文化環境は、移動の迅速化と情報の世界同時性のもとでは、複数の国にある大学が共働することにより作り出すことができます。



KONAZAMA 150 GREAT ASIAN

5大学学長フォーラムの目指すもの(1)
Aims of Five Asian University Presidents' Forum (1)

背景 Background

- ・ グローバル化する世界
Globalizing world
- ・ 情報の世界同時性
Global simultaneity of Information
- ・ 異文化交流、異文化理解、異文化共存
Intercultural Interaction, understanding of and coexistence with foreign cultures

16

⑰ The members of our five universities in attendance today are from different cultural backgrounds, but, if I am not mistaken, we share cultures that all of us can mutually understand and experience firsthand. Therefore I have no doubt that we can build up a scheme of higher education playing a large part in the world through closer inter-university cooperation.

⑱ Lastly, I would like to make my personal comments on the long-term future of universities. In my opinion, we, human beings are not fulfilled by just love, play or other daily activities, even when we are freed of hard labor and have enough food, clothing, and housing. Then, what can really fulfill us? It is intelligent activities and the creation of knowledge.

⑰本日ここに集う五大学は、互いに異なる文化社会を背景にしておりますが、誤解を恐れずに言えば、我々は、肌で感じて相互に理解できる範囲にある文化を共有しているとも言えます。このようなかで、今後、大学間連携を密とすることにより、世界の一極をともしに担う高等教育体系を作ることには可能であると信じております。

⑱最後に、大学の遠い将来に思いをはせ、私個人の思いを述べさせていただきます。人は過酷な労働の必要もなく衣食住が満たされても、決して愛や遊びのような日々の営みだけで満足することは無いものと日頃考えております。では、満足を見出すことができる対象とは何か。それは、知的活動・知の創造になるものと考えます。

◆ KANAZAWA
150
1858

5 大学学長フォーラムの目指すもの (2) Aims of Five Asian University Presidents' Forum (2)

目指すもの Aims

肌で感じて相互に理解できる範囲内にある文化を共有する中で、大学間連携を密にすることにより、世界の一極をとみに担う高等教育体系を作る

To build up a scheme of higher education playing a large part in the world through closer inter-university cooperation, by sharing cultures that all members can mutually understand and experience firsthand.

17

◆ KANAZAWA
150
1858

大学の将来にはせる思い (1) My Thoughts on the Future of Universities (1)

人は、過酷な労働の必要もなく衣食住が満たされても、決して愛や遊びのような形而下の営みで満足することはなく、知的活動・知の創造にこそ満足を見いだすことになるであろう。

We are never fulfilled by just love, play or other mundane activities, but certainly find fulfillment in succession and creation of knowledge, even when we are freed of hard labor and have enough food, clothing, and housing.

18

⑱ In such a world, I hope that universities are the places where many people get together and are fulfilled by the “succession and creation of knowledge.” In that world, to be such places is truly “for the sake of society.”

⑳ It is my sincere wish that today's forum provides a good opportunity to confirm a leading mark that shows universities unchanged responsibility to exist “for the society” despite the changes of time

㉑ Again, welcome and thank you.

⑱ そのような世界においては、大学は、多くの人が集い、「知の継承・知の創造」に満足を見出す場となるものと期待半ばに思っております。そこでは、そのような場であること自体がすでに「社会のため」の大学であると言えます。

⑳ 時代とともに変化しつつも、「社会のため」という変わらぬ責務を果たす滞標みおつくしとして、本日のフォーラムが良ききっかけとなることを願っております。

㉑ みなさま、本日のフォーラムへのご参加、まことに有り難うございます。重ねて御礼申し上げます。

KANAZAWA
150
UNIVERSITY
OF JAPAN

大学の将来にはせる思い (2)

My Thoughts on the Future of Universities (2)

そのような世界においては、大学は多くの人が集い活動を行い、「知の継承、知の創造」に満足を見いだす場となるであろう。そこでは、そのような場であること自体がすでに「社会のため」の大学であることにほかならない。

In such a world, I hope that universities are the places where many people get together and are fulfilled by the "succession and creation of knowledge." In that world, to be such places is truly "for the sake of society."

19

KANAZAWA
150
UNIVERSITY
OF JAPAN

時代とともに変化しつつも、「社会のため」という変わらぬ責務を果たす滞標として、本日のフォーラムが良ききっかけとなることを願っております。

It is my sincere wish that today's forum provides a good opportunity to confirm a leading mark that shows universities' unchanged responsibility to exist "for the society" despite the changes of time.

20

KANAZAWA
150
UNIVERSITY
OF JAPAN

ご清聴ありがとうございました

Thank you for your attention



21

〈先魁〉 〈共存〉 〈創造〉

(式典式辞 平成24年5月30日)

本日ここに、衆議院議員 文部科学大臣 平野博文先生、衆議院議員 元内閣総理大臣 森喜朗先生をはじめとする国会議員の先生方、文部科学省、石川県、金沢市及び県内自治体ならびに経済団体、さらには関係大学並びに諸機関から多くの方々のご臨席を賜り、金沢大学創基百五十年記念式典が挙行できますこと、本学にとって大変めでたく、心から慶びとするところであります。今日に至るまで文部科学省をはじめ、関係各位には大変なご支援・ご協力を頂いて参りました。心からの感謝と御礼を申し上げます。

平成十一(一九九九)年、金沢大学が創立五十周年を迎えた折、金沢大学五十年史編纂委員会を設置し、金沢大学の始まりについて検討を加え、文久二(一八六二)年に設立された加賀藩彦三種痘所を本学の淵源と定めました。本年二〇一二年は、種痘所設立から数えて百五十年目の節目の年であり、本年を創基百五十年と位置付けた次第であります。

加賀藩彦三種痘所を淵源とする本学は、その後、明治七(一八七四)年、明治二十(一八八七)年、

大正九（一九二〇）年にそれぞれ設置された石川県師範学校、第四高等中学校、金沢高等工業学校を礎として今日の三学域・十六学類、五研究科の総合大学へと発展してきました。その間、わが大学の濫觴の一滴であった種痘所の人々の熱い思いと高い倫理性は、教育・研究の多くの領域からの水脈を集めて金沢大学を北陸に冠たる大河となし、その総合性、多様性、革新性の精神的支柱であり続けました。今日に至る歴史は、後ほど古畑徹 金沢大学資料館長が詳しくご説明申し上げます。

金沢大学は、「創基百五十年」事業を通して、本学のアイデンティティ、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を具体的な姿において確立することをめざしています。事業を推進するにあたり、三つの大きな柱として、 \wedge 先魁 \vee \wedge 共存 \vee \wedge 創造 \vee を定めました。 \langle 先魁 \rangle としての優れた人材養成、弱者・少数者を含めたすべての命が豊かに \langle 共存 \rangle できる世界の構築、そして未来における先端的な研究・医療の \langle 創造 \rangle であります。

金沢大学の基が置かれた七年前、一八五五年、フランスの著名な細菌学者パスツール（一八二二～一八九五）がリール理科大学教授兼学部長に任命された時、時の文部大臣がリール大学長に書いた手紙には次のようにあります。

「パスツール氏は科学に対する愛情によって我を忘れるようなことがあつてはなりません。大学

での教育が、科学理論の発展を保ちながらも、影響が広範囲に及ぶ有益な結果を生むよう、リアル地方の実際要求に応える独自の応用研究に邁進しなければならない、ということに彼は忘れてはならないのです」。

大学は、「社会のため」に存在し、活動の中核は「知の継承・知の創造」にあり、それは大学の「内在的価値」と言うことが出来るでしょう。「知の継承・知の創造」の具体的活動が「教育・研究」であり、したがって大学は「教育・研究」という行為を通して、「社会のために存在する」こととなります。「社会のため」は時代により異なりますが、百五十年前においても、「より直接的な社会貢献」、いわば、「手段的価値」が求められていたのは明らかであり、今日に至るまで「内在的価値としての教育・研究」と「手段的価値としての教育・研究」におけるバランスが時代ごとの要請に基づき揺れ動きつつ発展してきたということが出来ます。

百五十年前から今日まで大学がたどった歴史を見ますと、今後もこれまでと類似した事象を繰り返しつつ大学は発展し、百五十年後においても「内在的価値」と「手段的価値」の均衡を図りつつ存在するものと思われれます。

遠い将来の金沢大学について、私個人の思いを述べさせて頂きます。過酷な労働の必要もなく

衣食住が満たされる時代にあっても、人は、決して愛や遊びのような形而下の営みで満足することとはなく、知的活動・知の創造にこそ満足を見いだすことになることでしょう。こうした世界においては、大学は、多くの人が集い活動し、「知の継承・知の創造」に満足を見いだす場となるでしょう。そこでは、知の拠り所（トポス）であること自体が、すでに「社会のため」の大学となることであり、私は、そのような時代においても金沢大学が光り輝くことを確信しています。

創基百五十年の記念すべき今年、医学類の総合研究棟二期工事が着工の運びとなりました。この完成をもちまして、二十八年に渡る金沢大学総合移転・宝町鶴間地区再開発事業の当初計画は完了致します。これも一重に、関係各位のご支援の賜物と感謝しております。

将来に渡る、皆様のご支援・ご協力を再度お願い申し上げます、式辞と致します。

留学生支援キャンペーン寄附募集宣言

(祝賀会挨拶 平成24年5月30日)

本日ここに、各界各地域からかくも多くの方々のご臨席を賜り、ありがとうございます。皆様とともに、金沢大学創基百五十年を記念する祝賀会を挙行できますこと、本学にとり誠にめでたく、心から慶びとするとところであります。

金沢大学は、本年(二〇一二年、平成二十四年)、その源流となる一八六二(文久二)年の加賀藩彦三種痘所設立から数えて百五十年を迎えました。この節目の年、創基百五十年にあたり、本学はこれまでの百五十年の活動をどう継承し、今後の百五十年をどう展開すべきかを、内外に明確に示すべく、創基百五十年記念事業を企画いたしました。

種痘所設立に関わった蘭方医黒川良安とその門下生達の心にあつたのは、人命を救わんとする強い願いと未だ不確かな治療法に対する恐れなき挑戦であつたに相違ありません。私達は「創基百五十年」をもって、金沢大学が創建以来掲げ続けてきた、人類に貢献せんとする「高い志」に再び思いを馳せ、その大きな流れの中に本学の未来を拓こうとするものです。本学のアイデンティ

テイ、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」が、三つのキーコンセプト、〈先魁、共存、創造〉の下に展開される記念事業を通して、私達自身を含めたすべての人々の胸中に深くはつきりと刻み込まれることを望んでいます。

本学は一八六二年に礎を築いて以来、今日に至る百五十年の間、時代の要請に応え、「社会のための大学」として改革・発展して参りました。近年の大きな改革は学士課程教育組織の「学域学類制」への改編であり、創基百五十年の本年、第一期生が社会に巣立ちました。私達は、将来に渡って「社会のための大学」としての進化を目指し、改革・発展することを皆様にお誓い申し上げます。

本学に対する、皆様方のこれまでのご協力とご支援に感謝と御礼を申し上げますと共に、なお一層のご支援をお願い申し上げます。

最後に、創基百五十年記念事業として、本学の基本理念「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」、「東アジアの知の拠点」を推進すべく、本日を期して、留学生支援のためのキャンペーン寄附募集を開始することを宣言させて頂き、挨拶とさせていただきます。

本日は本学の歴史をご覧いただきながら、ご歓談など、ごゆるりとお過ごしただけであればと願っ

ております。ありがとうございました。

明日の金沢大学

(創基百五十年史 平成24年5月30日発行)

今から百五十年前の一八五五年、フランスの著名な細菌学者パスツール（一八二二年～一八九五年）がリール理科大学教授兼学部長になったとき、時の文部大臣がリール大学長に書いた手紙にはこのように書かれていた。

パスツール氏は科学に対する愛情によつて我を忘れるようなことがあつてはなりません。彼は、大学での教育が、科学理論の発展を保ちながらも、影響が広範囲に及ぶ有益な結果を生むよう、リール地方の実際的要求に応える独自の応用研究に邁進しなければならぬ、ということをお忘れではならないのです⁽¹⁾。

大学は、「社会のため」に存在し、その活動の中核は「知の継承・知の創造」にある。「知の継承・

知の創造」の具体的活動が「教育・研究」であり、したがって大学は「教育・研究」という行為を通して、「社会のために存在する」ことになる。「社会のため」は時代により異なるものであるが、百五十年前においても、「より直接的な社会貢献」が求められていたのは明らかであり、今日に至るまで「内在的価値としての教育・研究」と「手段的価値としての教育・研究」とのバランスが時代ごとの要請に基づき揺れ動きつつ発展してきたということができ

る。

二十一世紀、現在の日本において、「社会のため」は、卒業後直ぐに社会に役立つ人材の養成、より直接的に社会に役立つ研究・イノベーションにつながる研究へと大きく振れている。百五十年前から今日までの状況を考えると、今後もこれまでと類似した事象を繰り返しつつ大学は発展し、百五十年後においても大学は「内在的価値」と「手段的価値」の均衡を図りつつ存在するものと思われる。

百五十年後の金沢大学について以下の展望を持ちたい。過酷な労働の必要もなく衣食住が満たされる時代にあっても、人は、決して愛や遊びのような形而下の営みで満足することはなく、知的活動・知の創造にこそ満足を見いだすことになるであろう。明日の金沢大学は、多くの人が集い活動し、「知の継承・知の創造」に満足を見いだす場となるであろう。そこでは、そのような

場であること自体が、すでに「社会のため」の大学であることにほかならない。

(一) Introduction to Biocatalysis Using Enzymes and Micro-organisms, S. M. Roberts et al., Cambridge University Press, 1995.

学問の 実りあれかし 楷新樹

(記念植樹挨拶 平成25年11月2日)

本日は、お忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます。

皆様とともに、金沢大学創基百五十年記念事業の掉尾を飾る楷の木の新樹を挙げていただきますこと、
本学にとり大変めでたく、心から慶びとするところであります

本日植樹いたします楷の木は、ウルシ科の落葉高木です。中国山東省曲阜の孔林に、孔子十哲の一人である子貢が植えて以来、植え継がれ、「学問の木」「大器晩成の木」として尊ばれております。日本に初めて移入されたのは、大正四(一九一五)年であり、初代林業試験場長の白澤保美氏が孔林で採取した種から育苗し、その苗を大正十四年、閑谷学校・足利学校・湯島聖堂など、儒学の精神を学ぶ地に寄贈されました。また、楷樹の成木は、直角に枝別かれし、小葉が綺麗に

揃っていることから、その樹枝の形状に似る書体を「楷書」と呼ぶようになったといわれています。

本学は、その源流である一八六二年の加賀藩彦三種痘所開設から数えて百五十年目にあたる昨年、二〇一二年を金沢大学創基百五十年と位置付け種々の記念事業を行ってきました。その意図するところは、歴史的観点を踏まえて、本学のアイデンティティを再確認し、百五十年先を見通した姿を模索することになりました。その思いを実現すべく三つのキーコンセプトへ先魁 共存 創造 のもと、記念事業には多くの方々に関わっていただきました。二〇〇九年の「シンボルマークの公募」に始まり、「金沢大学発祥の地」石碑の建立、「八十件以上にわたる」記念講演会・シンポジウム、「アジア五大学学長フォーラム」、「記念式典・祝賀会の開催」、「創基百五十年史の発行」、「創基百五十年記念留学生支援キャンペーン寄附募集」など、実にさまざまな記念事業を行って参りました。本日の記念植樹式はその掉尾を飾るものであります。

記念事業に携わられた皆様には、心より感謝を申し上げます。

記念事業を通し、知の継承と知の創造としての大学は、同時に社会のための大学である」ということが示されたように思います。

楷の木は、金沢大学の発展とともに、枝葉を縦横に繁らせて、光り輝くキャンパスを見守る大樹に育つことでしょう。夏には、大きな樹陰の下で、秋には、美しく紅葉するこの木のまわりで、多くの人々が集い談論風発。『知の継承・知の創造』の拠点たる金沢大学のシンボルになることを願っています。

— 学問の実りあれかし楷新樹 —

最後に今一度、創基百五十年記念事業に関わったすべての皆様に感謝を申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。

4

年頭所感

己丑の歳

(平成21年1月5日)

新年おめでとうございます。今年は干支で申しますと己丑の歳であります。語源から思うに、己丑の歳は「新しい時代、新しい仕組みを準備する年」「地道な基礎固めの年」ということができますでしょうか。

昨年の四月一日、学長就任にあたり、私は次のようなことを述べました。二十一世紀初頭の今、大量生産・大量消費をパラダイムとする二十世紀型工業文明は転換期を迎えつつあり、我々の世界観のもととなる認識、思考そして価値観が大きく転換しつつあるとの現状認識を示しました。一昨年夏のアメリカでのサブプライムローン問題に端を発した百年に一度と言われる未曾有の金融危機は、二十世紀型価値観の転換に拍車をかけました。震源地のアメリカでは、借金を重ねてモノを買い続けるというアメリカでは良しとされたライフスタイルが見直されつつあるとも報道されています。未曾有の金融危機に我々高等教育機関も安閑としてはいられません。内定取り消しの拡大など就職戦線は冷え込み、家計の厳しさにより進学を断念せざるを得ない高校生の増加が懸念されます。まさに、先が読めない不確定の時代にあり、学生をしつかりと育て社会に送り

出すという、大学の真の教育力が問われています。

そのような状況の中、金沢大学の目指す姿として、五つの柱からなるビジョン、「我が国ベスト10大学を目指すこと」、「世界的な教育研究の拠点となること」、「次世代の優秀な人材を育成すること」、「リージョナルセンターとして機能すること」、そして「法人としての自主・自律的な運営を行うこと」を掲げ、学域学類制を軸に新生金沢大学を発展させ、また、国立大学法人に課せられた社会的責務を果たさねばなりません。

昨年は学域学類制がスタートし、また研究や国際化に関する各種推進体制の整備、銀行との包括的連携協定締結、アジア地域におけるリエゾン・オフィスの設置等、ビジョンへむけての胎動が始まりました。本年実行すべき重要課題について一、二述べさせて頂きます。最初に、第一期中期目標・中期計画において未だ達成されていない事項については達成に向け鋭意努力されることをお願い致します。次に、第二期中期目標・中期計画の作成があります。皆さんの叡智を結集し、夢と希望に満ちた中期目標・計画を作成しようではありませんか。「目標に向けて、自分達の大学は自分達で造る」との気概を持つことを期待してやみません。

平成二十一年度には大阪大学、浜松医科大学との連合大学院、小児発達学研究所が設置されま

す。また、新聞等で「健康増進科学センター（仮称）」創設と報道された「地域連携による健康増進科学の展開」や「新領域開拓のための実践的LSI設計技術教育」等の事業が二十一年度予算で措置され、新たに始まります。施設面では角間キャンパスで、構内道路一号線が三月に完成し南北軸が貫通します。建物新営では、がん研究所の建設が始まりますし、宝町・鶴間キャンパスにおいては五月に新外来棟が開院し、臨床研究棟の整備が開始されます。

六十年前の己丑は昭和二十四（一九四九）年でした。新制国立大学設立の年でもありました。本年は次の六十年は大げさかも知れませんが、確実に次の十年、いや二十年の命運を左右する年となります。地球との関わりにおける人間と、人間性、人間愛に強く思いを致し、全ての教職員が互いに尊敬しあう意識を持って、教育、学問、科学に、共に歩みを進めようではありませんか。

かくて明けゆく空のけしき…

(平成22年1月4日)

新年おめでとうございます。私は正月になりますと、吉田兼好の有名な正月を描いた文、「かくて明けゆく空のけしき、きのうにかわりたりとは見えねど、ひきかへめずらしきこちぞする」が思い浮かび、確かに新年という感じがして、そこから新しい決意が湧き出てくるのです。皆さんは、いかがでしょうか。今年はず支で申しますと庚寅の歳であります。解字(角川漢和中辞典)から思うに、「認識・思考・価値観が大転換し、パラダイムシフトが今まさに始まる年」ということができるでしょうか。

まず、嬉しいニュースをお伝えします。事業仕分けで廃止になりました産学官連携戦略展開事業は、知的クラスター創成事業及び都市エリア産学官連携促進事業と合わせて、平成二十二年度から「イノベーション・システム整備事業」として一本化し、補助金化した上で、これまでの継続事業については、事業が修了するまで支援を継続していくことが昨年末に閣議で決定されました。本学としては数億円規模の産学官連携事業を平成二十二年度も続けることができることになります。

さて、二十世紀型工業文明は転換期を迎え、我々の世界観のもととなる認識、思考そして価値観が大きく転換しつつあります。昨年、「事業仕分け」により大学関係の基盤的経費、競争的経費等の削減や見直しが提案され、関連して国大協等様々な機関・団体が声明文の提出や要望活動を行いました。今、求められていることは教職員一人一人が、大学と社会の関わり、学問と社会の関わり、科学技術と社会の関わりを自分の問題として認識し行動することでありましょう。

本年四月から第二期中期目標・計画期間が始まります。この期間においては「各法人の一層の個性化」が求められております。目標・計画の達成には、未来に可能性があることを信じ、未来の可能性を探る知力を総動員することが肝要でありましょう。大学の基盤は人にあります。全ての教職員の参加はもちろんのことですが、その能力を最大限に発揮できるよう環境を整備することもまた、大切なことであり、これに向かって努力していく所存です。

我が大学は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」、「東アジアの地の拠点」を基軸として国際化を進めております。昨年には、留学生増対策として特別枠を設け、本年四月には百五十名増の五百名の留学生を目指しています。また、恒常的な留学生増として昨年末に、ベトナム文部科学省並びにベトナムの上位二十大学と大学間協定を締結し、大学教員養成を目的として年間二十〜三十名の優秀な留学生を引き受けることになりました。皆さんにはご負担をかけることに

なりますが、ご協力を宜しくお願い致します。

学域学類制は三年目に入ります。「教育重視」の大学として、教育における教職員と学生との相互協力の重要性に思いを致し、また、学生のあるべき姿をも教育することにより、次世代の社会を担う有為な人材の育成に力を尽くして頂きたいと存じます。

地域に根ざす大学として、石川県、金沢市、輪島市、珠洲市、穴水町、能登町等との協定に基づいた地域との連携を進めると共に、北陸四国立大学、石川県立大学、金沢美術工芸大学等の高等教育・学術機関との連携を強化し、ネットワーク化を進めていきたいと思っております。また、附属病院は「日本の医療の要は大学である」との基本認識のもと、金沢大学方式ともいえる地域医療の在り方を金沢から発信し、リサーチ・マインド豊かな良医の育成に励んで頂きたいと存じます。

施設について少しお話させて頂きます。「がん研究所」がこの二月に竣工し、五月十七日に開所式が行われます。また、外部事業者により三月末日には附属病院敷地内に金沢先進医学センターが竣工する予定であります。

平成二十二年度政府予算につきましては本日中にも伝達があるものと思われれます。

最後にお願いがございます。第一期中期目標・計画期間終了に伴い、平成二十一年度決算スケジュールが一カ月程度早まることは御承知のことと思いますが、経費執行の早期化に努め、決算業務の遅延を招くことがないよう宜しくお願い致します。

私は、学長就任にあたり、金沢大学の目指す姿として、「我が国ベスト10大学を目指すこと」を掲げました。「目標に向けて、自分達の大学は自分達で造る」との気概をもって、全ての教職員が互いに尊敬し、教育、学問、科学に、共に歩みを進めようではありませんか。

新しき 年の始めの 初春の…

(平成23年1月4日)

新年おめでとうございます。「新しき^{あたら}年の始めの 初春の 今日降る雪の いや重け^し吉事^{よごと}」。
これは大伴家持が因幡国の国守として赴任して初めて迎えた元旦に詠ったものです。当時、新年

に降る雪は幸いの兆しとされていたといえます。今年も年末から雪が降り、元旦は雪こそばらつく程度でしたが一面の銀世界でした。万葉の昔のように、良い予兆あれかしと願う新年です。

さて、昨年は、大学関係の基盤的経費、競争的経費等の削減や見直しが提案され、関連して国大協等様々な機関・団体が声明文の提出や要望活動を行いました。その中でも、昨年秋のパブリック・コメントへの大学教職員および学生による発信は、高等教育の危機を国に強く訴えるものでありました。その訴えを反映する形で、二十三年度の運営費交付金は前年度比0.5%減にとどまり、科学研究費は六百三十三億円の増となりました。しかしながら、一般運営費交付金については、附属病院の有無等により各大学に1.0%、1.3%、あるいは1.6%の大学改革促進係数が課せられており、本学については1.3%、金額では一億四千五百万円が減額となります。それをカバーするのは科研費の間接経費であります。先程申しましたように、科研費は六百三十三億円の増であります。本学の従来の科研費獲得状況から考えますと、科研費増に伴う間接経費の増加分は、丁度大学改革係数による一般運営費交付の減額分に相当します。今後、益々科研費の獲得が重要となります。この点を踏まえて、一層の緊張感を持ちながら運営に携わる所存であります。

今、求められていることは教職員一人一人が、大学と日本における高等教育との関わり、大学

と国家の未来との関わり、大学と世界との関わり等を大学の問題としてだけでなく、個人の問題として深く考え、「自分達の大学は自分達で造る」との気概を持って、諸課題に取り組んでいくことです。このような教職員一人一人の姿勢が、金沢大学をより高みに上げる原動力となることと信じています。今年はいーディング大学院構想やキャンパスアジア構想と、大学の国際化を後押しする政策が提案されています。これらの競争に、教職員一丸となってチャレンジする覚悟を、この日を期に新たにしています。

本年四月からは、第二期中期目標・中期計画期間の二年目になります。振り返りますと、昨年は金沢大学アクションプラン二〇一〇を公表し、アクションプランと中期目標・計画に沿った種々の事業を展開できました。これも、全ての教職員の参加と努力の結果と、感謝しております。数例をあげれば、七月にはがん研究所が共同利用・共同研究拠点としての認定を受けました。研究の活性化については、三研究域に大学戦略分の教員定員を用いて設置する、研究域内研究センター構想がほぼ完成し、各研究域に二センターを立ち上げるようになりました。これらを活用し、二〇二〇年には我が国ベスト10となり、アジアの基幹大学に成長することを願っています。

本年四月から始まる新年度（平成二十三年度）は、三年前に出発した学域学類制の第一期生を送り出す年度であります。受験者数の変化に一喜一憂し、学類の教育に加えて学部学生の教育が並

行し、試行錯誤の三年間でしたが、今年は学生の就職というファクターを通して、学域学類制の社会的評価を初めて受けます。学生と関わる職員の支援が欠かせません。本学が標榜する「教育重視」の大学として、教育における教職員と学生との相互協力の重要性に思いを致し、また、学生のあるべき姿をも教育することにより、次世代の社会を担う有為な人材の育成に力を尽くして頂きたく存じます。

昨年の年頭の挨拶で、留学生五百名を目指しましたが、うれしいことに、昨年末で留学生数は五百十一名となりました。これも、教員と職員がともに目標に向かって努力された賜物と感謝しています。昨年十二月に開きました留学生懇談会は、例年になく多様な留学生にあふれ、国際豊かな懇談会でした。ここで感じた事は、時代の文化・文明を強く反映する大学という場では、異なる文化を背負っている人材のるつぼであることが、いかに組織の活性化を促すかということ。文明の交差点で新たな文明が生まれるとは、言い古されたことですが、再度実感したところです。今年十一月は、アジア学長フォーラムとサテライトとして、アジア学生フォーラムを開催する予定です。韓国、中国、ベトナム、タイからの学長と留学生の会議ですが、これに加えてアジア大学職員フォーラムもどうだろうか、と思い描いているところです。

リージョナルセンターとしての大学として、地域の自治体との絆を、これまで以上に密にして

歩んでいくことを願っています。今年は、長年期待しておりました金沢美術工芸大学との連携協定を結び、互いに補い合う関係を築いていく第一歩となります。また、附属病院は「日本の医療の要は大学である」との基本認識のもと、金沢大学方式ともいえる地域医療の在り方を金沢から発信し、リサーチ・マインド豊かな良医の育成に励んで頂きたく存じます。また、人々が健やかな時は健康で過ごせるよう、病める時は安心して任せられるような医療の提供を通して、地域に基本的医療の確約と先進的医療開発が加速されること、医療に直接・間接を問わず、関わりある全ての教職員に期待しています。

今年三月で、早いもので学長の任について三年が過ぎます。四月からは、学長任期六年の後半に入ります。これまでは、明日を目指して考えることが多く、明日を見据えた施策を打ってきました。大学は不安定な台座に乗った船のように、頼りなく感じることもありますが、そこは教職員諸氏の日々の奮闘により、大いに助けられています。まだまだ、先を見据えた施策を打って出なければ、この激動の時代に金沢大学は埋没してしまうという危機意識を持って、次の三年間の営み続ける覚悟でおります。後半三年の初年度にあたり、初心を忘れることなく、五つの柱からなるビジョン、「我が国ベスト10大学を目指すこと」、「世界的な教育研究の拠点となること」、「次世代の優秀な人材を育成すること」、「リージョナルセンターとして機能すること」、「そして「法人としての自主・自律的な運営を行うこと」を胸に刻み励みたく存じます。全ての教職員が、互

いに、尊敬と労りの心を持って、大学の明日に向けて邁進しようではありませんか。

木の葉なき むなしき枝に…

(平成24年1月4日)

新年おめでとうございます。

「木の葉なき むなしき枝に 年暮れて 又めぐむべき 春ぞ近づく」

これは藤原定家の曾孫、京極為兼が詠ったものです。「一見枯れたかのような冬の木だが、そのような枝にも再び春は巡ってくる」という意味ですが、そこに込められた寓意は、「冬枯れの寒々とした風景のように、今は落ち込んでいようと、年が変わると希望に満ちた春がきつと来る」ということでありましょう。

昨年は、三月十一日に起きた東日本大震災からの復興に向けての一年でした。津波の被害が岩手県で最大だった陸前高田市、この暮れに私も訪れたのですが、ここでは復興計画が具体化されていきました。津波にも倒れなかった樹齢二百五十年を超える老松、「奇跡の一本松」は津波の後

枯れはしたものの、その枝は四本の接ぎ木として、老木の命は引き継がれています。一日も早く、「又めぐむべき春」が近づくことを願っております。

さて、国立大学法人を取り巻く財務環境はこれまでになく厳しいものです。しかし、このような今こそ、変わるチャンスととらえています。大学はなによりもそこに働く人により支えられています。その一方を担う職員の皆さんには、是非、金沢大学の変革に自律的に参画して頂きたく存じます。そこで何よりも大切なことは、自分のポジショニングができるか否かにあります。自分は何をなすべきか、こういうことに対して働ける、また働きたい。このようなポジショニングができる能力は、日々磨くものですが、一人ひとりの職員が自らを磨くならば、大学は大いに変わっていくことが期待できます。

いまひとつ、不安定な時代、改革の時代にあつては、自らの意識を前例から解放することが必要です。十五世紀の「応仁の乱」の西軍総大将、山名宗全の言葉に、「およそ例という文字をば、尚後は時という文字にかへて御心あるべし」とあります。「過去の例にとらわれずに、その時に応じた対応をすべし」ということであります。時に応じて前例にとらわれずに敢然と立ち向かって頂きたく存じます。

本年の大きな事業について少し申し上げます。三月には、学域学類制の最初の学生を送り出します。羅針盤のない混沌とした社会状況の中で、自立した有為な人材の育成を目指して、学域学類制は発足しました。第一期生が今後社会でどのように活躍し、学域学類制がどのような評価を受けるかは、今から楽しみです。この数年は金沢大学の将来における教育評価がなされる上で、非常に大切な年月となります。

五月には創基百五十年の祝典を開きます。昨年十一月には、「金沢大学発祥の地」の石碑を彦三種痘所跡に据えました。これで、金沢大学濫觴の証しを後世に向けて記し続けることができました。また、アジア五大学学長フォーラムを能楽堂で開き、その挨拶の最後で、私は次のように申しました。「種痘所が開設された当時、誰が、百五十年後の今日、アジアの国々を代表する諸大学が歴史の荒波を乗り越えてここに集うことを想像できたでしょうか。そして誰が、今から百五十年先の大学の未来を確実に語るができるでしょうか。しかし、私たちは、学問の力によって未来のアジア世界と大学の姿を、協調と連帯の願いを込めて描かなければなりません」。皆さんとともにこの思いを共有し、五月にはささやかながら厳粛な祝典が挙行できることを期待しております。

宝町地区では、長年の願いであり、金沢大学総合移転・再開発の集大成となる第二期総合研究

棟の新築が予定されております。また、学生・留学生宿舍を角間キャンパスにつくります。学生宿舍のような造営事業ができることは、大学が自主自律に向けて一歩踏み出した象徴的な出来事であります。

金沢大学は教育重視の研究大学であることを目指しています。これに沿って、昨年は三研究域にそれぞれ二センターを設置しました。これらのセンターを後押しするかのようには、昨年暮れには、研究を側面支援するシステムとして、University Research Administrator 育成事業に本学の申請が採択されました。以上のように、大学の歴史を画す事業に着手でき、これらは次なる百五十年に向けての濫觴となることを願っています。

学長任期六年を、事業の区切りとして二年ずつに分けると、今年は、最後の二年が始まる年です。これまでの四年間で行ってきた施策、展開した事業等を集大成し次の世代へと渡すべきものを準備する期間と認識しています。大学の存在理由は何よりも「社会のために」あるということです。これまで以上に研究拠点形成を目指し、グローバル化の波を乗り切ることが明日につながるものと信じています。その基礎を固めるべく、最後の二年間、全力をふるう覚悟でおります。これまでの四年間で、種々の事業が軌道に乗り始めましたのも、職員の皆さんのたゆまない努力と積極的な大学運営への参加の賜物と感謝しております。加えて、明日に向かって共に歩み、法人として自主・自

律の運営に参画して下さるよう切に期待し、またお願いしまして、年頭のご挨拶とします。

何となく、今年が良いことあるごとし…

(平成25年1月4日)

新年おめでとうございます。

「何となく、今年が良いことあるごとし。元日の朝、晴れて風無し」

これは石川啄木が詠ったもので、『悲しき玩具』に所収されている歌です。啄木らしくストレートに心に届く詠みぶりで、風もなく晴れ渡り、穏やかな元日を迎え、今年こそ良いことがありそうだと、明日へ向かった気持ちを歌ったものです。金沢の元旦の空は雲がかかっていたものの、うっすらとした雪化粧の中、穏やかに明けました。早朝の鮮烈な冷気を胸いっぱい吸い、今年が良い風が吹くように感じました。皆さまにも大学にも佳い年であるよう、と願ったところです。

昨年は、本学にとり百五十年という節目の記念すべき年でした。五月三十日には創基百五十年を祝う式典が滞りなく挙行できました。金沢大学創基百五十年史が刊行され、秋には記念ワイン

「燦燈」が発売されました。五月三十日、私は、国際化に対応した学生支援を目的として、金沢大学基金「創基百五十年記念留学生支援キャンペーン寄附募集」の開始を宣言しました。また、国際化の一環として、学生留学生宿舍「先魁」を建てました。これらの事業は、次の百五十年に向けて踏み出した一歩の象徴であります。このように多くの事業が滞りなく進みましたが、皆さんがそれぞれの場所で最善を尽くされた賜物と感謝しております。本年は、創基百五十年記念事業の締めくくりとして、キャンパス内に「学問の木」、「大器晩成の木」とも称される「楷の木」を植樹する予定です。

さて、暮れの十二月十六日には衆議院選挙が行われ、来年度の予算は組み替えの最中にあり、国立大学の運営費交付金に関することも、未だ明確ではありませんが、運営費交付金の更なる縮減が予想され、二十五年度も法人運営のかじ取りは相当に慎重にしなければなりません。

このように本年も不確定要素を多分に含む年ではありますが、金沢大学の今後を方向づける重要な年でもあります。まず、今年は大学の機能に基づく選別が進むと予想されます。本学は研究大学として自他ともに認める大学への成長を大学運営の基本としており、なんとしても研究大学としての機能を果たせる環境を整えなければなりません。第二に、附属病院は是非とも臨床研究中核病院としての指定を受けなければなりません。北陸の医療の最後の砦としての機能をよりよ

く果たすべく、また我が国の医療の質をさらに発展させる上で欠かせない指定です。第三に昨年暮れから、教育研究分野におけるミッシヨンの再定義が進んでおります。今年三月までに教員養成分野、工学分野、医学分野のミッシヨンが再定義されます。この他の分野のミッシヨンは二十五年度中ごろまでに再定義されるでしょう。

再定義されたミッシヨンは、三年後の第三期中期目標・中期計画立案の中核となります。第三期の最終年度は今から九年後です。大学はミッシヨンに沿う目標を立て、九年後に向け今から確かな運営をしなければなりません。大学はなによりもそこに働く人により支えられています。皆さんには、是非、金沢大学の改革に自律的に参画して下さい。十年後を見据えて参画して下さい。自らの職責に誇りを持ち、自らの責務を自覚し、自律的に考え、判断し、行動できる能力が今ほど求められている時はありません。皆さん一人ひとりの真摯な努力を切に願っております。

本年の大きな事業について少しだけ申し上げます。四月には、博士課程リーディングプログラム「文化資源マネージャー養成プログラム」の第一期の学生を受け入れ、プログラムは本格的に始動します。この事業は大学院博士課程で傑出した人材、グローバルに通用する人材を養成するプログラムですが、その影響は教育体制だけにとどまらず、本学の研究大学としての将来に及びます。本プログラムを嚆矢とし、後に続く第二、第三のプログラムが採択されるように努力します。

先端科学・イノベーション推進機構は、昨年四月に設置され、設置初年度から、大型の各種競争的資金獲得に大きな力を発揮してきました。今年度は、研究大学強化促進費、世界展開力強化事業など、本学が世界に開かれた研究大学として戦っていくために欠くわけにはいかない事業が公募される予定です。先端科学・イノベーション推進機構を核として、これらの事業の採択を目指すと同時に、国際化に向けて学生交流を促進する努力を続けなければなりません。

施設整備では、三月に附属図書館医学系分館が、十一月には医学系総合研究棟が完成します。これをもって、今から二十九年前、一九八四年に始まる金沢大学総合移転・再開発の当初計画は完了します。しかしながら、これで完了と、現状に安住する訳にはいきません。次の百五十年に向かって、大学のインフラ整備に一層の努力が必要です。

私は学長就任以来、五つの柱からなるビジョン、「我が国ベスト10大学を目指すこと」、「世界的な教育研究の拠点となること」、「次世代の優秀な人材を育成すること」、「リージョナルセンターとして機能すること」、そして「法人としての自主・自律的な運営を行うこと」を掲げ、「強いところを更に強くする」戦略の下、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」「東アジアの知の拠点」を目指し、努力を積み重ねて参りました。一昨年に続き昨年も、その成果が少しずつでは

ありますが、目に見える形で出てきました。

本学の現在の勢いをさらに加速すべく、百五十年の歴史と伝統を胸に刻み、我が国の高等教育と学術研究の発展に大きく寄与してきた金沢大学の一員であることを誇りとし、あまた横たわる諸課題に、本年も果敢に挑戦して下さるものと、大いに期待しております。

学長任期も最後の一年となります。これまで傾注してきた施策、展開した事業等を次の世代へと渡す準備をする年と認識しています。大学の存在理由は何よりも「社会のために」あるということです。明日に向かって共に歩み、法人としての自主・自律の運営に参画して下さるよう切に期待し、またお願い申し上げます、年頭の挨拶といたします。

新しき 年のはじめに かくしこそ…

(平成26年1月6日)

新年おめでとうございます。

「新しき 年のはじめに かくしこそ 千歳をかねて 楽しきをつめ」

これは古今和歌集にある詠み人知らずの歌です。「千年の繁栄を思い描き、楽しいことを重ねて行こう」と呼びかけています。そこには何の寓意もなく、実にストレートですがすがしく、まことに初春を言寿ぐ気持ちがあふれ出ています。

東日本大震災において津波の被害が岩手県で最大だった陸前高田市をこの暮れに訪れました。そこでは沈下した地盤のかさ上げの大規模な工事が進行しており、たたくむ私には、これは従来
の復旧・復興ではなく、そこに新しい文明の胎動を感じました。今年こそ、私たち一人一人に、「楽しきをつめ」とあるような年になりますようにと願っております。

昨年から、政府は、デフレからの早期脱却と経済再生を最優先課題とし、そのためのシナリオである「日本再生戦略」を策定し、三本の矢を強力に推し進めています。そこでは、人材力の強化や科学技術イノベーションの推進役として、国立大学改革・機能強化を位置付けています。これは、国立大学に対する国民や社会の強い期待の表れであり、我々金沢大学に身を置く全ての職員は、期待に応えるべく、大学改革を推進する決意を新たにしなければなりません。

政府は、平成二十五年からの三年間を国立大学の改革加速期間と位置づけ、選択と集中による大学の研究力、国際化、教育力の飛躍的な強化を重点施策として、推進し始めました。昨年は、国立大学改革強化推進事業により「スーパー予防医科学」が採択されるとともに、革新的イノベ

シヨン創出プログラム拠点に選択され、また、センター・オブ・コミュニティ事業が採択されました。これらの事業は、現在力強く進められているところです。

暮れの十二月二十四日には、平成二十六年度予算案が閣議決定されました。大学関連の予算を見ますと、国立大学の機能強化に重点を置く内容となっております。新たな経費として、学長のリーダーシップの下、国立大学改革プランの実行などに重点的に活用する特別枠や年俸制の本格導入に必要な経費が措置されており、政策課題に対応した大学改革の加速が求められています。また、国際化の強化に向け「スーパーグローバル大学事業」が新たに設けられました。三十九大学を選定し、「グローバル化と研究力強化を重点的に支援する」としています。上海交通大学やタイムズなどの世界ランキングにおいてしかるべく評価されている本学は、必ず選定されるよう力を尽くさねばなりません。

国立大学改革の一環として、昨年夏には教員養成、工学、医学の三分野のミッションの再定義が終わり、今、残りの分野での再定義が進行しています。このような状況を踏まえ、本学においても研究力・教育力の一層の強化に向け、主体的に取り組むため、私は昨年十月に金沢大学改革検討委員会を招集し、全学合意のもとに、近未来を見据えた改革方針を取りまとめました。大学の教育・研究の実質に踏み込む、これまでになく強い改革であり、三月には最終報告をまとめ、時代を担う方々に改革のバトンを引き継ぎたいと願っています。

本年の事業について少しだけ申し上げます。三月には、六年制の薬学類と医学類では、最初の卒業生を送り出します。これで、六年前に移行した学域学類制は一旦の完成をみます。自学自習と経過選択性により、自立した有為な人材の育成を目指し発足した学域学類制は、教育研究組織のユニークかつ先進的な改革モデル事例として多くの大学から注目されています。その評価は学域・学類卒業生の社会での活躍にかかっており、この数年は金沢大学の将来における教育評価がなされる上で、極めて大切な年月となります。そのためにも、更なる改革をためらっている余裕はありません。

一昨年五月、私は金沢大学基金「創基百五十年記念留学生支援キャンペーン寄附募集」を宣言しました。これまでいただいた寄附金を財源とし、金沢大学創基百五十年記念留学生支援奨学金、プログラム「S A K I G A K E」の新設にいたしました。毎年、日本人学生百八十名を諸外国に送り出し、また最終的には毎年百八十名の外国からの留学生に奨学支援を予定しております。これを梃子に、半数以上の学生が海外経験をし、教員一人に留学生一人という体制に一日でも早く至ればと願っております。キャンパスに居ながらにして異文化に日々触れることができる、名実ともに国際化した金沢大学が待たれます。

宝町地区では、長年の願いであり、金沢大学総合移転・再開発の集大成となる総合研究棟の新築と改修が完了します。附属病院の前に残る建物は取り壊され、広々とした空間に附属病院と医

学類が整然と並ぶ日も間近となりました。一九八四年に総合移転の起工式が行われて以来二十九年。私の任期の最後の年に、金沢大学総合移転は名実ともに完了することとなり、感慨深いものがあります。

金沢大学創基百五十年記念事業では、二〇〇九年のシンボルマークの公募に始まり、「金沢大学誕生の地」及び「金沢大学発祥の地」の石碑の建立、アジア五大学学長フォーラム、記念式典・祝賀会、創基百五十年記念留学生支援キャンペーン寄附募集、創基百五十年史の刊行など、実に様々な記念行事が進められました。

四年前、金沢大学創基百五十年をささやかに、しかし心に残るように祝いましょう、と皆さんに語ったことが昨日のことのように思い出されます。事業の締めくくりとして、昨年十一月二日、ホームカミングデイを機に、楷の木の植樹を行いました。全ての行事が成功裏に成し遂げられたのも、皆様の努力、尽力のおかげと、心から感謝しております。いつの日か、楷の木の盛んなる紅葉の下に学生、職員、市民の皆さんが集う姿を夢見ております。

学問の 実りあれかし 楷新樹

これまでの五年九カ月で、種々の事業に着手し、軌道に乗り始めましたのも、皆さんのたゆま

ない努力と積極的な大学運営への参加の賜物と感謝しております。国立大学は、その機能により峻別されるという、かつてない激動の時代を迎えています。このような時代だからこそ、今一度心新たに、六年前の学長就任時に掲げた五つの柱からなるビジョン、十五年先の金沢大学の姿、「わが国ベスト10大学を目指すこと」、「世界的な教育研究の拠点となること」、「次世代の優秀な人材を育成すること」、「リージョナルセンターとして機能すること」、そして「法人としての自主・自律的な運営を行うこと」を胸に刻み励みたく存じます。全ての職員が、「金沢大学があなたのために何をしてくれるかではなく、あなたが金沢大学のために何ができるか」の心を持って、大学の明日に向かって邁進しようではありませんか。

「東アジアの知の拠点」として地歩を固め、「社会のための大学」として地域の中心である金沢大学が、楫の木と共に、千歳をかねて成長することを期待し、また皆様の力強い参画をお願い申し上げます。年頭のご挨拶とします。

5
入学生の皆さんへ
(学生便覧)

人生は短く…

(平成20年4月)

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

皆さんの「母校」となる金沢大学は、幕末（一八六二年）に設立された加賀藩種痘所を源流とし、百五十年近くの歴史と伝統を誇る総合大学です。金沢大学は二〇〇四年に国立大学法人となり、この四月、伝統的な学部・学科による教育体系を廃止し、国立大学では初めての試みである三学域・十六学類への歩みを始めました。

人間社会学域、理工学域に入学された皆さんには、「経過選択制」「主専攻・副専攻制」を十二分に生かした自律的な学びを、医薬保健学域に入学された皆さんには、選択した進路での専門性に加え、チーム医療を重視した医療専門職の連携についての学びを深めていただきたいと願っています。

また、地球規模での課題を解決するための学問・学術・科学を身につけようとする者として、専門知識だけに頼ることなく、深い教養を養い、洞察力や直観力を磨き、地球との関わりにおける人間性・人間愛を育んでいくことが大切です。

これからの四年または六年間で、「自らが社会的存在であることへの思慮」を通底とし、「主体

的な生き方の創造、世界観の形成」を求めると共に、「人々が織り成す和」ということにも思いをめぐらせて欲しい、と私は願っています。そのために、広く深く学び、思索し成長してください。

古代ギリシャの人で「医学の父」とされるヒポクラテスは次の警句を残しています。

Vita brevis, ars longa, occasio praeceps, experientia fallax, iudicium difficile

（人生は短く、術〈学術・医療・技術〉の道は長い。機会は逸し易く、試みは失敗することが多く、判断は難しい。石渡隆司訳）

これは、二千数百年の時を超え、今なお、学びの庭に踏み入れた皆さんに真理を伝える言葉です。皆さんは、まさに工業文明の大転換期という激動の時代の中にいます。それ故に未来への新たな課題を解決していく主役であり、新たな発想に基づく新生・金沢大学のフロンティアの担い手であります。「学域学類制」の理念が掲げる学際的創造的な教育研究の場は、地域に、我が国に、そして世界にとり、大きな価値を生む場となるはずです。皆さん一人ひとりが、その主役たらんとして切磋琢磨することを切に願っています。

伝統と文化の香り高い学の都・金沢で、一人ひとりがレゾンデートルを見出し、個性を磨き、「地域と社会に開かれた教育重視の研究大学」を理念として掲げる金沢大学で、三学域・十六学類の第一期生として、新たな伝統を共に築くことを祈念いたします。

幸運の女神は…

(平成25年4月)

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

皆さんの「母校」となる金沢大学は一八六二(文久二年)に設立された加賀藩種痘所を源流とし、昨年二〇一二年に創基百五十年を迎えた歴史と伝統を誇る総合大学です。基本理念、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」のもと、「東アジアの知の拠点」を目指しています(金沢大学憲章)。

金沢大学は、二〇〇八年四月、伝統的な教育体制である学部学科制を見直し、学域学類制への歩みを始め、来春には六年制学類の第一期生も巣立ち、全ての学類卒業生が社会に出ることになります。人間社会学域、理工学域に入学された皆さんには、「経過選択制」「副専攻制」を十二分に生かした自律的な学びを、医薬保健学域に入学された皆さんには、チーム医療を重視した医療専門職の連携についての学びを深めるよう努めてください。

今、人類は資源・エネルギー、食糧、人口、気候変動、地球温暖化などの地球規模の問題に直面しています。また、我が国においては一九九一年頃から現在に至るまで、二十年以上に渡って経済が低迷しており、失われた二十年とも言われている状態にあります。これらの事象を鳥瞰す

るならば、大量生産・大量消費を特徴とするこれまでの二十世紀型工業文明は、少なくとも今日の日本においては、世界に先駆けて終焉を迎えつつあるといえます。新しい価値観の創出には、認識・思考・世界観の大転換、パラダイムシフトが求められ、深い教養こそが、大転換期における自己の「立ち位置」を指し示します。教養は、また、学問の飛躍に於ける直感の源泉でもあります。地球上に生命が誕生してからの三十億年、ホモサピエンス誕生から二千万年、我々が生まれてからの年月といった時間軸、そして、個人、家族、社会、国家、世界といった空間軸。このような時間軸と空間軸からなる世界において己の「立ち位置」を認識することができる力、それが教養です。広く多様な学び、人との出会い・別れ、喜びや悲しみ、様々な言語や異文化との出会いなど、多くの思考との交わりが、皆さんの教養を涵養します。

「幸運の女神は、準備された人の心にのみ訪れる」。これは、フランスの偉大な細菌学者パスツールの言葉です。このことを肝に銘じ、新たな学びの世界を歩み、新たな知の創造に参加されんことを期待します。

本年、創基百五十年記念事業の締めくくりとしてキャンパスに「学問の木」、「大器晚成の木」と称される「楷の木」を植樹します。百五十年の歴史・伝統を有する金沢大学、歴史都市・創造都市金沢で学ぶことを誇りとして、教養豊かな「準備された人」、「強い金沢大学生」として育っていかれることを願っております。

6

医学部創立百五十周年記念式典祝辞

伝統と創造の二重らせん

(平成24年7月7日)

本日ここに、各界各地域からかくも多くの方々のご臨席を賜り、金沢大学医学部創立百五十周年記念式典が挙行されますこと、本学にとり誠にめでたく、心から慶びとするところであります。今日に至るまで文部科学省、厚生労働省をはじめ、関係各位には大変なご支援・ご協力を頂いて参りました。心からの感謝と御礼を申し上げます。

私は、五十年前、金沢大学医学部が創立百周年を迎えた昭和三十七年に本学医学部に入学いたしました。いま私達が会しております、この十全講堂は、同窓生や教職員等の浄財により、創立百周年を記念して建設され、百周年の翌年、奇しくも本日と同じ七月七日今頃の時刻(十一時四十分)に竣工式が行われました。医学部初の鉄骨コンクリート製建造物として忽然と宝町キャンパスに出現した十全講堂は、医学生の中には、モダンの象徴であるだけでなく、金沢大学医学部の伝統を具現する、圧倒的な存在感をもって映り、当時うけたインパクトはいまも脳裏に刻まれています。

十全講堂の「十全」は、皆様ご存知のように、紀元前の中国で著された「周礼」にある医師を

評定する語、「十全為上」に由来し、十全は「十ながら全す」と読み下されます。十全の二文字は、明治二十八（一八九五）年、第四高等学校医学部の教職員、学生が渾然一体となって結成した会の名に冠せられました。その後、昭和に入り、学術研究を推進し成果を発表する十全医学会、母校の応援団としての十全同窓会等が組織され、今日に至っております。

医学部創立百周年からの五十年を顧みますと、昭和三十八年の記録的豪雪、昭和四十年代のインターン闘争や学園紛争、昭和六十年前後のキャンパス移転の是非を巡る論争、平成に入ってから着手された宝町キャンパス再開発および校舎・病院の新築、平成十六年度の国立大学法人化等、節目となった出来事が思い出されます。また、教育・研究では、平成十三年度における大学院部局化に伴う、目的重点型専攻、脳・がん・循環・環境医科学専攻への改組、平成二十年度の学域・研究域への組織再編、最近では、金沢大学ならではの学問業績を基盤とした「子どものこころの発達研究センター」、さらには「脳・肝インターフェースメディシン研究センター」の設置など、さまざまな出来事を経験しつつ種々の事業が行われて来りました。栄光もあれば苦難もありましたが、天野貞祐と冲中重雄の言葉を借用して申しますと、医学部の歩んだ歴史は、伝統とその継承という一方の鎖を途切らせることなく、他方、創造と改革に不断に取り組んで新しい鎖をつくってきた、伝統と創造の二重らせんの形成の歴史であった、と言えるかと思えます。このように、連綿と紡がれてきた、伝統と創造の二重らせんが、健全な伸長を遂げつつ、今後も十全の名にふさわしい業績を積んでいかれることを、心より念願いたします。

金沢大学医学部は、百五十年前に開設された加賀藩彦三種痘所を淵源としております。これは、金沢での近代医学教育が、種痘の接種技術、痘苗の分苗・保存についての教育や種痘医の資格認定から始まったことを物語っています。全世界津々浦々への種痘の普及によって、人類最大の災厄とされた天然痘は、地球上から根絶されました。一九七七年十月二十六日、アフリカのソマリアに発生した患者を最後に、天然痘は終熄しました。WHOはその後も二年間にわたり、念入りの監視を行って根絶を確かめ、ついに、一九八〇年五月五日、「天然痘根絶宣言」を發したのであります。

全ての病を遍く癒やすことは、医学の究極の目標であり、医学者が理想とするところでありま

す。医学部・医学類におかれましては、種痘所設立に関わった蘭方医黒川良安とその門下生達の心にあつたに相違ない、「人命を救わんとする強い願いと未だ不確かな治療法に対する恐れなき挑戦」、このことを胸に刻み、つぎの百五十年の間にも、これまで以上に新しい発見・発明を生み、一つでも多くの病気の根絶に寄与されることを大いに期待するところであります

創立百五十周年の記念すべき今年、医学類の総合研究棟二期工事が着工の運びとなりました。この完成をもちまして、二十八年に渡る宝町鶴間地区再開発・金沢大学総合移転事業の当初計画

は完了致します。これもひとえに、関係各位のご支援の賜物と感謝しております。

若い世代さらには後世への万感の期待を申し述べるとともに、将来に渡る、皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げ、祝辞と致します。

7

附属病院完成記念式典挨拶

北陸圏医療ゾーンの中核

(平成21年4月25日)

本日ここに、文部科学省 高等教育局長 徳永 保様、衆議院議員・元内閣総理大臣 森 喜朗先生、衆議院議員 馳 浩先生、参議院議員 岡田 直樹先生、石川県知事 谷本 正憲様、金沢市長 山出 保様、金沢大学病院医療支援機構理事長 飛田 秀一様、並びに関係諸機関から多くの方々のご臨席を賜り、新金沢大学附属病院完成記念式典が挙行できますこと、本学にとって誠にめでたく、大いなる慶びとするところであります。新外来診療棟の竣工をもちまして、長年の懸案でありました附属病院の完成を見ましたのも、皆様の本学に対するご理解、ご支援の賜物と、心からの御礼を申し上げます。

また、済美会様からは、四階の「宝ホール」をご寄附いただき、金沢市におかれましては、外来診療棟の竣工に合わせて、病院前に「石引の広見」を整備されました。ここに改めて関係各位に深甚なる感謝を申し上げます。

金沢大学医薬保健学域医学類の源流は、文久二年、一八六二年、金沢市内の彦三に創設された加賀藩の種痘所にあります。その後、社会の要請とともに発展し、大正十二（一九二三）年に金

沢医科大学、昭和二十四年に新生の金沢大学医学部、そして、昨年四月、教育組織の再編により、医学類となりました。病院部門もその所在地を変えつつ、明治三十八年に石川県立病院として、この小立野台地に根を下ろし、その後、医学部の歴史と共に、名称を変更し、昨年四月に従来の金沢大学医学部附属病院から金沢大学附属病院となりました。この間、県民・市民に親しまれ、地域の皆様と共に、医療の府として、百五十年近くの歴史を刻んできました。

金沢大学は、平成十六年の法人化に際し、金沢大学憲章を定め、その前文で、「社会のための大学」とは何かを問い、社会貢献においては「高度先端医療の発展と普及に努める」と謳っております。これを具現化するため、昨年四月の学長就任にあたり、「宝町・鶴間キャンパスを北陸圏医療ゾーンの中核としてとらえ、北陸の行政と医療機関との連携を密にし、先端医療の開発、医療人の養成、安全安心な医療の提供などの、リーダー的役割をさらに果たす」との決意を表明いたしました。本日、新外来診療棟の竣工をもって、新たな金沢大学附属病院が完成しましたことは、大学として目指すところの基盤が出来上がり、社会のための大学に、また一歩近づいたものと、確信いたします。

医療の現場は、量と質という課題を抱えています。量的課題としては、地域の方々に優れた医療を如何にあまねく提供できるかがあり、これは、大学病院が医師養成の中核として機能するこ

とにより成し遂げられます。

質的課題としては、言うまでもなく、高度先端医療の研究開発に努めることにあります。現在、附属病院においては国の指定する先進医療として、「脊椎腫瘍に対する腫瘍脊椎骨全摘手術」、「内視鏡下手術ロボット支援」など十五件が認可され、我が国の医療レベルの向上に大いに貢献しています。このように金沢大学附属病院は、次世代を担う医療人の育成と臨床医学の発展に大いに貢献し、北陸圏医療ゾーンの中核として寄与してきました。また、今後も一層の努力をしていかなければなりません。これらを大学と附属病院に課された使命として心に刻み、新たな金沢大学附属病院の運営に当たる所存であります。

先程申し上げましたように金沢大学は、昨年度から教育組織を学域学類制と新たにし、伝統を生かしつつも、未知の領域に果敢にチャレンジする新生金沢大学となりました。医学類が属する医薬保健学域は、従来の医学科、保健学科、薬学科、創薬科学科を統合し、チーム医療の視点に基づいた優れた人格と先端知識を兼ね備えた医療人を育成せんとするものです。医療人の育成における大学病院の役割は重く、本日、ここにお披露目いたします附属病院の完成は、学域・研究域という教育研究組織の再編と相まって、金沢大学が今後目指すべき、我が国ベスト10の大学に、また一歩近づいた感を強くしております。

さらに、本年度、本記念式典会場に接し新臨床研究棟の着工が予定されており、また、本年度末（平成二十二年一月末）には角間地区において「がん研究所」の竣工が予定されております。これもひとえに文部科学省をはじめとする皆様の本学へのご理解、ご支援の賜物と、改めて心からの御礼を申し上げます。と同時に、国民皆様の医学・医療に対する熱い期待をひしひしと感じております。

最後に、本学に対する関係各位の御努力・御尽力に対し、改めまして深く敬意を表し、感謝と御礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

8

がん進展制御研究所 共同利用・共同研究拠点認定記念式典挨拶

「東アジアにおける知の拠点」形成の中核

(平成23年4月21日)

本日ここに、文部科学省研究振興局学術機関課長 澤川和宏様をはじめ、多くの方々のご出席を賜り、金沢大学がん進展制御研究所 共同利用・共同研究拠点認定記念式典が挙行できますこと誠にめでたく、大いなる慶びとするところでです。拠点認定に至るまで研究所教職員、がん研究所将来構想検討委員会委員をはじめ、学内外の関係各位には大変なご努力・ご協力を頂いてまいりました。心からの感謝と御礼を申し上げます。

金沢大学は、文久二(一八六二)年に金沢市内の彦三に創設された加賀藩種痘所を源流とし、来年、創基百五十年を迎えます。源流から数えて九十九年目の一九六一年、癌研究施設が医学部附属施設として設立され、六年後の一九六七年に、文部科学省設置の唯一の「がん研究所」へと発展しました。がん研究所の創設期における特筆すべき大きな成果として、初代研究所長岡本肇先生が開発され、昭和四十三(一九六八)年二月に薬剤として完成した、OK-432を挙げることができると存じます。その後も、がん研究所は、転移過程に密接に関連している酵素、MTI-MNPの発見等、我が国のみならず世界のがん研究の進歩に寄与する多くの研究成果を生み出してきて

います。昨年四月には、この角間キャンパスに、文部科学省をはじめとする関係各位のご尽力により、新研究棟が建設され、一層活発な研究がなされているところです。

さて、「がん研究」の現状を俯瞰しますと、本研究所が創立されてから四十余年のがん研究の進歩によって、胃がん・大腸がんを始めとした多くのがんにおいて、予後の顕著な改善が認められています。しかし、その一方で、いまだに多くのがん患者さんが、「転移」「薬剤耐性」という、いわゆる「がんの悪性進展」が起きる結果、命を落とされているという厳しい現実があります。即ち、「がんの悪性進展」の阻止が「がん」撲滅の重要な課題となっているわけです。そのような中、最近十年間のがん研究の進展にともない、すべてのがん細胞のルートとも言える「がん幹細胞」及びがん組織の「がん微小環境」が、このような「がんの悪性進展」過程に密接に関与していることが明らかとなりつつあります。

以上のようながん研究の進歩を踏まえ、本研究所におきましては、「がん幹細胞」及び「がん微小環境」を切り口に、「転移」「薬剤耐性」機構を解明し、新たながん治療法の開発を機動的に行うことが出来る研究体制へと昨年四月に改組いたしました。さらに、本年四月には研究所の使命をさらに明確にするため、「がん進展制御研究所」と名称を変更いたしました。同時に、本年四月から文部科学省のご支援のもと、「がんの転移・薬剤耐性に関わる先導的共同研究拠点」と

して共同利用・共同研究拠点活動を開始する運びとなりました。

本研究所が、がん研究のなかでも、特に「転移」「薬剤耐性」という「がんの悪性進展」機構の解明を目指す共同利用・共同研究拠点としての使命を果たすことによつて、がん研究の発展に貢献するのみならず、がんで苦しむ人々の救済に寄与することを強く願つております。同時に、金沢大学がん進展制御研究所が、がん研究所として設立されて以来、その黎明期から今日まで多くの優秀な研究成果をあげてこられたことを踏まえ、研究所の教職員におかれましては、本学が目指している「東アジアにおける知の拠点」形成の中核として、益々多くのエポック・メイキングな研究成果を挙げられますよう、一層の努力をお願いするところであります。本学としても、共同利用・共同研究のために国内外から多くの研究者が将来にわたつて、ここ角間の地を訪れるようになることに期待を込め、万全の支援を行う所存であります。

改めて、「がん研究所」が「がんの転移・薬剤耐性に関わる先導的共同研究拠点」として素晴らしい研究成果を挙げられることを祈念いたします。

最後に、本学に対する皆様のこれまでのご協力とご支援に、感謝と御礼を申し上げます、また一層のご協力・ご支援をお願い申し上げます。ありがとうございました。

9

附属学校園卒業式 祝辞

高等学校

(平成26年3月4日)

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。心からのお祝いを申し上げます。

本日は高校を卒業する日ではありますが、新しい学び・知の獲得・知の創造への門出の日でもあります。この素晴らしい瞬間に、はなむけの言葉を皆さんにお贈りできることを嬉しく思っています。

皆さんが生き抜く二十一世紀の今、私達は、資源、エネルギー、食糧、人口、気候、環境、地球温暖化などの、これまで人類が経験したことのない、地球規模の問題に直面しています。同時に、グローバル化の進む国際社会にあつては、民族の対立、国家間の政治経済の衝突など様々な問題が生み出されています。国内社会にあつては、急速に進む少子高齢化、地方文化の衰退、世代間の断裂、さらには東日本大震災からの復旧・復興など、解決すべき問題が山積んでいます。

このような混沌の時代を生き抜くには、歴史という時間軸と社会という空間軸において、自身の位置付けができる力、自己の存在理由 *Raison d'être* を問う力が問われます。私はこの力を教養といえます。深い教養は、時代の流れをつかみ将来を設計する上で、大きな力となります。私

私たちは人類誕生からの歴史と、自分が生まれてからの歴史の中で生きています。このような歴史の中で自分が、また、家族・社会・国・世界における自分が、個としてどのように生きるべきかを考える力を身に付けて頂きたい。広く多様な分野での学び、多くの人との交わり、異文化との出会いなど、様々な思考との交わりが教養を涵養するでありましょう。教養は、また、学問の飛躍における「直感」の源泉でもあります。

どうか、諸君には、これからの学びの中で、主体性を持って「教養」を身に付け、高度な専門を学び、自己の中でこれらを統合し、課題解決のための「総合力」を高める努力を惜しまないで下さい。

そして、もう一つ。フランスの偉大な細菌学者 ルイ・パスツールの言葉、「幸運の女神は、準備された人の心のみ訪れる」、この言葉をはなむけとしてお贈りしたいと思います。私は、「チャンスは誰にでも平等に訪れるが、そのチャンスをつかむことができるのは準備された人のみである」と解釈しています。皆さんには、必死に勉強・研究して、是非「準備された人」として成長されるようお願いしています。

東日本大震災において津波の被害が岩手県で最大だった陸前高田市を、昨年十二月に訪れました。そこでは沈下した地盤のかさ上げの大規模な工事が進行しており、たたずむ私にはこれは従来の復旧・復興ではなく、そこに新しい文明の胎動を感じました。

皆さんには、新しい文明の構築に参加すべく、自分の未来を切り開いて下さい。

本日は誠にめでたうございます。

中学校

(平成26年3月13日)

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆棟、本日は誠にめでたうございます。心からお祝い申し上げます。この輝かしい旅立ちの日に、はなむけの言葉をお贈りできることを嬉しく思っております。

皆さんは、本日ここに義務教育の九年間を終了します。これまでの小学校の六年間、中学校の三年間で皆さんが学び修得したことは、人間として、家族の一員としてまた社会の一員として、日本国民が身に付けるべき、最小限の基礎的な知識とルールであります。これからの学びでは、皆さんがどのような人生を送られるか、何を学んで、何を世に残されるか、個性の源泉をすることになります。そのような学びの中で、皆さんは自己を確立し、自ら考え、決断することにより、自らの道を歩み始めます。

この新しい門出にあたり私が人生において最も大切と思っていることをお話しします。

マリア・エレーナ (Maria Elena Najera) が詠った「The Best Thing in Life is a Friend」(生涯のこよなき宝もの、それは友 という詩の一節です。

「君が助けを必要とする時 友は手を差し伸べる

君が順調なら友は何もせず只、君の友であることに満足、

君の幸せを知るだけで充分

笑いに興じたその時々、すべての時に友の影がある

涙が必要な時、友は涙だってくれる…」(西田尚紀訳)

人との出会い、特に「友」は生涯の宝物となります。是非、生涯の宝物、友、と出会って下さい。焦る必要はありません。いつか巡り合えます。

そしてもう一つ。私は四十年近く医学部で細菌学の教育・研究にあたってきました。同じ学問分野にあるものとして最も尊敬する科学者、フランスのルイ・パスツールの言葉、「幸運の女神は、準備された人の心のみ訪れる」、この言葉をはなむけとしてお贈りしたいと思います。私は、

「チャンスは誰にでも平等に訪れるが、そのチャンスをつかむことができるのは準備された人のみである」と解釈しています。皆さんには、必死に勉強して、是非「準備された人」となるよう願っています。

自分の未来を力強く切り拓いて下さい。本日は誠におめでとうございました。

小学校

(平成25年3月13日)

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆様、本日は誠におめでとうでございます。この輝かしい旅立ちの日にはなむけの言葉をお贈りできることを嬉しく思っております。

さて、これから中学校へと道を切り拓く皆さんの新しい門出にあたり、二つ、お伝えしたいことがあります。まず、一つ目は、小学校生活六年間で学んだことを、決して忘れないで欲しいということです。算数や国語、社会や理科で学習したことはもちろんですが、その他に、皆さんは、

この六年間の生活を通して、これからの人生の基本を築き上げました。

人の話を聞くこと、

人を思いやること、

嘘をつかないこと、

ルールを守ること、

早寝、早起きの規則正しい生活、

勇気をもつこと、

感謝の気持ちを忘れないこと、

自分を信じること。

これから、つつい、人の話を聞かなくなってしまうたり、嘘をついてしまったり、ルールを守らないことが少しかつこよく見えてしまったり、そういうときが来るかと思えます。

しかし、そういうときも、強い気持ちで、これまで学んできたことを振り返り自分がどうあるべきかを考えて行動してください。

これらは、間違いなく皆さんが豊かな人生を送る上での礎となります。

皆さんにお伝えしたいことの二つ目は、毎日ベストを尽くし、一日一日を大切にすると、ということです。皆さんが四年生の三月十一日、東日本大震災が発生し、多くの尊い命が犠牲となり、多くの方々の生活が一瞬にして奪われました。

皆さんがこうして勉強し、友達と遊び、家族で過ごす日常が、いかに貴重なものか、再認識させられましたね。こうして今日本に生きている私たちは、日常生活に感謝し、命を決して無駄にすることなく生きていく責務があります。

これから、未来を切り拓く皆さんに、ステイプ・ジョブズという、iPhone や iPod を発明した偉大な創業家が、アメリカのスタンフォード大学の卒業式で話した言葉を贈ります。

「If you live each day as if it was your last, someday, you'll most certainly be right.」

（来る日も来る日もこれが人生最後の日と思って生きるとしよう。そうすれば必ず、間違いなくその通りになる日がくるだろう。）

本日は誠におめでとうございます。

小学校

(平成26年3月14日)

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。この輝かしい旅立ちの日に、はなむけの言葉をお贈りできることを嬉しく思っております。

皆さんはこれまで、先生やご家族の方々から多くを学び、多くの影響を受けながら、心も体も大きく成長されました。しかし、これから中学・高校・大学へと進むにつれて、自分で考え、自分で決断し、自らの道を歩まねばなりません。

自分で決断することは易しいことばかりではありません。むしろ、難しいことが多いかもしれません。困難に立ち向かい自分で決断していく皆さんへのエールとして、二つお話ししたいことがあります。

まず、一つ目は、必死に勉強をしてください。自分から積極的に色々な知識・情報を吸収し、多くのことを体験し、自分なりに考え、自分のものとして獲得してください。自分のものとなった知識は、視野を広げ自分と世界の繋がりを理解し、自分で判断するための力になります。

二つ目は、友をみつけてほしいということだ。

友は、喜びを二倍にし、悲しみを半分にしてくれます。自分の良いところだけでなく、悪いところを教えてくれる友は、本当の友だと言えます。困難にぶつかったときに友と一緒に悩んでくれることでしょう。本当の友と出会えた皆さんは、一生の宝物を得たことになり、これほど心強いことはありません。焦る必要はありません。いつか巡り会えます。

さて、皆さんは、フランスの細菌学者、ルイ・パスツール（一八二一—一八九五）をご存知でしょうか。狂犬病ワクチン、牛乳の低温殺菌法などを開発した、偉大な科学者です。これから未来を切り拓かれる皆さんに、ルイ・パスツールの言葉をお贈りしたいと思います。

「幸運の女神は、準備された人の心のみ訪れる」

私は、「チャンスは誰にでも平等に訪れるが、そのチャンスをつかむことができるのは準備された人のみである」と解釈しています。準備された人とは、常に考え、努力し続けている人です。皆さんには、是非「準備された人」となるよう願っています。

「雨にも負けず、風にも負けず」

世界が全体に幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」

皆さんが生まれた年に、大川小学校の卒業生が卒業制作に残した宮沢賢治の言葉です。

自分の未来を力強く切り拓いてください。
本日は誠におめでとございました。

特別支援学校

(平成26年3月7日)

野山の雪もようやく溶け始め春の気配を感じ、兼六園の梅の花も見事に咲き誇る今日この頃です。今日は、附属特別支援学校の卒業式。卒業された十七名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。今ほどは、校長先生から卒業生一人ひとりに卒業証書が手渡され緊張した中にも卒業した喜びの表情を見て、私もうれしく感じました。

小学部三名の卒業生は、小学部を卒業して今度は中学部ですね。六年生の一番の思い出は、五年生で行った白山麓方面の一泊旅行ですね。いっしょに食べたご飯、みんなが入ったお風呂、楽しかったと聞いています。これから出会う新しいお友達や先生方とも、遊びや勉強にがんばってください。

中学部六名の卒業生は、思い出多い中学部を卒業され今度は高等部へ進むこととなります。中

学部では自転車乗りにチャレンジし、秋には犀川べりのサイクリングに行ったことが良い思い出だと思います。中学部で学んだ知識や技術や経験を大いに活かして、さらにいろんな事にチャレンジして行ってください。

高等部の八名の卒業生の皆さんは、長かった十二年間の学校生活を終え、いよいよ社会人としての一步を踏み出します。一生懸命がんばった作業学習、校外に出て体験する「ほんもの学習」、実際の職場で仕事をする現場実習と、学校生活で学んだ貴重な宝をこれからの生活に大いに役立ててください。それぞれの進路先は異なりますが、学校は皆さんの母校です。うれしい時も困った時にも顔をだしてください。いつでも皆さんを応援してくれます。

卒業生保護者の皆様には、今日の日のお喜びいかばかりかとお同慶に存じます。これまで学校を信頼し、ご協力ご支援くださいましたご努力に感謝と敬意を表します。大学といたしましても今後とも附属特別支援学校を支援してまいります。益々のご理解とご支援を賜りますようお願いし、お祝いの言葉とさせていただきます。

幼稚園

(平成26年3月11日)

ほし組、つき組の四十三名の皆さん、修了おめでとうございます。

今ほどは、園長先生から皆さん一人ひとりに修了証書が手渡されました。皆さんが立派に修了証書を受け取る姿を見て、私も大変嬉しく思いました。

幼稚園は楽しかったですか？ 何をしましたか？ どんな遊びをしましたか？ 何を覚えていますか？

皆さんは金沢大学の里山に出かけ、米作り、田圃や小川での泥んこ遊び、トンボやカエルなどの生き物を探す、笹の葉っぱのコップで水を飲む、里山で採ったヨモギやムカゴを食べる、どんぐりなどの木の実を土に植える等、本当にたくさんすることにチャレンジしたと先生からお聞きしました。また、園内では、チャボやメダカを飼ったり、トマトやピーマンを育てたり、外で沢山の時間を過ごしましたね。色々なことをしている時、皆さんはきつと先生に「なんで？」「どうしてなの？」と沢山聞いて、教えてもらった事でしょう。それは大変良いことです。

四月から皆さんは、小学一年生になります。小学生になっても原っぱ、小川、森で思い切り遊んでください。そして、一生懸命勉強してください。先生やお家の人の話も良く聴いてください。そうすると、わくわくする世界が段々広がり、色々な夢が膨らんでいきます。広い世界には皆さんをわくわくさせることが沢山待っています。

皆さんは、自分の考えをしっかりとってお兄さんお姉さんになっていきますが、幼稚園でのお友達、これから出会う友達を大切にしてください。

保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、おめでとございます。いよいよ小学校生活が始まります。成長するにつれて、お子様のことが理解できなくなるようなことも、これからはあるかと思えます。是非、できるだけお子様と同じ目線で考え、一緒に沢山のことに感動されるようにお願いし、祝辞といたします。

「能登里山マイスター」養成プログラム
「能登里山里海マイスター」育成プログラム
入講式・修了式式辞

地域再生を担う

(第1回「能登里山マイスター」養成プログラム修了式 平成21年3月14日)

本日、ここに能登里山マイスター養成プログラム修了式が挙行されますこと、誠に慶賀に存じます。ただ今、一昨年十月に入校された一期生十名の方々に認定証をお渡し致しました。皆さん、おめでとうございます。心からのお祝いを申し上げます。また、陰になり日向になり受講生を支えて頂きました地域の自治体や農林漁家の皆さん、さらに地元小泊の皆さんに改めてお礼を申し上げます。

この「能登里山マイスター」養成プログラムは、金沢大学が北能登における地域再生を担う人材を養成するために、文部科学省の科学技術振興調整費の支援と石川県、輪島市、珠洲市、穴水町、能登町、さらに石川県立大学の協力を得ながら進めている社会貢献活動の一つです。現在、一期生と二期生を合わせ三十五名が恵まれた自然環境の活用方法や、独自の伝統文化などについて学び、これからの里山里海の再生にどのように活かしてゆくべきかについて、多彩な講師陣から指導を受けながら、熱心に議論を積み重ねてきました。

一期生の諸君は通常二年間で履修すべき所定の講義や実習を一年半でやり遂げたわけですから、随分と苦勞が多かったと思います。さらにその短期間の中で卒業論文も仕上げ、本日晴れて金沢大学が認定する「能登里山マイスター」の一期生として地域に巣立つことになったわけであります。本当におめでとう。

諸君が「里山マイスター」の称号をこの能登半島で、そしてこの日に授与されることはとても意義深いものがあります。それは、いま世界が能登の里山や里海に注目しているからです。昨年九月、金沢大学が事務局となつて、石川県、国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット、そして北能登の二市二町が協力して、「能登エコ・スタジアム二〇〇八」という環境イベントを開催しました。このイベントの一環として、生物多様性国際条約事務局、これはカナダのモントリオールに本部がありますが、事務局長のアハメド・ジョグラフィ氏を能登にお招きしました。

ジョグラフィ氏は、輪島市の千枚田や金蔵、能登町の「春蘭の里」、珠洲市の粟津のビオトープを見学して、自然を上手に使い、自然と共生して何百年とそこに暮らしている能登の人たちを賞賛して、「日本の里山のお手本が能登にある」と話されました。そして先般、新聞報道にもありました。来年十月から名古屋市を中心に開催される生物多様性条約第十回締約国会議の重要な関連会議の一つが石川県で開催されることになりました。石川県の谷本知事を始めとして熱心な

誘致活動とともに、「関連会議を石川県に」とジョグラフィ氏の心を揺り動かしたのは能登の里山や里海で見た人々の一途な姿ではなかったのかと考えています。

金沢大学は今後、里山里海を軸とする地域再生学を打ち立てていきたいと考えております。二十一世紀の最大の課題はエネルギーとそれに関連する地球温暖化でありましょう。そのような時代における里山里海はいかなるものなのでしょうか。例えばバイオマス・エタノール産業の中心となり得るかもしれません。皆さんと共に考え努力致したく思っております。

まずは、里山マイスター養成プログラムのスローガンともなっている、トキが再び舞い降りる環境を再生する先頭に立つて頂きたい。

能登には、縄文や渤海の時代から環日本海文化をリードしてきた歴史があります。また、「キリコ祭り」や「あえのこと」の農耕儀礼に象徴される「動」と「静」の気力と知力に満ちた文化風土があります。このたぐいまれな文化遺産の継承者として、能登の明日を先導する志をもって邁進されることを期待し、式辞と致します。

二十一世紀型里山

(第2回「能登里山マイスター」養成プログラム入講式 平成21年4月11日)

本日ここに、二十一名の新入講生、九名の新聴講生を迎え、「能登里山マイスター」養成プログラム入講式が挙行されますこと、学長として大変うれしく、心からお慶びを申し上げます。また、新入講生受け入れに際し、ご尽力いただきました、輪島市、珠洲市、穴水町、能登町の自治体やJAを始めとする関係団体の皆さんに篤くお礼を申し上げます。

この「能登里山マイスター」養成プログラムは、金沢大学が能登半島における地域再生を担う人材を養成するために、文部科学省の科学技術振興調整費の支援と石川県、輪島市、珠洲市、穴水町、能登町、さらに石川県立大学の協力を得ながら進めている社会貢献活動の一つです。能登の恵まれた自然と独自の文化を活かした里山・里海の再生を基本的なテーマとし、トキが舞い戻れるよう、地域の農業、林業、水産業などの復権を図りながら地域社会・経済の活性化を図ってゆこうとする次世代の担い手を養成するものです。皆さんは、これから二年間のカリキュラムで、能登半島の未来をどう描いていけばよいかを勉強していくこととなります。

二十一世紀初頭のいま、大量生産、大量消費をパラダイムとする、これまでの二十世紀型工業文明は、資源の枯渇や環境の悪化などの地球規模での問題を生み、転換を迫られています。私達の世界観の基礎となる認識、思考、価値観が根本的に変わりつつある時代といえることができます。ありましょう。この、パラダイムシフトの風、時代の風はあなた達を応援しています。食料自給率が40%を下回り、国のあり様として果たしてこれでよいのだろうか、安心・安全でなければならぬ食料を外国に依存してよいのだろうかと問題提起がなされ、国の施策も農業のあり方を問い直し始めています。私自身、このような食糧に関わる問題を直観的に認識し、四年前から野菜は自分で栽培しております。さらに、パラダイム・シフトの中での必然と思いますが、世界的大不況が起きました。百年に一度とも言われる未曾有の経済危機は、企業の農業への参入の大きな流れを作りつつあります。能登もその例外ではありません。そのような中で、私が皆さんに期待するのは、二十一世紀型農業、二十一世紀型里山や里海の構築であります。能登の自然・伝統農作物・伝統文化等、豊かな地域資源を基に、皆さんの独自の発想と大学の科学的な手法で、ぜひ、新しい認識、思考、価値観を創出して頂きたい思います。

一カ月前、皆さんの先輩にあたる一期生十人がここを巣立ちました。中には、電子工場を辞めて、能登の土地に合う野菜づくりや山菜の栽培をしたいと夢を持って就農した輪島の男性がいます。七尾市から通った男性は「能登野菜」のブランド化を研究し、自らの企業の農業参入に大き

な役割を果たしています。また、金沢から通った男性は、能登に自生するサカキを商品として金沢に出荷させ、流通させるルートの開拓に努めました。いまでは能登の二つの農業協同組合が動き出し、近い将来、能登はサカキの出荷産地になるかもしれません。夢が現実に向けて動き出したとき、それは未来への希望となります。皆さんの先輩はそれを実践して見せてくれました。

三期生の中には東京や名古屋、岐阜、富山から能登に移住して学ぼうという方々もいます。また、かつて青年海外協力隊に参加して、今度は能登と世界の架け橋になりたいと参加された方もいると聞きました。そして今回は女性五人も受講されます。皆さんは自己実現を果たすべく、いろいろな思いを持ってこの能登半島の最先端まで来られました。私はこの地を、地域を再生するフロンティアだと受け止めています。皆さんには、ここから地域を変革していく発想と志を持って頂きたい。

「能登里山マイスター」養成プログラムでは五年間で六十名のマイスターを養成します。能登で六十人もの若者が地域おこしのためにアイデアを凝らせば、能登は変わって行くと私は確信しております。そして、日本が、世界が変わって行くと信じています。

昨年暮れに、私はのとキリシマツツジという、ツツジの苗木を三本、珠洲の方からいただき、

金沢の自宅の庭に植えました。うまくいけば来月、五月には真っ赤な花が咲くことを楽しみにしています。私はできるだけ機会を見つけ、能登に足を運びたいと思いますが、そう頻繁には通えません。庭ののどキリシマツツジの成長を見守りながら、皆さんが自らの夢と希望の大きな花をこの能登の地で咲かせることを期待し、式辞といたします。

人類生存の根幹は農業

〔能登里山里海マイスター〕育成プログラム第一期生修了式 平成25年9月29日

本日、ここに「能登里山里海マイスター」育成プログラム修了式が挙行されますこと、誠に慶賀に存じます。ただ今、第一期修了生二十二名の方々に「能登里山里海マイスター」の認定証書をお渡し致しました。皆さん、おめでとございます。心からお祝い申し上げます。また、これまで受講生を支えて下さいました地域自治体の皆様、農業漁業をなりわいとされている皆様、そして地元小泊地区の皆様にお礼申し上げます。「能登里山里海マイスター」育成プログラムは、石川県、輪島市、珠洲市、穴水町、能登町と金沢大学の出資により、「能登里山マイスター」養成プログラムの後継事業として開始したものです。開始にあたり多大の援助を賜りました各自

治体の皆様にはこの場をお借りし、あらためて感謝申し上げます。

さて、この人材育成プログラムは、大学と自治体とが協力して運営しております。加えて輪島市の「里山里海塾」、能登町の「ふるさと未来塾」とも連携しており、これまでにない形で、地域と大学の密接なネットワークを築いてきました。修了生の皆さんは、このような新たな試みがつまったプログラムが初めて輩出する、大切な人材であります。授業の内容も、従来の環境に配慮した農林水産業をベースとした地域活性化だけにとどまらず、能登を世界に発信するワークショップを開くなど、能登に新たな時代を開こうとするカリキュラムが工夫されています。一年間に凝縮された新しいカリキュラムで、皆さんは月二回の土曜日、この学舎で能登の里山里海をどのように活かしてゆくべきかについて、多彩な講師陣から指導を受けながら、熱心に議論を重ねてられました。その集大成として、自らの研究課題をまとめ上げ、今日という日を迎えられるました。

入講式の日抱いた夢と希望を振り返り、この一年で自分自身がどう変わったか、今一度思い起こしてみてください。どのように変わられたかは、皆さんがまとめ上げた課題研究からも垣間見えます。例えば、能登で送った幼い日々を振り返りつつ、里山里海を遊びの場とした能登の遊び文化を根気よく拾い上げ、これを里山里海の活性化につなげようとする試みがありました。ま

た、亡くなられた日本画家の勝田深氷氏が、珠洲とサンフランシスコに半年ずつ生活しながら、珠洲での工房として使っていたかやぶき民家「勝東庵」がのこされておりますが、これを氏の芸術活動の一つとして捉え、「勝東庵」に対する文化価値を再考する機会を与えたいという取り組みもありました。里山の活用でいえば、能登はキノコが豊富なことで知られます。しかし、イタリア料理やフランス料理の食材として、レストランで高いニーズがあるキノコが能登では利用されないまま眠っているとの調査研究がありました。能登の里山の新たな資源の発掘につながるものと思います。ここでは触れる時間がありませんが、この他にも多くの印象深い報告がありました。研究概要からも、皆さん一人ひとりが様々なバックグラウンドをお持ちになり、日頃からユニークな活動をされていることがよくわかります。

人類生存の根幹は農業にあります。能登半島の文化を基盤として、皆さんが個性豊かに光り、それぞれが、この能登半島、そして、広く世界に新しい息吹を吹き込む人材として成長されることを願っております。

昨年度で終了した「能登里山マイスター」養成プログラムでは五年間で六十二名の能登里山マイスターを輩出しました。今回の「能登里山里海マイスター」育成プログラムの修了生二十二名を加えると、八十四名になります。金沢大学は「社会のための大学」、「地域とともにある大学」として、地域と連携した教育・研究を進めています。能登にとっても、大学にとっても、里山里

海マイスターの皆さんは、大きな財産です。能登の明日を担う気概を新たにし、明日からも能登の人々と共に強く歩まれることを祈念申し上げ、式辞と致します。

能登の未来

（「能登里山里海マイスター」育成プログラム第二期生入講式 平成25年10月26日）

本日ここに、四十名の受講生、ならびに三名の聴講生を迎え、諸機関からの多くの方々のご臨席のもと、「能登里山里海マイスター」育成プログラム第二期入講式を挙行できますこと、誠に慶賀に存じます。また、本プログラムの運営にご尽力いただいております、石川県をはじめとする連携自治体各位には、改めてお礼を申し上げます。

金沢大学は、社会貢献の一環として、この能登の地で、種々の事業にとりくんでおります。二〇〇七年には、能登半島における地域再生を担う人材を養成する目的で、科学技術振興機構の地域再生人材創出拠点の形成事業による「能登里山マイスター」養成プログラムをスタートさせました。五年間の事業をととして、六十二名の「能登里山マイスター」が育ち、十二名の方々

東京など県外から能登に移住されました。また、五十二名の方々都在这里、能登で、農林漁業を基盤としたビジネス、あるいは地域の活性化に取り組む活動を行っています。昨年十月、「能登里山マイスター」養成プログラムの後継事業として、石川県、奥能登二市二町の御協力により「能登里山里海マイスター」育成プログラムを新たにスタートさせました。育成プログラムも順調に運営されており、本年九月二十九日には、第一回修了式を迎え、二十二名の第一期生が修了証書を手にしたところです。

「能登里山マイスター」養成プログラム、「能登里山里海マイスター」育成プログラム、合わせて八十四名のマイスターの方々が、既にそれぞれの地域で、ユニークな活動をされています。今後二年間で四十名のマイスターを養成する計画ですので、合わせて百二十名余りの里山里海のマイスターが育つこととなります。百二十名を超える若者が地域再生のためにアイデアを凝らし、全国に向けて、世界に向けて発信していけば、石川県の能登は世界の能登になります。能登学舎に志をもった皆さんが集う、今ここに見られるこの光景こそ「能登の未来である」と確信しております。

第二期生の皆さん、皆さんはこれから一年間、密度の濃いカリキュラムを通して、能登半島の未来を、自らの人生設計に重ねてどう描くかを模索していくこととなります。今日この日に胸に刻んでいることを忘れることなく、たゆむことなく精進されますことを願い、式辞といたします。

金沢美術工芸大学卒業式
金沢美術工芸大学大学院修了式祝辞

最も人間らしい価値

(第52回卒業式 第29回修了式 平成21年3月2日)

皆さん、ご卒業・修了おめでとうございます。心からの御祝いを申し上げます。また、今日の日を共に祝うために参集されました御家族や保護者の皆様に対しても、心からお慶び申し上げます。

金沢美術工芸大学と同じ地にあり、キャンパスを接する金沢大学を代表して、他に例を見ないほど創造的かつ伝統的なセレモニーに列席し、御祝いを申し上げますこと、誠に光栄に存じます。

私は昨年四月、皆さんの大学のエントランス・ホールで、古代ヘレニズム彫刻の傑作である「サモトラケのニケ」、「ラオコーン」を目にし、たとえそれがレプリカとわかっていても、そこに設置されているということに対して、正直、新鮮な感動を覚えました。そして今日、このような素晴らしいアートのスペースとしての学舎で学生時代を過ごした、個性豊かな皆さんを目の前にして、私は再び新たな感動を覚えております。この忘れがたい学舎で出会い、幾多の教えを受けた師や、ともにしのぎを削った友、挫折や絶望の淵で支えてくれた人々、磨かれた芸術的センス、自らの美学、誇り、希望、夢…、すべてが皆さん一人一人の人生という作品を彩るかけがえのない、運

命的なモチーフなのですから、それらを人生の宝物として大切にしておいて頂きたいです。

ここ数年、私は大学の国際貢献プロジェクトで、しばしばイタリアを訪れる機会に恵まれました。とくに、トスカーナ地方のフィレンツェはルネサンス文化を開花させ、近代ヨーロッパ誕生の地であります。そこを流れるアルノ川にほど近い場所に、サンタ・マリア・デル・カルミネ教会があります。このブランカッチ礼拝堂は、皆さんもご承知の通り、「ルネサンス絵画のアトリエ」と言われているところです。ほんの十人も入れれば窮屈なほど小さな礼拝堂ですが、そこに立つてマザッチョの壁画を目の前にするたびに、ボッティチェッリ、ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエッロもまたここに立つてデッサンの練習に励んだ姿が想像され、感激のあまり、時の経つのも忘れるほどです。

マザッチョが先輩のマゾリーノとともに壁画制作に向かったのは二十三歳でしたから、まさに皆さんと同じ年齢であったかと思えます。私は医学を専攻する身ではありますが、その私の目からしても、マザッチョの描いた「楽園を開放されるアダムとイヴ」は、まぎれもなく「血と肉を持つて大地に立つ人間」であり、その生命ある存在感が私の胸を強く打つのであります。エデンの園を開放された二人が、大きな不安におのきなながらも、助け合いながら逞しく、人間としての第一歩を歩き出した姿に、私はどれほど勇気づけられたかしれません。

エデンを開放された人間が生きるには、衣食住が必要不可欠であることはもちろんです。しか

しながら、衣食住の外の世界にこそ、人間が人間として真に求めなければならない、最も人間らしい価値があるのだろうと私は思います。「芸術」はまさしくそうした価値の一つであり、皆さんはこれから、そのような価値を生み出す大いなる営みに参加するわけです。

しかし、皆さんが足を踏み出す現下の社会は、一昨年夏のアメリカでのサブプライムローン問題に端を発した百年に一度ともいわれる未曾有の金融危機に襲われ、世界経済は歴史的な難局を迎え、パンドラの箱が開いたような混沌に満ちています。とはいえ、古い価値観が崩れる混沌は大きな革新を生むことを歴史が示しています。一九二九年の世界恐慌後には、多くのものが生まれ、映画の世界にはトーキー映画の時代が到来しました。また、日本あるいはアジアが金融危機に見舞われた一九九八年にはその後の情報社会を先導するグーグル社が設立されました。皆さんには、百年に一度の金融危機・混沌を、百年に一度のチャンスと捉え、希望を持って学舎をあとに、前進して頂きたい思います。

小立野の地には冬の眠りから覚めた草木が萌芽し、浅野川の流れは春の陽射しを受けて日増しにその輝きを増しています。皆さんにおかれましては、「創造都市」金沢、「歴史都市」金沢、「学生街」金沢で生活し、その地に深く根を下ろした伝統ある金沢美術工芸大学で学んだことを誇りとし、それぞれの道で活躍されますことを祈念申し上げ、私の祝辞といたします。

芸術の力

(第53回卒業式、第30回修了式 平成22年3月1日)

皆さん、御卒業・修了おめでとございます。心からの御祝いを申し上げます。また、今日の日を共に祝うために参集されました御家族や保護者の皆様に対しても、心からお慶び申し上げます。

金沢美術工芸大学と同じ地にあり、キャンパスを接する金沢大学を代表して御祝いを申し上げますこと、誠に光栄に存じます。

人生の大きな区切りとするこの日、皆さんには自らの学生生活を振り返りつつ、これからの人生への新たな決意を固めていることと思います。教員の温かい言葉・厳しい言葉、友との出会い・別れ、サークル活動での興奮・落胆、日々の生活での喜び・悲しみ、そういった事柄を思い起こし、それらが己を動かす原動力であることを認識し、人生のこよなき宝物として大切にして下さい。

「大学と社会」、「芸術と社会」は、互いに関わり合いながら時代とともに変貌を遂げてきていま

す。芸術は人間の特性でありますが社会を反映し、また、社会はそこに生まれた芸術文化により在り方を変えていくのでありましょう。芸術は個人的な行為ですが万人に訴える不偏性も兼ね備えている所以でありましょう。ルネサンス美術はその時代の社会の要請であったのでしょう。また、それはその後の社会の在り方に大きな影響を与えました。歴史と伝統に彩られたここ金沢で学んだ皆さんには、金沢の文化・伝統を織り込んだ芸術が創造されつつあることと思えます。皆さんには是非世界に発信して頂きたく存じます。

フランスの著名な哲学者ゴジエーブ（一九〇二―一九六八）は「階級が無く、互いに争うことが無く、生きる上で過酷な労働の必要もない世界では、人は人間であることをやめて動物性に戻るだろう」と述べています。しかし、芸術は、「人が人間のままでとどまっていられる」力を持っているのではないのでしょうか。皆さんはこれから、そのような価値の創造に参加するわけです。

現下の世界は一昨年九月十五日のリーマン・ブラザーズの破綻を契機として一気に進行した世界同時経済不況、地球温暖化、資源・エネルギー等、地球規模での問題に直面しています。不況からの脱出には新産業の創出が、地球温暖化・再生可能エネルギー開発と連動する形で種々検討され、実行されつつあります。また、金融管理システムの構築等が進行しつつあります。皆さんはこのようにダイナミックに変わりつつある世界を歩むこととなります。明るい未来のために、

明るい未来を自ら構想されんことを期待致します。

小立野の地には冬の眠りから覚めた草木が萌芽し、浅野川の流れは春の陽射しを受けて日増しにその輝きを増しています。皆さんにおかれましては、「歴史都市」金沢、「創造都市」金沢そして「世界都市」金沢で生活し、その地に深く根を下ろした伝統ある金沢美術工芸大学で学んだことを誇りとし、それぞれの道で活躍されますことを祈念申し上げます、私の祝辞といたします。

自らの感性

(第54回卒業式 第31回修了式 平成23年3月1日)

皆さん、御卒業・修了おめでとうございます。心からの御祝いを申し上げます。また、共に今日この日を祝うために参集されました御家族や保護者の皆様に対しても、心からお慶び申し上げます。

金沢美術工芸大学と金沢大学は、本年一月十三日に、大学間交流に関する包括協定を締結しま

した。両大学の共働の下、これまで以上に斬新な知の創造が期待されるところであります。今日晴れて御卒業・修了される皆さんに、金沢大学を代表して祝辞を申し上げますこと、誠に光栄に存じます。

美術工芸王国を誇る石川県には、「日本の美」を生み出す高度な技と豊かな創造性において、他に類を見ない恵まれた、歴史的・文化的土壌があります。そして、皆さんが学んでこられた名門、金沢美術工芸大学こそ、加賀藩なきあと、この地に息づく最大の「美の拠点」であると言えることができます。

人生の大きな区切りとなる今日、皆さんはそれぞれに学生生活を振り返り、これからの人生への新たな決意を固めていることと思います。犀川と浅野川の流れに育まれた金沢との出会い、人との出会い、心を動かす作品や書物との出会い：いくつもの出会いが皆さんを「今」に導いてきたといっても過言ではないでしょう。今日という日は、多くの別離を一度に受け入れねばならない日です。人生は出会いと別離の繰り返しとしたら、出会いと別離が人生を左右することになります。もちろん、人生を左右するのは別の要因も少なくありませんが、これだけ多くの別離を前にする日は、人生にとってそう多くはありません。どうか、今日という人生にとって稀有な日を、一人ひとりが真剣に受けとめて頂きたいと思えます。

ところで、昨年は石川県の七尾出身の画家、いや絵師と言うべきでしょうか、長谷川等伯（一五三九～一六一〇）が亡くなって四百年ということで、東京と京都の大回顧展をはじめ、地元石川県でも数々の企画がありました。更に、本年一月から、ある全国紙（日本経済新聞）で（小説）「等伯」が連載され、（医学畑の私でも）すっかり等伯を身近に感じるようになりました。長谷川等伯は京都に出てからは千利休とも親交を結び、精力的な活動の中から独自の画風を創造して狩野派にも対抗したというのですから、たぐいまれなる才能だけでなく、すさまじいエネルギーをもつ人であったのでしょうか。国宝の「松林図屏風」は、大胆さと抒情性を兼ね備えた水墨画の最高傑作であると同時に、能登で生まれ育った人間だからこそと思いたくなるような厳肅な空気が、北陸の原風景を感じずにはいられません。都から遠く離れた能登地方で生まれ育ったことを自らの感性の原点として向き合った故に、上洛後に、力強くオリジナリテイあふれる画風を確立できたと違いありません。また、等伯は三十代の前半で能登の地を離れて京の都に上ったようですが、その時の心の姿勢というか覚悟が、後の等伯の芸術に大輪の花を咲かせる運命へと向かわせたのだと、私は思います。

皆さんにおかれましては、自らの感性の原点にキチンと向き合い、本日抱いている心の姿勢・覚悟を胸に刻み歩みを進め大輪の花を咲かせていただきたいと思えます。

十八世紀の産業革命を起点とする、大量生産・大量消費で特徴づけられる二十世紀型工業文明は終焉を迎え、大きく転換しつつあります。今まさに、経済、政治、社会、科学等、あらゆる面において認識・思考・価値観の転換、即ちパラダイムシフト（世界観のもとになっている認識、思考、価値観^{II}パラダイム、が根本的に変わること）が起きつつあります。皆さんはダイナミックに変わっていく世界を歩むこととなります。今まで金沢美術工芸大学で学んできた全てを礎にパラダイムシフトに参加して下さい。明るい未来を自ら構想されんことを期待します。

地球温暖化が危惧されるこの頃ですが、ここ金沢には今、私が若かった頃と同じように、やわらかな春の陽射しを受けて、若々しい緑が木々に、そして、大地によみがえってきました。「歴史都市」金沢、「ユネスコ・クラフト創造都市」金沢、「世界都市」金沢、そういつた素晴らしき町「金沢」。かかる金沢の地にあつて、綿々と「美」の糸をつむぎ続ける「美の拠点」金沢美術工芸大学で学んだことを誇りに、それぞれの道で個性豊かに力を発揮されますことを祈念申し上げます、祝辞といたします。

夢を追いかける

(第55回卒業式 第32回修了式 平24年3月1日)

皆さん、御卒業・修了おめでとございます。心からのお祝いを申し上げます。また、共に今日この日を祝うために参集されましたご家族や保護者の皆様に対しても、心からお慶び申し上げます。

金沢という美術工芸と学問の輝かしい伝統の息づく町にあつて、金沢美術工芸大学と金沢大学は近年、積極的かつ斬新な発想による連携を強めていることはご承知の通りであります。今日晴れて御卒業・修了される皆さんに、金沢大学を代表して祝辞を述べる機会を得ましたことは、誠に光栄に存じます。

皆さんの最終学年であつた昨年は、ほんとうに色々な出来事がありましたと、いとも簡単に日常的な言葉でくくつてしまふには、それらはあまりにも歴史的な出来事ばかりでした。いうまでもなく東北地方太平洋沖地震と津波、そして、それに続く福島第一原発の事故、ヨーロッパ経済の危機と円高による日本経済の低迷。しかし、新たな二〇一二年、日本は希望に向かつて歩み始

めています。

昨年末には米アップル社の創業者であるスティーブ・ジョブズ氏が突然に世を去りました。iPad、iPhone、iPadなどの人気商品を次々と世に送り出した偉大な人物と、簡単には評価できないほど、ジョブズ氏の功績は社会的、歴史的に画期的なものでした。アートの世界に身におく皆さんばかりでなく、世界中の人々がジョブズ氏の創造したモノによって大きな影響を受けたわけです。ジョブズ氏がこんなにも早く他界したことで、インフォメーション・テクノロジー、つまりIT革新のスピードは鈍るかもしれませんが、それでも社会のニーズに応えて、第二、第三のジョブズ氏が登場してくることでしょう。社会のニーズ、それは単なる便利さや機能性の追求だけでなく、人間のクリエイティブな活動が常に「夢」を追いかけることにより生み出されるものであります。私が専門としている医学を含む科学（サイエンス）はこうして発展してきたわけです。

皆さんが専門としているアートの世界では、「発展」に見えているのは「表現の様式」、つまりスタイルの変化であって、アートそのものに内在する本質、即ち感動を生み出す（人間の）感覚は普遍であるように思われます。そうでなければ、数万年前の人類が描いたアルタミラやラスコーなどの洞窟壁画の高い芸術性を説明することはできません。

人間は、社会のニーズ、夢、そして（人間として）変わらぬ本質・感覚に突き動かされ、新た

な価値の創造を続けてきました。

皆さんは、明日から歩み出す実社会において、新たな価値の創造に参加するわけです。いかなる分野で仕事をするにしろ、豊かな感性とたくましく磨かれた創造力によって、新時代のパイオニアとして活躍してください。常に本質を見きわめる厳しい姿勢を忘れずに、真にクリエイティブな仕事に励んでください。それは、作家として自分の作品を制作するということだけでなく、あらゆる分野で活躍する、たとえば医学や工学のような実学系の人間たちとのコラボレーションにおいても、皆さんのユニークな力を積極的に発揮してほしいという意味です。めまぐるしく変わりゆく世界にあつて、変化の妙を楽しませてくれるのもアーティストですが、一方で、決して変わらぬものを誰よりも強く求める人間であつてほしいと思います。

移りゆく時代の中で私たちが暮らす金沢の町も装いを新たにし、加賀藩以来の伝統工芸の都には今、世界が目にする金沢21世紀美術館が強烈なコントラストを生み出しています。素晴らしき町「金沢」、「歴史都市」金沢、「ユネスコ・クラフト創造都市」金沢、「世界都市」金沢…を私たち金沢市民がこれからも高らかに標榜できるのは、今日ここに卒業・修了を迎えられた皆さんの肩にかかっているといても過言ではないでしょう。

この金沢の地にあつて、綿々と「美」の糸をつむぎ続ける金沢美術工芸大学で学んだことを誇

りに、それぞれの道で個性豊かに力を発揮されますことを祈念申し上げ、私の祝辞といたします。

無限の可能性

(第56回卒業式 第33回修了式 平成25年3月1日)

皆さん、御卒業・修了おめでとございます。心からのお祝いを申し上げます。また、共に今日この日を祝うために参集されましたご家族や保護者の皆様に対しても、心からお慶び申し上げます。

金沢という美術工芸と学問の輝かしい伝統の息づく町にあつて、金沢美術工芸大学と金沢大学は近年、積極的かつ斬新な発想による連携を強めていることはご承知の通りであります。今日晴れて御卒業・修了される皆さんに、金沢大学を代表して祝辞を述べる機会を得ましたこと、誠に光栄に存じます。

さて、皆さんが金沢に学んだこの数年間は、人生にとってかけがえのない「青春」であり、い

くつになっても懐かしい「学生時代」となることでしょう。そうした実感は、今の皆さんにはないでしょうが、私もそうですが、学生時代がはるか遠くなくなってしまった者たちにとっては、「すばらしいあの頃、学生時代」であります。

しかしながら、学生時代は、皆さんの個人的な思い出だけで埋まっているわけではありません。ここ数年間の日本や世界の出来事の記憶は、皆さんがどのように学生時代を生きたにしろ、皆さん共通の風景として存在し、絵筆を持って勝手に描き直すことはできないのです。その風景の一角には、暗く鮮烈な色調で塗られた、東北地方太平洋沖地震と津波、それに続く福島第一原発の事故や、関越自動車道高速ツアーバスの悲惨な事故があり、一方には、明るく胸躍る色調で塗られた風景があります。たとえば、日本選手の活躍に一喜一憂したロンドン・オリンピック、あるいは、世界中に自慢したくなるような東京スカイツリーの完成、山中伸弥教授のノーベル賞受賞などなど、好むと好まざるとにかかわらず、この時代を生きた私たち日本人の心に深く刻まれています。

私の専門は医学細菌学です。同じ医学を専門とする者として、山中伸弥教授のiPS細胞の研究に関連して、皆さんにお考えいただきたいことは、人間の細胞の一個一個に膨大な量の全身の設計図が常に失われずに残されているという事実です。つまり、皆さんは誕生して二十数年間で、

今の皆さんに成長したのではなく、皆さんの中には細胞レベルで、長い人間としての進化の歴史、日本人としての繊細かつ豊かに育まれた感性を記録した設計図が、どんなに世代が変わり、時代が変わろうとも残されているということです。

私たち誰もがそうですが、とくに独創的なアートの世界に生きる皆さんには、「自分の内なる無限の可能性」を信じるための科学的根拠が、昨年の山中伸弥教授のノーベル賞受賞で確かなものとなったのだと考えて頂きたいと思います。

世界に飛び出してみれば、金沢で暮らし、金沢美術工芸大学で学んだことが、何よりも皆さんに日本文化の伝統のすばらしさを教えてくれたということが、良くわかります。新たな何かを生み出す時、その基本的設計図はすでに皆さん自身の内にあります。果てしなく広い海原にたとえられる社会に、明日から一人で船を漕ぎ出していく皆さんを支えるものは唯一自分自身であります。自分を信じ、伝統ある金沢美術工芸大学で学んだことを信じ、いかなる嵐にも立ち向かっていただきたいと思います。

移りゆく時代の中で私たちが暮らす金沢の町も装いを新たにし、加賀藩以来の伝統工芸の都には今、世界が注目する金沢21世紀美術館が強烈なコントラストを生み出しています。しかし、考えても見てください。二十世紀から二十一世紀へと時代が移って、もう十二年が過ぎました。

「二十一世紀」はどんどん過去へ流れ去り、やがて新時代のキャッチフレーズとして「二十二世紀」が登場する日も遠くはないでしょう。このかけがえのない二十一世紀をよりクリエイティブな時代とする担い手として、今日ここに卒業・修了を迎えられた皆さんの活躍を期待します。

この金沢の地にあつて、綿々と「美」の糸をつむぎ続ける金沢美術工芸大学で学んだことを誇りとし、それぞれの道で個性豊かに力を発揮されますことを祈念申し上げ、祝辞といたします。

本阿弥光悦

(第57回卒業式 第34回修了式 平成26年3月1日)

皆さん、御卒業・修了おめでとございます。心からのお祝いを申し上げます。

金沢という美術工芸と学問の輝かしい伝統の息づく町にあつて、金沢美術工芸大学と金沢大学は近年、積極的かつ斬新な発想による連携を強め、地域の文化活動の主軸を動かす両輪として機能し始めています。今日晴れて御卒業・修了される皆さんに、金沢大学を代表して祝辞を述べる

機会を得ましたことは、誠に光栄に存じます。

私の専門は医学であり、皆さんが研鑽を積んできた芸術に対しては専門的なお話をする立場にはありませんが、日本のレオナルド・ダ・ヴィンチと称されている本阿弥光悦の多彩な活動には、常々大きな関心を持っています。多彩な表現を自在に操って独自の世界を創造するルネサンス的精神こそ、今の私たちが学ぶべき理想的な人間であると思うからです。

光悦の生家である本阿弥家は、京都で刀剣を鑑定する名家でした。刀剣には鞘や鏝を含めて、木工、金工、漆、蒔絵、染色、螺鈿などの高度な工芸技法が結集されており、光悦は幼い頃から多彩な工芸技術が相互に引き立て合いながら奏でるハーモニーのすばらしさを目の当たりにしながら育ったと思われます。皆さんが学んだ金沢美術工芸大学もまた、日本画、油絵、彫刻、工芸、デザインなどの多彩な専攻で構成される表現世界であり、どこに所属して学んでも、異なる専攻と影響し合いながら創作に取り組んできたという点では、光悦の育った環境と同じではなかったでしょう。

光悦の作品が放つ魅力は「軽妙な遊び心」にあると言われますが、それを支えているのが多彩な表現の交響曲であると、私は思います。本阿弥光悦という近代的芸術家は、いわゆる「孤高の芸術家」というレッテルの対極にあり、最近では「日本最初のアートディレクター」とも称され

ているようです。代表作「鶴下絵三十六歌仙巻」は俵屋宗達の描く無数の鶴の絵を背景に三十六歌仙の和歌を光悦が自在に散らし書きした傑作ですが、私の目から見ても、そこには宗達の絵が奏でるメロディーと光悦の書が奏でるメロディーが相互に絡み合って無類のハーモニーが生まれています。絵画と書が渾然一体となっているということは、それぞれがそれぞれに互いの命を生かそうとすることで、新たな命の輝きを生み出しているということです。これは最近はやりのコラボレーションとは、本質的に違う次元の創作、表現のような気がします。

あらゆる分野で専門化と多様化が進む現代において、一つのジャンルは無数の異なったジャンルとの関連を余儀なくされ、孤立した進歩などはありません。私は先日、陸前高田を訪ねました。東北地方太平洋沖地震と津波、そして、それに続く福島第一原発の事故から三年の月日が流れても、被災地の復興はまだまだこれからという実感です。これからの復興には異分野の人間たちの単なるコラボレーションによる復旧・復興活動ではなく、「新たな認識、思考及び価値を生み出す創造活動」こそが被災地というネガティブな言葉を完全に消去するためには必要なのだと思感した次第です。私たちがともに同じ社会で支え合って生きていくために、また、新時代の新たな価値を創造するために、何をすればいいのか、本阿弥光悦のような優れた先人からも学びたいものです。

明日から実社会に歩み出す皆さんは、この金沢の地にあつて、綿々と「美」の糸をつむぎ続ける金沢美術工芸大学の伝統の中で学んだことの意義を考え、それを誇りとし、それぞれが進む道で真にクリエイティブな力を発揮されますことを祈念申し上げます、私の祝辞といたします。

12

石川工業高等専門学校卒業証書・修了証書授与式祝辞

新しい認識・思考・世界観

(平成26年3月19日)

皆さん、ご卒業おめでとうございます。心からのお祝いを申し上げます。

貴学と深い連携を結ぶ金沢大学を代表して祝辞を述べる機会を得ましたこと、誠に光栄に存じます。

昨年十二月、東日本大震災において津波の被害が岩手県で最大だった陸前高田市を訪れました。そこでは沈下した地盤のかさ上げの大規模な工事が進行しており、たたくむ私にはこれは従来の復旧・復興ではなく、そこに新しい文明の胎動を感じました。

人類には長い過去があり、今があり、未来があります。人生の大きな区切りとなる今日、皆さんにはそれぞれに学生生活を振り返り、ここ「かほくの地」で過ごした日々が、いかなる時代にあったのかを胸に刻んで下さい。皆さんが入学した二〇〇九年四月、前年二〇〇八年九月十五日のリーマン・ブラザーズの破綻を契機とする世界同時経済不況の真っ直中ただなかにありました。皆さんが学生時代を過ごした五年の間、米国ではオバマ政権が発足し、我が国では数回に渡り政権が交

代しました。また、ヨーロッパではユーロ危機が発生し、中東・北アフリカにおいてはインターネットを介した情報の発信と共有により、民衆の行動が引つ張る形で市民革命が起きました。総じて言うならば、昭和が平成となり、東西冷戦を終結に導いたベルリンの壁が崩壊した二十五年前、一九八九年を想起させる、極めて劇的な変化の時代と言うことができるでありましょう。学生時代がいかなる時代であったかに耳を澄まし、現在を深く知り、認識することにより自らの「立ち位置」を見いだし、未来を創る共同作業に参画してください。

二十一世紀の今、人類は資源・エネルギー、食糧、人口、気候変動、環境、地球温暖化など、これまで経験したことのない、地球規模での問題に直面しています。我が国においては、東日本大震災からの復旧・復興も重い課題であります。これらの事象を鳥瞰するならば、大量生産・大量消費を特徴とする二十世紀型工業文明は、少なくとも今日の日本においては、終焉を迎えていると言えるでありましょう。新しい文明の創出には、認識・思考・世界観の大転換、パラダイムシフトが求められています。

現下の我が国を「モノづくり」の視点から見ますと、「モノづくり」の拠点は国内から中国へ、更にはASEAN諸国へと移り、その先にはアフリカ大陸までもが視野に入っています。

こうした日本の製造業の海外移転、国際競争力の低下を海外からは「さまよえる日本人」とまで揶揄される程に危機的な状況にあります。皆さん、敗戦の瓦礫の中から今日の世界屈指の豊か

な日本を作り上げてきた中核は、皆さんが学んだ高等工業専門学校や私どもにある理工学分野で育った工業系人材である事を思い起こしてください。皆さんには新しい認識・思考・世界観での「モノづくり」を通して、新しい文明の創出に参画されることを期待します。

皆さんの学生時代の活躍振りは、ロボコン、プロコン、デザコン、英語プレコンなどでの輝かしい成果を通して全国に知れ渡っております。これも一重に村本健一郎校長先生を始めとする教職員ご一同によるご薫陶の賜物であり、それに着実に応えてきた皆さんの努力が結実したものであると敬服しております。皆さんが学ばれた石川工業高等専門学校は、教育力、研究力など様々な指標評価を総合して、今や国立高等専門学校機構五十一校中の首座を占めると言われるようになります。何時でも、何処でも母校の名前を誇らしく言える皆さんがとても耀いて見えます。

皆さんが、そのような素晴らしい石川工業高等専門学校で学んだことを誇りとし、勇気を持って志高く、グローバルに活躍されることを願い、祝辞とします。

13

北國文化賞・北國芸能賞祝辭

地域に根ざした文化活動

(第62回北國文化賞・第41回北國芸能賞 平成20年11月3日)

本日は、北國文化賞で三名、北國芸能賞にて二名の皆様方が受賞されました。誠にめでたうございます。心からお祝いを申し上げます。

人類の歴史を振り返りますと、時代ごとに求められる文化も移り変わっているように思われます。本日受賞した皆さんは、大切な事実を社会に位置づけられた方、ひとつの道を極められた方、伝統を引き継ぎ独自の表現方法を確立なさった方々など、まさに今の時代に求められている文化を体現されている方々です。今年は二〇〇八年、二十一世紀に入って八年目であります。ご存じのように、私たちは経済、資源、環境など、地球規模の問題に直面しています。文化の総体としての文明が大きく転換しつつある現在、文明を形作っている地域の文化・学術を再認識することの授与式が改めて意義深く感じられます。

さて、今年度は、「石川四高記念文化交流館」が開館し、国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットも開所致しました。私事になりますが、金沢大学は三学域・十六学類へと改組し「学都」としての節目を迎えた年でもあります。さらに八月には赤羽ホールが開館し、新しい文化の発信拠点が築かれました。こうした地域に根ざした文化活動は、全国さ

らには世界に向けた文化の広がりの一歩であると確信しております。

皆様方はそれぞれの分野で創造活動に研鑽され、素晴らしい功績と情報を、地域、さらには世界に向けて発信されましたことに、改めて敬意を表したいと思います。

これからもどうぞ御自愛の上、後進の指導にも努めていただき、一層の御活躍を祈念申し上げます、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は、本当におめでとうございます。

文化の多様性

(第63回北國文化賞・第42回北國芸能賞 平成21年11月3日)

本日は、北國文化賞で二名、一団体、北國芸能賞にて一名、一団体の皆様方が受賞されました。誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

本日受賞した皆さんは、伝統のなから独自の美を創出された方、医学の分野で知の創造を成し遂げられた方、生態系における新たな発見・地球環境保全に尽力されている方々、伝統芸能を究めつつ次世代の育成に努めている方、新しい芸能分野で地域文化の体現者として活躍されてい

る方々など、まさに今の時代に北陸文化を担っている方々です。

ご存じのように、今日、人類は資源・エネルギー、地球温暖化、経済危機など地球規模の問題に直面しております。さらに、感染症の問題もまたグローバル化の進行とともに一層深刻化しております。この二月にメキシコで発生した新型インフルエンザの感染は、五月には我が国にも感染者が発生、六月十二日には世界保健機構（WHO）は世界的大流行、パンデミックを宣言しました。今なお世界的に拡大しております。我が国では、皆さん良く御存知のように、新型インフルエンザ感染防止のためにマスク着用が日常的に広く行われています。一部外国のメディアは「マスクに手洗い、日本は偏執狂」と書いたそうです。しかし、「呼吸器感染症流行時にマスク」、それは日本の文化でありましょう。さらに、勤勉な国民性により、疫学的に貴重なデータが収集されました。これも日本の文化でありましょう。これらは今後の新型感染症対策に極めて有益である筈です。

このことは我々に、文化の多様性がグローバルな問題の解決の糸口となることを教えているのではないのでしょうか。それにも関わらず、グローバル化により個々の国や民族が継承してきた固有の文化は徐々に失われています。ある人類学者は「十九世紀後半までの地球には数千の文化があったが、現在は二百しかない」とも言っています。文化の総体としての文明の大転換期を迎えた現在、地域の文化・学術をこの授与式によって再認識することは非常に重要であると思われる。

北國新聞社様におかれましては、昨年開館しました赤羽ホールが、すでに北陸文化の発信拠点として定着しています。地域に根ざした文化活動を支える礎として、さらに邁進されることをご期待申し上げます。

受賞された皆様方はそれぞれの分野で創造活動に研鑽され、素晴らしい功績と情報を、地域、さらには世界に向けて発信されましたことに、改めて敬意を表したいと思えます。

これからもどうぞ御自愛の上、後進の指導にも努めていただき、一層の御活躍を祈念申し上げます、お祝いの言葉とさせていただきます。

地域と文化の発展段階

(第64回北國文化賞・第43回北國芸能賞 平成22年11月3日)

本日は、北國文化賞で三名、北國芸能賞にて二名の皆様方が受賞されました。誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

本日受賞された皆さんは、世界の降雪研究に新機軸を開いた方、郷土史などの歴史資源を地域の活性化に生かす活動に力を注いだ方、九谷焼に新境地をもたらし、県内の伝統工芸の発展に尽

くされた方、茶道文化の中心的存在として普及に尽力されている方、芸能分野で研鑽を重ねる傍ら能楽の普及に寄与されている方など、まさに今の時代の文化を担っている方々です。

地域と文化の発展の段階について、劇作家の山崎正和氏は、「地域が文化をつくる時代」、「地域で文化をつくる時代」、「地域を文化がつくる時代」の三段階を経て、新たな発展段階に入りつつあると述べております。今年のJAPAN TENTの基調スピーチで、飛田秀一開催委員会会長は「お国自慢」をメイン・テーマにお話されましたが、新たな第四段階は「お国自慢が文化を育てる時代（～そしてその時代は地域が普遍的文化をつくる時代）」であると述べております。地元住民が誇りを持ち、地域の文化が日本のみならず世界の文化に貢献できる時代ということであり、石川県はCOP10において「SATOYAMAイニシアティブ」で中心的役割を果たし、金沢市は歴史都市、ユネスコ創造都市であり、まさに地域の文化が世界文化に貢献しているわけであり、

本日受賞された皆様方はそう言った地域文化の中心を担っておられます。素晴らしい功績と情報、地域、さらには世界に向けて発信されましたことに、改めて敬意を表する次第であります。これからもどうぞ御自愛のうえ、後進の指導にも努めて頂き、一層のご活躍を祈念申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。本日は、本当におめでとうございます。

自然環境に適応した文化

(第65回北國文化賞・第44回北國芸能賞・北國文化褒賞 平成23年11月3日)

本日、北國文化賞で二名、一グループ、北國芸能賞にて一団体、一名、北國文化褒賞で一名の皆様方が受賞されました。誠にめでとございます。心からお祝いを申し上げます。

本日、北國文化賞、北國芸能賞を受賞された皆様は、真宗の教えや歴史を究めつつ新境地を開こうとする方、加賀友禪の伝統技法を生かしながら独自の美の世界を築かれた方、宇宙の誕生の解明につながる強力な磁場の存在を確認された方々、日本舞踊の伝統を守りつつ次世代の育成に寄与されている方々、洋舞という新しい芸能分野で地域への普及に尽力された方、まさに今の時代の文化を担っている方々です。北國文化褒賞を受賞された大樋長左衛門様には、大樋焼の伝統を継承しつつ進取果敢に世界の意匠を取り入れ陶芸美術に新風を吹き込み、今や日本文化の体現者となられ、文化勲章を受章されました。改めてお祝い申し上げます。このような方々が本日受賞されますことは地域文化・学術を再認識するうえで誠に意義深いものと考えます。また、こうした地域文化・学術を支える事業を長年にわたり続けてこられました北國新聞社様に敬意を表する次第です。

文化という言葉が意味するところは様々であります。文化とはその地域で形成された人間

の生き方・生活様式を中心にし、宗教・芸術、あるいは政治・法律等がひとつの形をもって存在するもの」とも言われています。

人間はそれぞれの地域ごとに自然環境に合わせて生き方・生活様式を変化させ、独自の文化を築き上げ、進化してきました。つまり、自然環境に適応した文化は、将来の社会変化への適応力にもつながり、このような多様な文化は人類の叡智であり財産であります。

都市化・グローバル化が進み、文化の均一化の動きが激しくなるなか、文化の多様性は改めて重要視され、再認識されております。ここ北陸地域は変化に富んだ気候・地理に恵まれ、それゆえに様々な自然条件に適応した地域文化が醸成されています。この多様性豊かな文化はさらに時代の変化・環境の変化に適応し、新たな文化を創造していくものと確信しております。

本日受賞された皆様はまさに地域文化・創造の中心を担っておられる方々であります。素晴らしいご功績をあげられ、皆様のお仕事を、地域、さらには世界に向けて発信されましたことに、改めて敬意を表します。

これからもどうぞご自愛のうえ、後進の指導にも努めていただき、一層のご活躍を祈念申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。本日は、本当におめでとうございます。

世界を魅了するソフトパワー

(第66回北國文化賞・第45回北國芸能賞・北國文化褒賞 平成24年11月3日)

本日、北國文化賞で三名、北國芸能賞にて二名の皆様方が受賞されました。誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

本日、北國文化賞、北國芸能賞を受賞された皆様は、行政の立場から伝統と創造を具現化された方、木工芸に独自の表現技法を確立し県内の伝統工芸の発展に尽くされた方、患者の立場に立った医療の発展を目指しつつ、脳死肝移植及びすい臓がん治療に新境地をもたられた方、華道文化の中心的存在として普及に努めた方、数多くのピアノ奏者を育成され音楽文化の振興に寄与された方、まさに今の時代の文化を担っている方々です。

このような方々が本日受賞されますことは地域文化・学術を再認識するうえで誠に意義深いものと考えます。また、こうした地域文化・学術を支える事業を長年にわたり続けてこられました北國新聞社様に敬意を表する次第です。

学術・文化・芸術は社会の発展の基盤であり、人間生活を豊かにするばかりでなく、人に活力・感動を与える等、様々な力があります。近年では、人々をひきつける魅力や社会の影響をもつ「ソフトパワー」として我が国の国力を高めるものとも言われております。本年、ノーベル賞を受賞

された山中伸弥博士のiPS細胞の開発は、国を超え、医学・医療の発展に多大な貢献をするこ
とは間違いありません。独特な地理的環境と長い歴史の中で培われてきた日本文化・学術は西欧
社会に大きな影響を与えて来ました。前世紀(二十世紀)における、フランスの著名な哲学者コ
ジェーブ(一九〇二―一九六八)は、「階級がなく、互いに争うことが無く、生きる上で過酷な勞
働の必要もない世界では、人は人間であることをやめて動物性に戻るだろう」とのヘーゲル哲学
の解釈を、日本を訪れ日本文化にじかに触れた後、「たとえ、そうした世界でもそこに能楽・茶道・
華道があれば、人は人間のままで留まることができる」と見解を訂正したのです。日本文化には
欧米哲学者の歴史観・人間観までを覆す力を持っていることを思い知らされます。北陸は、変化
に富んだ気候・地理に恵まれ、他に類を見ない歴史・伝統が培われています。ここで醸成された
地域文化には、世界を魅了するソフトパワーの源泉が数多くあるものと確信いたします。北陸か
ら日本文化が力強く発信されることを期待しております。

本日受賞された皆様はまさに学術・地域文化創造の中心を担っておられる方々であります。素
晴らしいご功績をあげられ、地域、さらには世界に向けて発信されましたことに、改めて敬意を
表します。

これからもどうぞご自愛のうえ、後進の指導にも努めていただき、一層のご活躍を祈念申し上
げ、お祝いの言葉とさせて頂きます。本日は、本当におめでとうございます。

クールジャパン

(第67回北國文化賞・第46回北國芸能賞 平成25年年11月3日)

本日、北國文化賞で三名、北國芸能賞にて一組、一名の皆様方が受賞されました。誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

本日、北國文化賞、北國芸能賞を受賞された皆様は、民俗学発展及び能楽普及のために新境地を開き尽力された方、デザインを通して石川の美術のみならず地域の活力向上に寄与された方、がん治療研究に日々研鑽しつつ地域のがん診療の質的向上、均てん化の進展に貢献された方、伝統を守りながらより一層の魅力ある舞踊おどを極めた方、独自の創意工夫を加え民謡民舞の普及及び次世代育成に尽力された方、まさに今の時代の文化を担っている方々です。

このような方々が本日受賞されますことは地域文化・学術を再認識するうえで誠に意義深いものと考えます。また、こうした地域文化・学術を支える事業を長年にわたり続けてこられました北國新聞社様に心から敬意を表する次第です。

最近、世界の人々から日本文化が注目されています。クールジャパンと称され、漫画、アニメ、ゲームなどのポップカルチャーが取り上げられています。ファッション、和食、建築などの生活文化さらには歌舞伎や能などの伝統文化へと関心が広がられています。日本文化に憧れを抱き、

日本文化に触れたいと日本を訪れる外国の方が増えています。

世界の人々を魅了する日本文化の特性について私なりに考えてみました。有史以来、大陸などから滔滔と流れ込んできた変化の大波の中、貪欲に外国文化を吸収しつつも、それらの奔流に飲み込まれることもなく築かれた独自性、変化に富んだ気候、複雑な地形の自然環境で醸成された多様性等が考えられます。

しかし、根底にあるのはそのような中で培われてきた日本人の気質（人間性）ではないでしょうか。未曾有の被害をもたらした東日本大震災後、その恐怖と不安の中で日本人が見せた自己犠牲、忍耐力、思いやり、向上心は世界中の多くの人に驚き・感動を与えました。日本人の気質（人間性）そのものが日本文化であり、生活文化や伝統文化にも織り込まれ、現代文化に今もお息づいているのでしょう。二〇二〇年東京五輪には世界中の人々が日本そして北陸にも訪れます。まさに日本文化を発信するには絶好の機会となります。本日表彰された方々は元より、我々も日本人として胸を張って日本文化を発信していきたいものです。

本日受賞された皆様はまさに学術・地域文化創造の中心を担っておられる方々であります。素晴らしいご功績をあげられ、地域、さらには世界に向けて発信されましたことに、改めて敬意を表します。これからどうぞご自愛のうえ、後進の指導にも努めていただき、一層のご活躍を祈念申し上げます、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は、誠におめでとうございます。

14

高峰賞授与式祝辞

今日胸に抱く憶

(平成25年11月30日)

高峰賞受賞者の皆さん、奨励賞受賞者の皆さん、受賞おめでとうございます。また、受賞された生徒諸君のご家族の方々、指導にあたられた先生方も、さぞお喜びのことと存じます。併せてお祝い申し上げます。

今年には高峰譲吉博士の生誕百六十年にあたり、高峰賞は六十三回目となります。金沢が生んだ偉大な科学者であり国際人である高峰譲吉博士のご功績を顕彰する目的で、一九五〇年、金沢市に高峰譲吉博士顕彰会が結成され、その事業の一つとして、高峰賞が制定されました。以来高峰賞は、昨年までに八百十名の方々に授与され、受賞者の方々は各界で活躍しています。この度受賞された十二名の皆さんは新たにこの方々の仲間となります。

今から百十三年前、高峰博士と助手の上中啓三は、牛の副腎からアドレナリンの結晶抽出に成功し、世界で初めて、ホルモンを純粹な物質として手にしました。高峰博士がアドレナリンを結晶化した時代は、今と違い、高度な科学機器もありません。体を構成している物質を、しかもホルモンというその存在が非常に少ない物質を結晶化することは、困難を極めたことが容易に想像できます。しかし、高峰譲吉博士は信念の人でした。一旦、目標を決めると、そこに向けて日夜

努力し、ついにアドレナリンを結晶化しました。

私は、高峰賞受賞者という意味では、皆さんの先輩にあたります。今から五十二年前、高校三年の時に、高峰賞をいただきました。当時の副賞は腕時計でしたが、この時計は修理しつつ、今なお私の腕の上で時を刻み続けています。困難に会うたびに、高校時代の若き胸に刻まれた志を思い出し、自らの道を励んできました。

人は成長するにつれ、一人になって、主体的に物事を考えていくように育っていきます。あなた方は、今がご両親に多くを学び、ご両親から多くの影響を受けながら、日々成長していることでしょう。しかし、間もなく、自己を確立し、自ら考え、親と異なる自らの道を歩み始めます。歩んでいく中で、多くの困難に出会うはずですが、その時、高峰賞を受賞したこと、今日胸に抱く^{おもい}憶は、必ず困難を克服する糧となるものと信じています。

最後になりますが、受賞された皆さんには、チャレンジする心とこの場で噛みしめている感激を胸に刻み、志高く歩まれることを祈念し、お祝いの言葉と致します。本当におめでとうございました。

所信表明
退任挨拶

所信表明

(平成20年4月1日)

本日より今後六年間、学長として金沢大学の運営にあたることになりました、中村でございます。

二十一世紀初頭の今、大量生産・大量消費をパラダイムとする工業文明は終焉を迎えつつあり、我々の世界観のもととなる認識、思考、そして価値観が大きく転換しつつあります。この現状認識を踏まえて、大学運営にあたる所存です。教育、学問、科学において、地球との関わりにおける人間と、人間性、人間愛に強く思いを致し、教職員の和をもって、切磋琢磨したいと思えます。

平成十六年四月に国立大学法人に移行した本学は、金沢大学憲章に則り、第一期中期目標・中期計画を策定しました。この間、教育組織の改革やキャンパスの移転整備などを、順調に実施してきました。これからは、第一期中期目標・計画の総仕上げと、平成二十二年から始まる次の中期目標・計画に向けて、大学運営を進めることとなります。

その柱となるのは、一つには、本日から始まる、新たな教育組織です。

我が国でも例を見ない教育組織の先駆的な改革である、「三学域・十六学類」の実質化を図り、新しい総合大学として発展させることです。

教育の中核は、自らの主体的な生き方を創造できる能力の育成であり、これは、深い教養を自ら育むことにより達成されるものと信じています。学生は、人間と歴史、文化と科学について広く学び、深く思索することにより教養を深め、教員は人間性あふれる教育をすることにより、教養の涵養を助けます。これが、全ての専門教育の基礎となるものと確信しています。

二つには、国立大学法人化以後、国公立大学が法人という同じ土俵に立ってしのぎを削っています。このような状況下で、これまで計画的に築いてきた国立大学の使命と責務を、如何にして維持・発展させていくかが肝要です。

「三学域・十六学類」の実質化とともに、研究領域における「強み」を更に伸ばし、「研究の拠点化」を図り、そしてそのことにより萌芽的研究も支援・強化し、研究全体の浮揚を目指します。また、「教育重視の研究大学」として、優秀な教職員の確保と、その資質の向上を目指した研鑽により、「教育研究の質の向上」と、それに基づく「より質の高い学生・研究者の輩出」という「正のスパイラル」を築いていきます。

この目的に向かって、私は五つの柱からなるビジョンを掲げました。それは、「我が国ベスト10大学を目指すこと」、「次世代の優秀な人材を育成すること」、「世界的な教育研究の拠点となること」、「リージョナルセンターとして機能すること」、そして「法人としての自主的・自律的な運営を行うこと」です。

教育と研究へのビジョンを数値化したものが、十年後日本のベスト10大学になるという目標です。ベスト10とは、大学評価の種々の指標がベスト10に入り、皆さんがベスト10と実感できる大学になることです。最も肝要なことは、目標に向けて、自分たちの大学は自分たちで造るという気概を持つことです。これは、情報を共有化し、全ての教職員が互いに尊敬しあう意識を持って、建設的議論を拡大すること、そして適切な組織体制の構築と人事の運営を行なうこと無くしては達成できません。皆さんの自律的な参加と協力を仰ぐ次第であります。

金沢大学があなたのために何をしてくれるかではなく、あなたが金沢大学のために何ができるかがあります。

さて、大学は、地域社会と離れては生きていきません。そのためには、互いの立場を尊重し、その存在価値を認め合う、イコール・パートナーシップを常に心に持って、医療を含めた地域貢

献を展開することが大切です。これを胸に刻み、地域と世界に開かれた大学として、一層の人的交流、教育交流、研究交流を推進して参ります。

これらの基礎的姿勢のもと、総合大学として、リージョナルセンターとしての地域中核的役割を果たすと共に、ナショナルセンターとなるべく、私に託された六年間を邁進する所存です。

日本国内三番目に長い歴史を有する我が金沢大学は、また、三番目に広いキャンパスを有し、そこには素晴らしい教育研究環境が整備されました。そして新たに始まる「三学域・十六学類」における教育からは、広く世界が必要とする人材、課題の山積する社会を自ら改革する優れた人材が育っていくことでしょう。また、地域がバックアップする中で世界的教育研究拠点が形成され、萌芽的研究が光り輝き、さらには企業との共同研究が生き生きと展開されていくことにもなるでしょう。

以上述べました中村の抱負を実現していくための歩みを、皆さんと共に進めて参りたいと思っています。

退任挨拶

(平成26年3月31日)

遠い将来において到来するかもしれない、過酷な労働の必要もなく衣食住が満たされる時代においても、金沢大学は、多くの人が集い、「知の継承・知の創造」に満足を見い出す場、「内在的価値としての教育研究」が光り輝く大学であるよう願っています。

学問の 実りあれかし 楷新樹

任期中のおもな国内外の出来事

平成 (年)	出 来 事
20	(月・日) 9.15 リーマン・ブラザーズが破綻
21	1.2 バラク・オバマ第44代アメリカ大統領就任 9.16 民主党へ政権交代「コンクリートから人へ」
22	3 宮崎県で家畜伝染病の口蹄疫発生 6.13 小惑星イトカワから「はやぶさ」が帰還
23	1.14 チュニジアのベンアリ大統領による独裁政権の崩壊 (H.22～24 アラブの春) 3.11 東日本大震災
24	2.29 国家公務員給与7.8%削減法成立 12.26 自由民主党へ政権交代
25	6.22 富士山が世界文化遺産に登録 9.7 2020年東京オリンピック開催決定
26	2.7～9 北陸新幹線E7系車両の試乗会

中村信一（なかむら・しんいち）
1944（昭和19）年金沢市生まれ。
医学博士。



1968年金沢大学医学部医学科卒業。同大学院医学研究科博士課程（微生物学専攻）入学後、71年から1年間、米・バージニア州バージニア工科大学嫌気性菌研究所へ留学。73（昭和48）年に同博士課程修了後、同大医学部助手、講師、助教授、教授を経て98（平成10）年に医学部長、2002年副学長（研究・環境担当）を歴任。法人化した04年には理事（財務担当）・副学長。05年からは理事（病院担当）・副学長を務め、08年に学長就任（任期6年）。専門分野は医学細菌学、クロストリジウム学。

寺町まつすぐ

二〇一四（平成二十六）年三月二十五日発行

著者 中村信一

制作 北國新聞社

石川県金沢市南町二一

電話〇七六一二六〇―三五八七（出版局直通）

〒九二〇―八五八八

メール syuppan@hokokoku.co.jp

©Shinichi Nakamura 2014. Printed in Japan

本書の記事の無断複製・転載は固くお断りいたします。

